
仮面ライダー電王×魔法少女まどか マギカ ~未来へ続く願い~

ウェイカップ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王×魔法少女まどか マギカ ～未来へ続く願い～

【Nコード】

N6472T

【作者名】

ウェイカップ

【あらすじ】

親友を破滅の運命から救うため、少女はただ一人、幾度も時を『繰り返す』 人の記憶という時間を守るため、青年は仲間と共に、幾度も時を『飛び越える』 『魔法少女』と『時の戦士』。ありえないはずの交錯は現実となり、新たな未来への線路がここから始まった 時を超えて、願いが参上する！（仮面ライダー電王×魔法少女まどか マギカ）

プロローグ『繰り返す少女、飛び越える青年』（前書き）

・電王は映画『ファイナルカウントダウン』終了後。良太郎は大人サイズ（佐藤健Ver）なんだよ。

ディケイドみたいなリ・イマジとかじゃねえ、真正正銘の野上良太郎だ。文句あつか！？（by赤い鬼）

・まどか マギカは幾度目かの時間移動を行った後の話。本編とほぼ同じ世界観らしいね。

時間移動・・・凄い！ゾクゾクするねえ！（by探偵の片割れ）

・ストーリーはまだマギ中心。時折オリジナルストーリーが入る予定だと？

ふん、どれだけ入る事が・・・しかし、いい欲望だな（by鳥のグリード）

・最初に言っておく！ゼロライナー組は本編登場はかゝり未定だ！（by錆びた？仮面ライダー）

・おばあちゃんが言っていた・・・展開を変える事が希望に繋がると・・・つまり、可能な限り鬱展開は無くすという事だ（by天の道）

ゲストの皆さま、ありがとうございます。では、どうぞ！

プロローグ『繰り返す少女、飛び越える青年』

「また…助けられなかった…」

崩壊した街並みをただ一人で見つめ、私はつぶやいた。

朽ちた建物、もはや形を成していない道路、地下の水道管が破裂した影響で、周囲に溢れる夥しいほどの水。

この見るに耐えない破滅の光景の原因となった物は既に飛び立ち、周囲には静寂が訪れる。

周囲を見渡しても動く人は誰もいない。

いえ…いるはずがないわね。

あの圧倒的な力を前に、抗えるものなどありはしないのだから。

例え自衛隊が出動し、ありったけのミサイルを叩きこんだとしても、『あれ』には全くの無意味だから。

そう…なぜなら『あれ』は、夜そのもの。

生きる全ての者に絶望を振り撒く存在。

誰もがが見上げるあの暗い天空に、攻撃を繰り返して意味があるの？

拳銃を、レーザー砲を、仮に核爆弾を撃ちこんだとして、意味があるの？

あるわけがないわ。

夜は何も変わらず、静寂を保ったまま、何事もなかったかのようにそこにあり続けるのだから。

「そして、私はまた繰り返す…」

誰に言う訳でもなく呟き、私は自らの『力』を呼び起こす。

左手に装着している円形の盾に力を注ぎ、そこにはめこまれた時計が無機質な音を立てた。

それは、私の決意の証。

それは、私が背負った宿命の音。

それは、私にのみ与えられた、世界の理を覆す力。

「絶対に諦めない…何回繰り返す事になっても、決して出口の無い迷路だろうと、私はあの子を救い出す…！」

時計がもう一度音を立てた次の瞬間、私はこの世界から消失した。

そして、私は再び『一カ月』をやり直す。

あの子と誓った、あの約束のために。

「それじゃあ、ここでお別れだね」

僕の目の前には、1人の男の子と青い色の変わった形の人がいる。

信じられないけど、男の子の方は僕の『孫』だ。

あつ、僕がそれなりの歳のおじさんって訳じゃないよ？
見た目が老けてるって訳でもないし、何より僕はまだ20歳にも
なつてない。

それでも彼は僕の孫…理屈じゃないんだけど、初めて会った瞬間
に分かったんだ。

間違はなく、僕の血を分けた存在なんだって。

「ああ。まったく、もうこんな事で呼ばないでくれよ？」

「あはは。ごめんね」

「まあ…俺も色々勉強になったから。楽しかった…けどさ」

彼が頬を掻きながら言う…何の事だろう？
後でみんなに聞いてみようかな。

「おおい！そろそろ出発するぞお！」

「あつ、うん！」

後ろから聞こえた声と同時に、僕が乗る物が音を立て始めた。
何度も聞いたその音は、僕らの別れを告げる音。

そして普通なら決してありえない、ある行動を可能にする合図。

僕の足元がゆっくり動きだし、彼の姿が少しずつ遠ざかる。

僕は思い出したように手を伸ばした。

彼も手を伸ばし、二つの手が重なり合う。

「それじゃあ、本当にありがとう！」幸太郎！」

「ああ！また後でな！」じいちゃん」！！」

僕と彼：幸太郎の手が離れ、同時に僕の体は空へと浮かび上がった。

そして僕は、『20年以上』の時間の波を超える。

僕の過ごす、あの時間に帰るために。

少女が『繰り返す』時間。

青年が『飛び越える』時間。

全く別の時間で行われた、時に干渉する二つの事象。

それは、新たな始まりへの道標。

時を超える『仮面の戦士』と、時を繰り返す『魔法少女』との邂逅へのカウントダウンとなった。

次回予告

僕らが守った時間が未来に続いている…それが嬉しくてさ

時間が、逆転していますねえ…！

…暁美ほむらよ

第1話『この時代に閉じ込められたって事？』

時を超えて、願いが参上する！

プロローグ『繰り返す少女、飛び越える青年』（後書き）

初めましての方は初めまして。お馴染の方々はおはこんばんちわ。ども、ウェイカップです！

以前、自分の活動報告で告知だけしておりましたが、遂に連載開始の運びとなりました。

改めてご説明しますと、当作品は『仮面ライダー電王』と『魔法少女まどか マギカ』のクロスオーバーとなります。

ここでそれぞれの作品の今作が始まるまでの簡単な経緯。

・電王

映画『ファイナルカウントダウン』の終了直後。

未来の世界にNew電王こと野上幸太郎を送り届け、良太郎の時間に帰る所から。

今回の話にあった幸太郎との掛け合いは、きっとこんな感じだったろうと作者の妄想です。

テディよ、セリフがなくてごめんなさいorz

あつ、未来組の出番はこれで終わりですw

・まどマギ

メインヒロインは暁美ほむらこと、僕らのほむほむ。しかし自分は激しくマミさん派。

上記の理由は全く関係ありませんが、ほむほむはメインヒロインの待遇をほとんど受けませんw

それとここが一番重要な所・・・と思いましたが、あとがきがかなり長くなってしまっんで、

この続きはまた、同時投稿の第1話のあとがきで。

では、感想お待ちしております。

第1話『この時代に閉じ込められたって事?』 1（前書き）

7 / 10 文章表記を一部変更

第1話『この時代に閉じ込められたって事?』 1

窓から外を見ると、そこに流れているのは遠くまで広がる砂と岩の世界。

普通なら青いであろう空も紫がかっており、普通の世界ではあり得ないであろう光景。

初めて見る人が見れば呆然とするであろう荒野の中を走る、一台の赤い列車があつた。

列車といつても、」線でも東京メトでもない。

「じゃあ 幹線?」といったオチでもなく、とにかく列車だ。

ただし、その列車が走るのは普通の線路ではない。

過去・現在・未来を行き来する時の路線 それが、この列車

『デンライナー』が走っている路線。

つまり、デンライナーとは列車型のタイムマシンである。

そんな奇想天外な乗り物であるデンライナーの中から外を見るのは、1人の青年。

最近伸ばし始めたという黒髪と、温和そうな表情を浮かべながら外の景色を眺めている。

「どうしたんだ『良太郎^{りょうたろう}』? んなボケーっと外なんか見ててよお」

青年 『野上良太郎^{のがみりょうたろう}』にドスの効いた声をかけてきたのは、

真っ赤な全身の人物…というか、鬼であつた。

それも子供のお遊戯会や節分に誰かがかぶるような気ぐるみでは

なく、正真正銘の肉体を持つ赤鬼だ。

彼の正体は『イマジン』と呼ばれる、遙か未来からやってきた、過去の時代の改変を目論む侵略者。

過去を破壊し、未来を自分の住みやすい世界に変える事を目的としているのだ。

と聞けば聞こえは悪いのだが、この赤鬼 『モモタロス』と他にもいる良太郎の仲間達は、そのような企みなどこれっぽっちも持っていない。

彼らは良太郎と共にデンライナーで時を超え、彼と共に侵略を目論む他のイマジン達と戦い、幾度も時を守ってきたのだ。

特にモモタロスは良太郎との付き合いも長く、共に様々な困難を乗り越えてきた相棒と言っても過言ではない。

「うん、彼の…こうたろう幸太郎の事、思い出しててさ」

「やっぱ気になんのか？ 自分の孫の事がよ」

「はは、そりゃあね。まさかこの年齢で、僕の事をおじいちゃんって呼ぶ人に会うなんて思わなかったし」

モモタロスの脳裏には、未来の良太郎の孫『のがみこうたろう野上幸太郎』の姿が浮かぶ。

最初は祖父である良太郎を小バカにし、モモタロス達にも険悪な態度で接していたが、彼と出会うきっかけとなったある事件を経て良太郎とも和解し、先ほど未来の世界へ送り届けたばかりだ。

それと同時に、いつのまにかデンライナーからいなくなった白鳥

型のイマジンもいたが、こっちに関してはいつも通りなので問題ない。

またその内ひょっこり現れて『降臨！満を持して！』などと言うだろう。

「それに、僕らが守った時間が未来に続いてる…それが嬉しくてさ」

「あつたりまえだろうがよ。今更何言ってるんだお前は」

「あはは、そうだね」

立ち上がった良太郎は、モモタロスの横を通り、最後部に座っていた一人の男性の前に立つ。

スーツを着こなし、華麗なスプーンさばきで食事を口に運ぶ男性。彼こそ、このデンライナーの全てを取り仕切る『オーナー』である。ただし本名は不明。

良太郎はオーナーが口元を拭いたタイミングに合わせて、深々と頭を下げた。

「オーナー、今回はありがとうございました」

「いいえ。良太郎君には、こちらこそお世話になりましたからねえ。アフターサービスというやつです。た・だ・し！」

手にしたステッキを素早く良太郎の懐に突っ込んで引き抜く。いつのまにかそのステッキの先端には黒いパスケースが引っ掛

けてあり、宙を舞ってオーナーの手に収まった。

「今回は良太郎君を助けるという緊急事態のために貸しましたが、本当なら君はもうデンライナーを降りている身ですので、パスはこちらで回収させていただきます。」

これから良太郎君の時間に戻り、良太郎君には降りいただきます。よろしいですね？」

「…はい」

「つて、良太郎！いいの？」

オーナーの発言に頷いた良太郎に返してきたのは、小学校高学年ぐらいの年齢の黒髪セミロングの少女。

モモタロス達と共に、デンライナーで様々な時間を旅する少女「ハナ」だ。

本来なら良太郎より年上なのだが、今はとある事情でこの小ささとなっている。

「いいんだハナさん。今回みたいな事がない限り、僕を狙う人なんていないだろうし。」

オーナーの言うとおり、僕は僕の時間に帰らなきゃ」

「でもでも！それじゃ、また良太郎と離れ離れになっちゃうって事！？僕、そんなの嫌だよ！！」

突如割り込んできた、子供のようなしゃべり方。
紫の龍という姿をしたイマジン『リュウタロス』が言う。
それに続いたのは、青い亀の姿の『ウラタロス』と、金色の熊の
ような姿の『キンタロス』だ。
彼らもまたモモタロスと同じように、良太郎にとってかけがえの
ない仲間だ。

「リュウタ、良太郎には良太郎の時間があるんだよ。
それに、永遠の別れって訳じゃないんだし、会おうと思えばいつだ
って会えるじゃない」

「そうやで。ワガママ言つて、良太郎を困らせたらアカン！」

「うう…でもお！」

「リュウタロス、大丈夫だよ」

良太郎がリュウタロスの前に立ち、頭を撫でた。

「みんなが僕を助けに来てくれた。それだけで、僕は本当に嬉しい
んだ。

また離れ離れになっちゃうけど、みんなに何かがあったら、僕は必
ず駆けつける」

「…本当？」

「うん。約束するよ」

笑顔で答える良太郎にリュウタロスもしばらく黙っていたが、やがて「分かった…」と小声で答えた。

その時だった。

突如、デンライナーを巨大な振動が襲ったのは。

「う、わ！」

「っ！良太郎、捕まり！！」

突然の事に倒れそうになった良太郎の手をキンタロスが掴み、近くの椅子に捕まらせる。

「あ、ありがとうキンタロス…！」

「まかしとき！しかし、なんやこれ！？」

「この揺れ、ちょっとただ事じゃないんじゃない…！？」

「って、ウラ！あんたどこ触ってんのよっ！」

ハナを抱えたウラタロスが答え、揺れは一向に収まる気配がない。モモタロス達が飲んでいたコーヒークップは落下して無残に割れ、

オーナーの食器やスプーンも床にぶちまけられ、更に揺れは強さを増す。

「おいオッサン！どうなっただよお！？」

「あ、ああ！みんな、外見てえ！！」

ハナとは違う、もう1人の女性。

デンライナーの乗務員である『ナオミ』が、窓から外を見て叫んだ。

全員が机や壁に手をつきながらもどうにか窓から外を見ると、そこから見える光景は、いつもの砂と岩の光景ではなくなっていた。砂は舞い上がり、岩は砕け散り、周囲の景色すら巻き込んで、竜巻などというレベルでは表せないほどの回転を始めていた。

半時計周りにまるでかき混ぜるかのように景色がめぐるしく変わり、徐々にその歪みが巨大な物となっていく。

「これ、って・・・！」

デンライナーやモモタロス達と関わりを持ってから何度も時の中を移動してきたが、今まで見たこともない光景に、良太郎も戸惑いを隠せない。

それはしばらく離れていたモモタロスやハナ達も同じらしく、全員がこの景色に絶句していた。

「おいオッサン！」

「時間が、逆転していますねえ…！」

「時間が…逆転？」

聞き慣れないオーナーの発言にハナが聞き返す。

「そのままの意味です。時間そのものが、何らかの力により逆転している。

どうやらデンライナーは、その逆転している時間の中に入り込んでしまったようです…！」

「ど、どういうことだぁ！？」

モモタロスの怒鳴り声に合わせるかのように、更に大きくなる振動。

それも先ほど比ではなく、あまりの衝撃にデンライナーの車体までもが持ち上がっていた。

「な、なんやぁ！？」

「うわー！飛んでるー！」

「リュウタ、そんなはしゃいでる状況じゃないって！」

「や、やべえ…俺、酔ってきた…」

「こらあ！あっち行けバカモモー！！」

全員が冷静さを失う中、良太郎はとうにかねじれの中心を見続ける。

「な、何が起きてるんだ…！？」

良太郎のその言葉を合図に、最大級の衝撃がデンライナーを襲う。それを最後に、良太郎は意識を失った。

「…ろっ…りよう…良太郎！」

「う、うっ…」

自分と呼ぶ声がかすかに耳に聞こえ、良太郎はゆっくりとまぶたを開く。

最初はぼやけていた視界がゆっくりと開き、目の前にはモモタロスの顔があった。

「おっ、目が覚めたか良太郎！」

「…モモ、タロス？」

体を揺すっていたのであろうモモタロスの手を借りて、ゆっくりと起き上がる。

少しだけ痛む体を気にかけて周囲を見渡せば、同じように起き上がってきたハナやウラタロス達の姿。

見た所全員無事のようがだ、デンライナー内はひどい様子だ。

あちこちに椅子やテーブルが散乱しており、キンタロスとリュウタロスが割れた皿を拾い集めている。

「えと、どうなったの？」

「俺が知るかよ。今、オッサンとナオミが他の場所の様子を見に行ってるがよ」

「ダメですねえ」

「うおっ！？」

いきなりの声に振り返ると、いつのまにいたのか、たった今話題に上がっていたオーナーの姿が。

ナオミもその後に続き、盛大にため息をついている。

その様子に嫌な予感を感じながら、良太郎は声をかけた。

「あの、オーナー。ダメって、何がですか？」

「デンライナーの機関室が、先ほどの衝撃でかなり壊れてしまってますねえ。」

これは、時間を移動する事が出来ませんねえ」

「時間を移動できないって…ちょ、ちょっと待って下さい！って事は…！」

ハナが全員の言葉を代弁するかにように言う。

オーナーの無言がその問いに対する答えとなり、良太郎が決定的な言葉を呟いた。

「僕達…この時代に、閉じ込められたって事？」

第1話『この時代に閉じ込められたって事?』 1（後書き）

ども、ウェイカップです。

同時投稿となりました、本編第1話の『その1』ですw

では前回のあとがきの続き。一番重要な所・・・の件ですね。

自分は、まどか マギカのアニメを一話たりとも見ておりません。

全体のストーリーと各魔法少女の能力などは、wikiを中心に補完。

各作者様が執筆されてます、まど マギ小説も参考にさせていただきました。

主に参考にさせていただいたのは・・・

一条ツカサ先生作『仮面ライダー 龍騎 マギカ・願う未来を呼ぶ魔法』

ボロット先生作『仮面ライダー×魔法少女 龍騎&まどか 孤独くいま>を変えるは龍の騎士』

神尾そら先生作『コネクトおもちゃ箱 魔法少女まどか マギカ』

他にも数多くの作者様の作品を拝見させていただきました。

この場を借りてではありますが、お礼を申し上げます。いただきます。

世間では『龍騎とまどマギは似てる』と多くの話を聞きますが、ほむらが時を超えてまで大切な人を守りたい決意を持っていると初

めて知った時に自分が思ったのは、『電王の桜井さんじゃないか？』でした。

当初はプロローグで桜井さんを登場させて絡ませようとも思ったんですが、

後日投稿予定の話（既にストックとして執筆済み）との兼ね合い上、ここで電王や時の列車の話をほむらが知ってしまうと色々不都合なので、

ほむらはまだ電王関係の話を全くもって知りません。

今回執筆するにあたりまして、携帯から見られる方々のためにと、初めて『改ページ』のタグを使ってみました。

というか、改ページタグの存在を知ったのが、これの執筆開始後という体たらく・・・orz

以後の当作品ならびに、同時連載中の各作品においても使っていきたいと思います。

では、ご感想お待ちしております。

第1話『この時代に閉じ込められたって事?』 2 (前書き)

7 / 10 加筆修正

第1話『この時代に閉じ込められたって事?』

2

「閉じ込められたって……！ 待てよオッサン！ 俺達どうなるんだ！？」

良太郎の発した呟きにオーナーが無言で頷き、事実を知ったモモタロスが詰め寄る。

詰め寄らないものの、ウラタロスやハナ達も気持ちは同じだろう。しかしオーナーはいつもの笑みを浮かべて椅子に座ると、ナオミに向けてこれまたいつものように手を上げた。

「ナオミ君。チャーハンお願いします」

「はい」

「って、チャーハンなんか食ってる場合かあつ！ オッサンだってここから抜け出せねえ」

相変わらずのペースに突っかかるモモタロスだが、オーナーは懷から抜き取ったステッキをモモタロスの眼前に突き出した。

『瞬きをする間』というのは、このようなスピードを表すべき言葉だろう。

モモタロスからすれば、1秒にも満たない速度でオーナーの腕が動いたと思ったら、次の瞬間には自分の眼と鼻の先に黒いステッキが突きつけられていた。言葉を失くして当然だ。

一方のオーナーは笑みを浮かべたままステッキを手のひらで優

雅に回転させながら懷に戻すと、同じように取り出した布のケースの封を開き、中にしまつてあつた10本以上のスプーンの1つを手にとると、同梱されていた真新しい布で磨き出した。

「話は最後まで聞いてくださいねえモモタロス君。

あくまで故障しているだけです。時間をかければ修理は十分可能ですので、その点に関してはご安心下さい」

「だったら先にそれ言えよ！ まどろっこしいだろうが！」

オーナーの発言に全員が一斉に安堵のため息をついた。

それに合わせ、リュウタロスがモモタロスを横にどかすと、いつもの子供っぽい口調で問う

「でさ！ ここつてどこなの？ 時間の中？」

「断定はできませんが、おそらく良太郎君の時間にほど近い時間のどこかの場所でしょう」

スプーンを磨く手は止めず、窓から見える景色を目で指しながら答える。

それに気付いた全員が、同じように外の景色を眺めた。

窓から見えているのは、晴れ渡る青空と白い雲。デンライナーの周りには見渡す限りの森。

すぐ傍を小川らしき水源が流れており、さしずめ自然に出来たキャンプ地といった印象か。

「どこかの山の中…かな？」

「オーナー、外に出てもいいですか？」

「構わないですよ。ただし、この時間には極力干渉しないように。いいですね？」

「分かりました」

「よっしゃあ！ そんじゃあ俺たちも」

「残念ですが、モモタロス君達にはこちらの片づけをしていただきますので」

良太郎に続いて外に出ようとしたモモタロスの動きが停止した。

後方にモモタロス達の悲痛な声を聞きながら、良太郎とハナがデスライナーから降り、実際に周囲の景色を見渡した。

森といっても鬱蒼としたジャングルといった物ではなく、ほどよい高さと開けた景色。

鬱陶しい訳でもなく、かといって殺風景すぎないほどに切り揃えられた草木。

明らかに誰かの手が加えられており、ピクニックに来るならちよ

うどいいと思わせる場所だ。

ハナが目を閉じて手を広げ、木々によって生み出される新鮮な酸素を肺一杯に吸い込む。

「空気がおいしいわねえ…良く見ると手入れもされてるみたいだし、誰かの私有地かな？」

「どうだろう…とにかく、少し歩いてみようか」

一度デンライナーに戻って断りを入れようと思ったが、『イヤだあ！俺も外行くんだよあ！』と、子供じみたモモタロスの声が聞こえ、顔を見合わせて苦笑しながらデンライナーから歩き出した。

しばらく周囲を確認しながら森の中を進んでいくと、やがて舗道された山道へとたどり着く。

振り返ればかろうじてデンライナーの特徴的な赤い外観が見えており、よほど注意して見なければ分からないほどだ。

「どうやら、誰もいない場所って訳じゃなさそうね」

「そうだね。えと…こっち、かな？」

足元に見える真新しくはない足跡を確認すると、山道を下る形ではばらく歩く。

先ほど森から出てきた所にはちょうど看板が置かれていたので、目印としてかなり分かりやすかったので安心だ。

しばらく2人は景色を眺めながら歩を進め、やがて森が開けると別の景色が姿を現す。

「うわあ……」

その景色に思わず口を開く良太郎。

眼前に広がるのは、開発が進んでいるのであろう大きめなショッピングモールらしき大型の建物。

街の中心部には電波塔と思われる、一際高く、細い先端の造形物。その周囲には駅と思われる建物に、豆粒ほどの大きさが生徒らしき子供達が見える学校、自然が色濃く残る住宅街。

それはここが未知の時間という訳ではなく、間違いなく人が住んでいるという証明でもあった。

更に良太郎達が下ってきた山道のちょうど入り口であろう場所に、周辺の地図の看板が置かれていた。

山と共に眼下の町並みまで描かれたその地図の上には、町の名前であろう名称のプレートが掲げられている。

「『見滝原町』^{みたきはらまち}……あの町の名前かしら？」

「多分そうじゃないかな。でも、聞いた事ないけど」

文字からして日本というのは間違いはないが、聞いた事のない地名に首を傾げる。

その時、たった今通ってきた山道から、突如光の球体が飛来。

飛んできた光に驚く事はなく、光は良太郎達の前の地面に着地し、瞬間、地面から何かがせり出してきた。

地面からは上半身、その真上から下半身を生やした、砂状の体と色をしたモモタロスだ。

現実世界におけるイマジンは、デンライナー内のように実体を保持することができない。

故に先ほどの光の球体か、このような砂状の姿での行動となってしまう。

モモタロス達は良太郎との繋がりが深く、体を構成する記憶の力が強いために現実でも実体を保つ事は可能なのだが、人がいるであろう場所ではさすがに怪しまれる風貌なので、光の球体での行動が基本となっていた。

「あれ、モモタロス？デンライナーは？」

「どうにかオッサンに話つけて、一日ずつ交代で休みて事になってな。初日は俺の番って訳だ」

「あんた、本当に片付けとか嫌いよねえ……」

「うつせえ。んで、そっちはどうだよ？」

「あ、うん。人はいるみたいだね。どこかの街のすぐ傍に出てこれたみたい」

モモタロスも眼下の街を見下ろして確認する。

「で、様子でも見に行くか？」

「そうだね…ここがどの辺りの時間かも知りたいし。ハナさんも行く？」

「うーん、オーナーが入れば大丈夫だと思うけど、リュウタが悪戯しないとも限らないし、今日は戻っておくわ」

「分かった。それじゃあ、僕とモモタロスで行ってくるよ」

「そんじゃ、行るか良太郎！」

モモタロスは再び光の球体となり、そのまま良太郎の体に入り込んだ。

精神体であるイマジンは、こうして人の体に憑依する事で、その体に乗っ取って意のままに操る事が出来る。

しかし、良太郎はイマジンの支配を自分の意識で跳ね返す事が出来る。

それは彼が、ある特殊な特性を持つ存在であり、イマジンを初めとした『時』の影響を受けない力を持っているからだ。

ハナが再び山道を登っていくのを見送る中、思ったより傾斜が高かった山道を見て冷や汗を流す。

「でも、この山道また登るの嫌だなあ…」

『つべこべ言ってんじゃねえよ！ さっさと行くぜ！』

頭の中に響くモータロスに引つ張られるように、良太郎は整備された道を下っていった。

良太郎とモータロスが街に降りて一時間ほどが経過。

情報を探すなら、人の多い場所を探すべし。と、どこかの雑誌で読んだことがあった2人は、見滝原駅前の繁華街へと到着。

周囲を歩く人々の波を見ながら、ベンチに座って息を吐いた。

その手には先ほど購入した今日の新聞が握られていた。

新聞に記載された日付は『20××年 10月16日』。

内容を軽く確認し、自分が暮らしていた時間とそう大差がない事を確認するが、やはり見滝原という地名に心当たりは無かった。

諸事情によって高校を中退している身ではあるが、それでも全国的主要都市の名前ぐらいは普通に分かる。

「やっぱり聞いたことないなあ、見滝原って…」

『いいじゃねえか。すっげー昔や知らねえ外国に飛ばされるよりは遙かにマシだろ』

脳内に聞こえるモータロスの声。

人ごみの中で砂状でいるわけにもいかず、良太郎に憑依したままの状態だ。

「それはそうなんだけど…」

『…どうした?』

「うん、なんとなくなんだけど…」

繁華街を歩く人々の様子を見ながら呟く。

子連れの母親、仕事中等であろうスーツの男性、学校帰りであろう学生服の集団。

そこに見えるのは、どの時間にも存在する日常の風景。

しかし、良太郎の中には何かが引っかかっていた。

(なんだろう、この感じ…上手く言えないけど、何か変だ…)

良太郎の中で何かが訴えていた。

この街、この時間、この世界。全てが良太郎という存在を拒絶しているという、違和感とも違う何かが。

その様子に気付いたモモタロスが中から声をかける。

『おい、何ボーツとしてんだよ?』

「あ、ごめん…とりあえず、ナオミさんに頼まれた事だけ調べたら、みんなにジュースでも買って戻ろうか」

『よっしゃあ! プリンも忘れんじゃねえぞ!』

ベンチから立ち上がると、もう1つの目的を達しようとして歩き出す。その時、横手の裏路地から飛び出てきた一人の影。突然の事で反応が間に合わず、良太郎は出てきた人物とぶつかってしまった。

「わ、わわっ！」

「っ！」

体勢を崩してしまい、尻餅をついてしまう。

『何やってんだよ』とモモタロスの呆れた声が頭に響く中、飛び出してきた少女はなんとか体勢を保ったのか、座り込んだままの良太郎を見下ろした。

黒く流れるようなロングの髪をヘアバンドで止め、髪の間から見える黒い瞳は鋭さを感じさせる。

身に纏っているのは、首元の赤いリボンが印象的な学生服。

外見からして、中学生といった風貌の美少女だった。

ズボンをはたきながら立ち上がり、こちらを見つめる黒髪の少女に謝罪。

「ごめん。大丈夫だった？」

「…それ、倒れたあなたが言うセリフかしら？」

少女の口から発せられたのは、外見に似つかわしくない低い声。
年上と分かる良太郎に対して物怖じなど一切せず、まっすぐな言葉
をぶつける。

「あつ、そうだね。うん、ごめんね」

「さっきから謝ってばかりね」

相手が相手なら不愉快さを与えるであろう物言いだ、自他共に
人が良いと認める良太郎は、気にしない様子。

少女にぶつかってしまったという罪悪感も少なからずあったが、
それでも良太郎は少女に声をかけた。

「ねえ君。この街の人…だよね？」

「だったら何？ナンパならお断りよ」

「いや、そうじゃくて。僕、今日からしばらくこの町にいる事にな
ったんだけど…近くにスーパーとかあるかな？」

これはデンライナーから出てくる時に、ナオミから頼まれた事だ。
良太郎はもちろん、イマジンも生命体である以上、食事はどうし
ても必要となる。

ところが、先ほどの衝撃でデンライナー内の食品がほとんど使い
物にならなくなり、新しく買い揃える必要が出てきた。

そのため、町にあるスーパーの営業時間などを調べてきて欲しい

と頼まれていたのだ。

ちなみにこれらの資金は、オーナーのポケットマネーから支払われるとの事なので無問題。

少女はしばし沈黙した後、学生カバンからメモ帳とペンを取り出すと何かを書き始めた。

1分もしないうちにペン先を引っ込めるとページを引きちぎり、良太郎に突き出す。

それには駅を中心とした簡易的な地図が描かれており、下部分には駅と思われる長方形、それを通るように道を描いたと思われる細い十字、十字の先にある紙の右上部分には、目的地などで使われるようなの模様が描かれていた。

「その駅から近い所にあるから、分からないなら後は交番で聞きなさい」

「あ、うん…ありがとう」

「…それじゃ」

それ以上何も告げずに、少女は踵を返して歩き出す。
その背中に向けて、良太郎は再び声を上げた。

「ねえ、君！」

少女も立ち止まり振り返る。

言葉は無かったが、その眼には『またか』という感情がありありと浮かんでいた。

それに気付きつつも、良太郎が笑顔で口を開く。

「僕、野上良太郎。君は？」

「…『^{あけみ}暁美ほむら』よ」

「ほむら、ちゃんか…ありがとう！」

礼を述べるとそれだけを言い、少女 暁美ほむらは、今度こそ人の波へと消えていった。

それを見届けた良太郎も同じように振り返り、ほむらとは別の道へと歩き出した。

出会った少女と青年。

それが導くのは、新たな未来への線路。

この出会いが、少女にとって『再びの戦い』の。

青年にとって『新たな戦い』の幕開けとなる。

それを2人が知るのは、もう少し後の時間。

次回予告

私、鹿目^{かなめ}まどかです！

どうなってんだ！ 良太郎と繋がらなくなったぞ！？

また『使い魔』かしら…でも、見たことない姿ね

『この中』で、動いてる…！？

変身！

第2話『それと、電王^{でんおう}っていうんだ』

時を越えて、願いが参上する！

第1話『この時代に閉じ込められたって事?』 2 (後書き)

ども、ウェイカップです！

投稿開始してから3日となりますが、早くも評価ポイント約50、お気に入り10件に到達いたしました。

僕の拙い作品をご覧頂いてる皆様、まことにありがとうございます
(スライディング土下座)

てか、まどマギ人気凄いなw

・良太郎とほむほむ

ついに会いました、電王と魔法少女！(お互いに知らず
もちろんここで2人が出会ったのにはきちんと理由があります。

さて次回、第2話。

オーズ風に3つのキーワードを当てはめると…

1つ！ まどマギ側の主人公が登場！

2つ！ 緊急事態が発生する電王側！

3つ！ 見た事もない使い魔！？

次回投稿分はストックとして完成はしてますが、

しばらく書き溜めてからの投稿にしたいと考えてます。

お待ちいただいて大変申し訳ないですが、お楽しみいただければ幸いです。

では、ご感想お待ちしております。

第2話『それと、電王って言うんだ』 1（前書き）

7 / 1 1 加筆修正

第2話『それと、電王って言うんだ』

1

「えと、味噌に塩…オリーブオイル…ああ、ラー油もだっけ」

「ねえ。それって『コーヒーマテリアル』って書いてるけど…」

「気のせい…じゃないかな、うん」

隣を歩くハナに答えながらも、自身が冷や汗を流している事は華麗に無視する良太郎。

この時間に到着した翌日。

初日に調べておいたスーパーにやってきた良太郎とハナは、早速ナオミから受け取ったリストを元に出しをしていた。

とある中華の代表米料理の材料が多いのは、オーナーからのリクエストらしい。

ちなみに現在、良太郎にはモモタロス達イマジンは誰も憑依していない。

交代で休みなどと言っていたが、やはり修理にはどうしても男手が必要なのだろう。結局、モモタロス達がオーナーから逃れる手が無かった。

本来なら修理に回るはずのハナが、こうして買出しの手伝いという名目で外に出ているのはそのためである。

「後はナルトだけなんだけど…どこかな？」

頼まれた食材の大半はカゴに詰め込まれ、残っているのは一つだけ。

だが、その1つが意外にも曲者だった。

メモに書かれている最後の一品。ラーメンなどの必需品、ナルトだけが見つからない。

しばらく2人で店内を一回りするが、意外に広い面積を誇るこのスーパー。結局見つからず、仕方なく誰かに聞くことで落ち着いた。周囲を見てもみるがタイミングが悪いのか、店員らしき人は捕まらず。

結局良太郎は、目の前を通った2人組みの少女へと声をかけた。

「あの、ちょっといいかな？」

「？ はい、なんですか？」

振り返った2人組みの少女。

1人は桃色の髪を両側でまとめた、幼い外見の少女。

もう1人は薄い青の髪をショートカットに揃え、隣の少女より若干背が高い。

通学カバンと思われる荷物を肩で背負ってる辺り、活発な印象を思わせる。

2人とも揃って同じ制服を着ている事から、クラスメートの友達といった感じか。

（あれ、この制服…？）

2人が着ている制服に、昨日繁華街で出会った少女を思い出す。
胸元のリボンが特徴的なその制服は、確かにほむらが着ていた物
と同一だった。

その制服をしばらく凝視していたためか、青い髪の少女が怪訝そ
うな顔に変わり、隣の少女を護るように一歩前になる。

「あゝ…何か用ですか？」

「ちょっと、良太郎？」

「…あつ、ごめん。あのさ、ナルト…ってどこかな？」

「ナルト、ですか？ それならこっちですよ」

笑顔を見せた桃色の少女の先導に従い、良太郎とハナは歩き出し
た。

ちなみに、少女の案内で見つけたナルトは『風麵ナルト』なる超
巨大なナルトだった。

「ごめんね、僕らの買い物に付き合わせる形になっちゃって」

「いいですって！ ジュースもおごってもらっちゃったし！」

「あの、本当によかったんですか、これ？」

「いいのよ。こっちこそ、そんなお礼しか出来なくてごめんなさい」

買い物を終えた良太郎達は、一路同じ道を歩いていた。

買い物の荷物は良太郎がまとめて持っており、少女達の手には先ほどのお礼と良太郎が買ってあげたジュースの缶。

笑顔でジュースに口をつける少女達に対し、自己紹介をしてなかった事に気付く。

「自己紹介まだだったね。僕は野上良太郎」

「ハナって言います。よろしくね」

「私、『鹿目まどか^{かなめ}』です！」

「あたしは『美樹^{みき}さやか』！　こっちこそよろしくう！」

少女2人　　鹿目まどかと美樹さやかが答えた。

「それで、良太郎さんとハナちゃんは兄妹ですか？」

「う、うん…まあ、そんなもんだね」

「んんっ！？　なにやら怪しい溜め…ただならぬ関係とお見受けし

ますが!？」

さやかが詰め寄ると、良太郎とハナは顔を合わせて苦笑する。

活発さを持つこの少女、ノリが良い性格までおまけでついていた。余談だが、実際に良太郎とハナは兄妹のようなもので間違いはない。

それというのも、ハナは良太郎の姉『野上愛理』^{のがみあいり}と、婚約者であった男性の間に生まれるはずだった未来の娘であり、つまるところハナにとって良太郎は叔父にあたる。

良太郎にとって未来の孫である幸太郎と共に、血の繋がりのある人物だ。

普段こそ気にはしていないが、『タイムマシンで未来から来た姪です』とバカ正直に言って、信じる人などほぼ皆無。

最悪、誘拐か何かと勘違いされて警察のお世話になり、カツ丼を出されて電球ライトを真正面から浴びせられるという可能性も0ではない。

故に一部の人物以外に対して、二人は『年の離れた兄妹』という関係で説明をしていた。

そんな他愛のない会話をしながら、4人は繁華街の入り口へと差し掛かる。

「あつ、あたし達こっちです」

「僕らはあっちだから、ここでお別れだね」

まどかが繁華街の中　正確には、中を突っ切った先にある住宅街を指差し、良太郎は反対の方角　住宅街から離れた見滝原山の

方角を指差した。

人の住める場所もほとんどないはずの見滝原山山を見ながら、まどかが首を傾げる。

「えと、あそこに住んでるんですか？」

「う、うん。大学のサークルの仲間と、山の中でキャンプしてるんだ」

「へー。見滝原の人じゃないんだ。あれ、それじゃハナちゃんは？」

「あ、あたしは遊びに来てるだけで、明日にでも他の街にある実家に帰るんで…」

咄嗟に嘘をついてしまったが、正直にデンライナーの事を話せるはずもない。

心の中で謝罪をしながら説明をし、やがて2人は飲み終えたジュースの空き缶をゴミ箱に捨て、繁華街へと歩き出した。

「それじゃ、ジュースありがとうございました！」

「うん、こっちもありがとう！」

手を振る2人に答え、やがて2人の姿が喧騒へと消えていく。それを見届け、良太郎達もデンライナーへと戻ろうとするが、落ちていた小さい物体に気付いた。

「あれ、これ…?」

何かのケースらしきそれを拾ってみると、中にはまどかの顔写真が入った証明書。

上部には『見滝原中学校学生証』と書かれている。

「まどかちゃん、落としちゃったんだ」

すぐに繁華街の方を見るが、写真の人物の姿は見えない。
少し考えた後、良太郎は立ち上がる。

「ハナさん、ごめん。これ届けてくるから、ここで待ってて」

「あつ、良太郎!」

まどかの学生証をポケットにしまうと、ハナの返事を待たずに繁華街へと走り出した。

「はあ、はあ…どこにいったんだろ…？」

繁華街を探し始めて10分ほどが経過し、良太郎は繁華街の十字路で周囲を見渡す。

簡単な地図は初日に頭に入れてあったために、対して迷わずに繁華街をぐるりと回ったが、結局2人の姿を見つける事は出来なかった。

道行く人にまどかの写真を見せながら尋ねもしたが、結局成果はゼロだ。

「これ、どうしよう…見滝原中学って所に届けるしかないかな…」

幸い、学校の連絡先と住所は記載されている。

『取得者は本校までご連絡下さい』とご丁寧に書いてあるので、届けるのに不都合はなさそうだ。

まどかが困っているかもしれないが、これ以上ハナを待たせる訳にもいかない。

「仕方ないか。デンライナーに戻る前に、これを届けて…？」

方針を決めてハナの元に戻ろうとしたその時。

目の前に見える裏路地の奥を走る、桃色の髪と制服の少女の姿をみかけた。

間違いない。探していた鹿目まどかだ。

「いた！ まどかちゃん！」

ようやく見つけた探し人を追い、学生手帳をしまいながら走り出す。

まどかが消えていった裏路地を曲がった時、その眼前にいきなり現れたのは、一緒に行動していたはずのさやかだった。

「ひゃっ！ って、良太郎さん！？」

「さやか、ちゃん？ 今、まどかちゃんが通ったんだけど何かあったの？」

「そ、それが、『誰かが助けてって言うてるの！』とか言い出しちゃって、走り出して…」

「助けて…？」

「あたしは何も聞こえなかったんですけど、まどかったらいきなり…と、とにかく、まどかを追うんでごめんなさい！」

良太郎に頭を下げ、さやかも裏路地を駆けていく。

その様子に何かを感じた良太郎もその背中を追いかけて、やがて分かれ道で止まっていたさやかに追いついた。

「さやかちゃん、僕も手伝うよ」

「えっ！？　で、でも…！」

「気にしないで。困った時はお互い様、でしょ？」

「…ありがとっ！　それじゃ、あたしはこっち！　良太郎さんはあつちで！」

「うん！」

さやかと別の道へ走り、初めて通る裏路地を駆ける。

見慣れる路地を勘のままに走る良太郎の前にやがて現れたのは、建設中と思われるビルの工事現場。

普段は塞がっているであろう入り口が不自然に空いており、可能性は低いと思いつつも良太郎は中へと入っていく。

今日は工事が休みなためか、辺りには良太郎の足音以外の音は存在しない。

カッン、カッンと無機質な足音が続き、やがて角を曲がった良太郎の前に、目的の人物がいた。

「まどかちゃん！」

「っ！　りよ、良太郎さん！？」

座り込んだまどかが振り返る。

先ほども見た通学カバンは固い地面に横倒しになり、その代わりに華奢な両腕には、ある物体が抱えられていた。

見た目は白いウサギを思わせ、背中に円形の模様。ふさふさと触ったら気持ち良さそうな尻尾と長い耳。耳の先にはリング状の装飾。一見かわいらしい姿だが、ペットショップなどで見かけた事もないその風貌。

例えるなら、未確認生命体…というのが一番しっくり来るか。

なお、決してグギグギ言う戦闘民族とかではないのでご安心を。

「…えと、それ…何？」

「こ、この子が…私に、助けてって言うてきて…」

「その、生き物が…？」

まどかが抱えるその生物？を見ながら質問を返す。

さやかが言っていた内容と一致はするが、明らかに普通の状況ではない。

何せ彼女の言葉を信じるならば、まどかに助けを求めたという存在が、言葉を話せる生物である人間ではないからだ。

まだ出会って1時間も経っていないが、彼女が嘘をつく人物だとも思えない。

この状況をどうすべきかと良太郎が顔をしかめたその時、すぐに静かな着地音。

2人がその方向を向くと、そこにいたのは1人の黒髪の少女。

昨日、良太郎が出会ったその少女は、まどかが今も着ている見滝原中学の制服ではなかった。

白と薄紫と灰色という暗色系を基調とした、セーラー服に似た独特の衣装。左手には装飾が成された円形の盾。盾装着している左手

の甲には、紫の光沢を放つ宝石らしき物体。その黒い眼が見つめる先には、まどかが抱える白い生物。

見るだけで人を殺せる力があるとしたら、間違いなく一睨みで相手を滅するであろう、激しい敵意を込めた瞳だった。

現れた少女に向け、2人は同時に言葉を発した。

『ほむらちゃん!？』

少女　　暁美ほむらは、言葉を返す代わりに、左手に持った巨大な銃身を二人に向けた。

第2話『それと、電王って言うんだ』 1（後書き）

ども、ウェイカップです！

なんということでしょう。文字数がディケイドデュアルより少ないとはいえ、1日1話のノルマがほとんど達成できているっ！（大まかな文面のみ。細かい修正は少しずつ

ネタが無くなった時の反動が怖いぜえっ・・・！

・まどか&さやか&QB

ここで登場しました、主人公&親友&外道マスコット。

まどまぎメインビジュアルでまどかの腕にぶら下がってるあの印象から、誰がこんな外道だったと予想できたでしょうか・・・

なお、今作は鬱フラグ撲滅！をテーマに掲げてますので、さやかもきっちり助けてあげます。

・・・その辺りの細かいプロットがまだ未完成なんすけどw

さやか絶望状態からどうやって助けられるっちゅうねん・・・w

・風麵ナルト&未確認生命体

別ライダーのネタ持ってきてしまいましたw

風麵ナルトは、仮面ライダーWの舞台『風都』の名物ラーメンの具。丼を覆うほどの超巨大なナルトです、

未確認生命体は、仮面ライダークウガの敵『グロンギ』に人間側がつけた名称。

あつ、まどまぎの世界に風都があるって事じゃないですよ？

・・・多分w

次回、魔法少女なほむむとの邂逅の続きとなります。
少し短めなので、早めに投稿の予定。
では、感想お待ちしております。

第2話『それと、電王って言うんだ』 2（前書き）

7 / 1 2 加筆修正

第2話『それと、電王って言うんだ』 2

大型の散弾銃 ショットガンを構え、まどか、というより、まどかが抱える白い生物に銃口を向けるほむら。

良太郎は突然の事態に驚きながらも、まどかとほむらの間に入り込む。

強制的に視界に入ってきた良太郎の顔をしばし見ていたほむらが、ようやく口を開いた。

「…何で、あなたまでここにいるのかしら、野上良太郎」

「えっ…良太郎さん、ほむらちゃんと知り合い…?」

「う、うん。昨日ちょっと…」

昨日、街でぶつかった事を説明しようとするが、ほむらのショットガンの銃身が軽い音を立て、良太郎は会話を中断して身構えた。もちろん、後ろにいるまどかを守るようにしてだ。

事情は全くとっていいほど不明だが、少なくともいきなり銃を構える相手を前に、座り込んでいる女の子を放っておくなど出来ない。

ほむらと白い生物の関係も気になるが、ほむらの事情を聞かない限り、白い生物への対策も取れない。

銃口を良太郎に向けたまま、視線をまどかへと向ける。

「一度しか言わないわ。鹿目まどか、その生物を渡しなさい。それっは、あなたの運命を狂わせる存在よ」

「そんな…ほむらちゃん、何でこんな事するの!？」

「一度しか言わないと言ったわ。それと、あなたもよ野上良太郎。何故あなたがここに居るかは知らないけど、そこをどきなさい」

銃口が僅かに動く。

その重い銃身は微動だにせず、その光沢は決してこの銃がおもちゃではない事を嫌でも分からせた。

あの引き金に軽く力を入れれば、良太郎の全身は瞬く間に蜂の巣だ。

背中に冷や汗を掻きながらも、良太郎は決してその場を動かこうとしない。

ほむらも引き金に人差し指こそ掻けているが、感情に任せて引き金を引く様子は感じられなかった。

あくまでほむらのターゲットは、白い生物なのだろう。

3者の視線が交差し、生物の息遣いの音は一切生まれない静寂がその周囲を支配する。

だが、良太郎はかすかに動いていた。

あらかじめ後ろのポケットに回していた手で、オーナーから借りてきた『とある物』を掴む。

（使いたくなんてないけど…）

これを使えば、この状況の打破は容易だろう。

まどかを救う事も出来るし、ほむらの動きを押さえる事も恐らく可能だ。

だが、あくまでこれは最終手段。

ほむらがどのような目的で白い生物を狙っているのかは分からないが、何も話を聞かずに一方的にこの『力』を使う訳にはいかない。あくまで最悪の可能性を考えた上でポケットに手をゆっくり刺し込み、少しでも意識を逸らそうと口を開いた。

「ほむらちゃん…一体、君は」

「2人とも、離れてえ！」

突如その場に響き渡った、第4者の声。

同時に、ほむらに向け、突如開いた横手のドアから真っ白い煙が吐き出された。

僅かに見える煙の隙間からは、備え付けてあった消火器のホースを、ほむらに向けて振り回すさやかの姿。

「っ！ まどかちゃん、走って！」

ポケットの手を離し、咄嗟にまどかの手を掴むと、開いたドアの

先へと飛び込む。

役目を終えた消火器をほむらに向けて投げつけたさやかと共に、ビル内の通路を走り抜けていった。

ほむらは消火器の煙が消えたその場に誰もいない事を確認し、無言のままショットガンを左手の盾に触れさせる。

不思議な事に、盾と腕の僅かな空間に入り込むように銃身が沈んでいき、あっさりと盾の中に『収納』された。

消火器の独特な匂いが残る場所に立ったまま、3人が消えた通路に目をやる。

「まどか…」

その言葉は先ほどと違い、深い悲しみに満ちていた。

「ぜえっ…ぜえっ…ここまで、来れば…大丈夫っしょ…！」

「はあ、はあ…まどかちゃん、大丈夫？」

「は、はい…さやかちゃん、良太郎さんも、ありがとう…」

ほむらから逃げ出し、工事現場の奥へ走ってきた良太郎達は、近くの小さい部屋に飛び込むとほむらが追ってこない事を確認し、ようやく一息ついた。

備え付けのドアを閉じ、部屋に置いてあった工事現場の様々な機材で簡易的にドアを塞ぎ、さやかが頭をかきむしって絶叫する。

「だああもう！ なんなのあの転校生は！？」

2人の声が聞こえたすっ飛んでみれば、いきなりコスプレしてるわ、銃構えてるわ！

学校でまどかに声かけてた時から思ってたけど、頭おかしいんじゃないのあいつ！？」

「転校、生？」

「あの子… 晁美ほむらちゃんは、私たちのクラスに転校してきた子なんです」

聞き返した良太郎にまどかが説明する。

ほむらは先日、まどか達のクラスに転校してきたクラスメイトであること。

事あるごとにまどかに向け、「あなたのままでいいさい」だの「決して力を求めちゃだめ」だの、不可思議のような言葉をぶつけてきた事を。

しかし、同時にまどかの中には深い悲しみがあった。

転校してきたばかりのためか、あまりクラスメートと会話をしていなかったのは事実だが、少なくともほむらはこのような事をする人物には見えなかったからだ。

「どうしてこんな事…」

手に抱きかかえたままの白い生物を見ながら、まどかが呟く。
生物は荒い息をしながら、黙ってまどかの腕の中でうずくまっていた。

さやかもようやくその生物に気付いたのか、怪訝な顔で生物に近づいて首を傾げる。

「まどか…それ、何？」

「この子が私を呼んだの。助けて、助けてって」

「いやいやいや、ウサギ…かは分からないけど、少なくとも言葉は話さないでしょ？」

「でも、確かに聞こえたの！ 私を呼ぶ声が…！」

自分と呼ぶ声を信じてもらおうと、必死に説明するまどか。
まどかが嘘をつく子では無いと知っているが、いまいち信じ切れないと言った表情だ。

そんな中、良太郎は周囲を見渡していた。

その様子に気付いたのか、まどかとさやかが良太郎を見る。

「良太郎さん？」

「どしたの？まさか、転校生…！？」

「違うと思うけど…何か様子が変じゃない？」

良太郎に言われて2人も周囲を見渡し、それを合図にして変化が起きた。

周辺のコンクリートに覆われていたはずの部屋の景色が、徐々に変わっていく。

無機質な灰色の壁は色を持ち、ドアを押さえていた機材が飲み込まれ、目の前の空間が歪み、それは徐々に広がっていく。

「え、ええ！？」

「ちょ、ちよつと！ 何よこれえ！？」

いきなり世界が変わっていく様子に、まどかとさやかが驚きの声をあげる。

やがて変化が終わり、周囲の景色はがらりと変わっていた。

無機質なコンクリートに覆われていたビルの一室ではなく、まるでおとぎ話に出てくるような殺風景な広場。

例えるなら、子供が書いた工事現場か何かのラクガキが具現化し、その中に閉じ込められたといった具合か。

良太郎も未知なる光景に戸惑いを隠せないままだが、嫌な緊張感を感じていた。

それは、彼がデンライナーと関わりを持つてから、常に彼の周囲に起こっていた感覚。
すなわち 敵意。

「何か、来る…！」

その声に反応したかのように、3人の視界に突如『ソレ』は現れた。

空には、毛玉のような容姿にカイゼル髭と思われるものを生やし、宙に浮かぶ異形。

地上には、毛玉と同じようにヒゲを生やし、蝶のような羽を持っている異形。

さらに羽持ちの異形は、人間大の大きさと、一回り小さい無数の異形が並んでいた。

明らかに日常に存在しているはずがない。文字通りの『怪物』。

「はは…何よこれ…夢でしょ、そうに決まってるわよ…！ 起きたら遅刻寸前で、ダッシュで着替えて、パン口に加えて走り出して最速レコードたたき出すんだわ…そうだよねえ、まどかぁ！」

さやかが半ば錯乱したかのように、隣に立つまどかの体を抱きしめながら呟く。

対するまどかも声は出していないが、その瞳には涙が溜まっており、何らかのきっかけで泣き叫んでしまうだろう。

怪物達はそんなまどか達に近づいていき、地上の小さい異形が動き出す。

「2人とも、走って！」

この状況に慣れていた事が幸いしたのか、良太郎が2人の手を引き、一目散にその場を逃げ出す。

刹那、小さい異形達が一瞬で鳶に変化し、3人がいた場所を覆いつくした。

あと数コンマあの場所にいたら、あの鳶に取り込まれていたであろう。

その様子を想像してしまったのか、青い顔をするまどか達の手を引いて走り続ける。

異形達も地上を飛びはね、空を滑空しながらその後を追い、少しずつだが距離を詰めていた。

「い、いやぁ！ もう、なんなのよぉ！！」

「分からないけど、今はとにかく逃げよう！」

さやかのかの狂乱じみた声に答えながら、良太郎はポケットの中から赤い携帯電話らしき物を取り出した。

数字ボタン部が横向きで刻まれ、ディスプレイ部分にはスコープのようなマークが刻まれ、後方を覗けるクリアウィンドウとなっている一風変わった様式の携帯電話だ。

慣れた手つきでそれを開き、ボタン部の一番右下に位置する『3』だけを押し、耳に当てる。

普通なら1秒もかからずにある人物へと繋がるはずの携帯からは、何の声も帰ってこない。

同じように青い『6』や黄色の『9』、紫の『』を押すが、結果は変わらない。

「そんな…モモタロス達と繋がらない…!？」

怪物に追われる中、良太郎の悲痛な声が異空間に響いた。

第2話『それと、電王って言うんだ』 2（後書き）

ども、ウェイカップです！

先週のゴーカイジャー、追加戦士祭りでヒヤッホイでしたな！

雑誌でも新戦士の紹介が出ましたし、ますます面白くなりそうです。

今回は魔法少女ほむほむとの邂逅の続きでした。

まあ事情知らない良太郎達からしたら、いきなりショットガン突きつけてあんた何やつとるんだ？って感じですよな。

そして私、とんでもないミスに気付いてしまいました・・・！

そう、あれは先日、当作品のプロットの確認を行ってた時・・・（以下、便宜上で 編と分けてます

そんな大げさでもないですが、ちょっとだけ今後のネタバレありなのでご注意を。

プロローグ デンライナー故障編 ほむらと街で出会う編 まどか
&さやかと出会う編

QBと結界内で出会う編（今ここ） マミさん登場編

魔法少女ツアーやっちゃう？編 シャルロット編 以下続く予定

これを見て『ん？』と思った皆様、あなた方は賢い！そしてまどマギファンですな！

『薔薇園の魔女・ゲルトルト激闘編（仮）』を見事に忘れておりました。

ええ、もう綺麗さっぱりスポンと抜けてましたよ！

魔法少女ツアー初日でいきなりシャルロッテちゃん出てきちゃう所でしたよ！

おかげで一部プロット大幅に書き直しつつ・・・ちくしょう、俺のバカorz

あつ、マミさん出るまでは予定通りでいきますのでご安心をw
マミさん俺だー結婚してkr

では、ご感想お待ちしております。

第2話『それと、電王って言うんだ』 3 (前書き)

7 / 1 2 加筆修正

第2話『それと、電王って言うんだ』

3

「キンタロス君、それはこの機会に処分してしまうので、ゴミ置場へお願いします」

「任せとき！」

「あゝ！リュウちゃん！また勝手に絵をかきしてえ！」

「えゝ、だって疲れちゃったしゝ」

「まあまあナオミちゃん。いい機会だし、休憩にしようよ。あつ、僕コーヒーおかわりね」

「って、ウラちゃんもさつきからずっと休みっぱなしじゃないですかあ！真面目にやってくれてるのはキンちゃんだけですよゝ！」

見滝原山の奥に隠されたデンライナー内は、年末の大掃除を思わせる光景となっていた。

オーナーの指示の下、時間移動の衝撃で壊れた備品の整理と処分を行っていたのだが、いい機会だと他の備品の一部も整頓する事になったのだ。

が、結果は見ての通り。

元々遊び好きなリュウタロスが、発掘したクレヨンと画用紙で絵を描きはじめ、こちらもいつのまにかコーヒーカップを傾けているウラタロスにナオミの可愛い怒声が響く。

そんな様子の中、別の車両に緊急用で設けたゴミ置場に出ていたモモタロスが戻ってくる。

手には先ほどまでゴミが満載だったダンボールが抱えられており、「どっこいしょ」とダンボールを床に降ろした。

「っ!？」

瞬間、突然立ち上がると、周囲を険しい顔つきで見渡した。戻ってきた事と様子が変な事に気付いたウラタロスが声をかける。

「どうしたのセンパイ? またギックリ腰にでもなった？」

「カメ、クマ、リュウタ! 良太郎の事、感じるか!？」

返ってきたのは、いつもとは違う様子のモモタロスの声。

「えっ、良太郎と?」

「何言つとるんや。そんなの当たり前……?」

3人は首を傾げながらも意識を集中させるが、すぐにモモタロスと同じ感情を抱くに至った。

良太郎とある程度の意識を共有しているモモタロス達4人は、常

に良太郎の存在を感じる事が出来る。

気配を感じ取れば、例え離れた時間にいようと、いつでも良太郎への憑依も可能だ。

だが一番繋がり深いモモタロスが即座に気付き、ウラタロス達もようやく気付いた。

先ほどまで無意識の内に繋がっていたはずの良太郎の気配が、ぷつぷつと途絶えてしまったのだ。

「どうなってんだ！？良太郎と繋がらなくなったぞ！？」

「え、え、どういう事！？ねえ、どういう事！？」

「落ち着いてよりユウタ。って、僕も珍しく慌てちゃってるけどねえ」

「でもいきなりやで。さっきまでは、確かに繋がってたはずや！」

以前にも似たような事はあった。

良太郎がとある事件に巻き込まれた事で電王に関連する全ての記憶を失い、一時的とはいえモモタロス達との繋がりが無くなったのだ。

あの時は良太郎への憑依はもちろん、その時にのみ可能な『力』の行使も行えなかった。

どうにか無事に記憶は戻り、その後は意識が繋がらないような事態は今まで無かったのだが。

ナオミとオーナーもモモタロス達の異変に気付き、片付けの手を

一度止めたその時。

デンライナーのドアが開き、全員がそちらに注目した。

「ただいまぁ……何よ、みんなしてガン見して」

両手に買い物の荷物を満載したハナが戻ってきたのだ。
しかし、共に行動していたはずの良太郎の姿がない。
モモタロスがすぐに詰め寄り、ハナに怒鳴り散らす。

「おいハナクソ女！ 良太郎はどうした！？」

「黙りなさいバカモモ！ ほら、さっさと荷物持ってよー！」

「んな事は後だ！ 良太郎はどうしたんだよ！？」

「それがさ、知り合った子の落し物届けるって別れたきり、戻ってこないのよ。連絡も取れないし、仕方ないから先に戻ってきちゃったんだけど……何かあったの？」

「良太郎が感じられなくなったんだよ。綺麗さっぱり、いきなりね」

「…えっ？」

ウラタロスの言葉の意味を理解するのに僅かの時間を要し、ハナはその言葉しか返せなかった。

見滝原町、工事現場に生まれた謎の空間。

空に浮かぶ毛玉状の怪物と、茨をこねくり回したような人型の怪物が徐々に3人へと近づく。

良太郎は相変わらず携帯を何度も耳に当てるが、やがて諦めたのか携帯を閉じる。

警戒して後ろを振り向いてみれば、怪物達は少しずつ距離を詰めていた。

このままではいずれ追いつかれる。

そして、目の前を涙顔で走るまどか達は

（そんな事…させない！）

脳内に浮かんでしまった最悪のシナリオを振り払うかのように、いきなり立ち止まった良太郎は、まどか達を守るように振り返った。突然の停止にまどか達が驚く中、ポケットに突っ込んだ手で掴んだのは、先ほどほむらと相対した時に手にした物体。

意を決してポケットからそれを抜き取った瞬間、茨の怪物達が動いた。

小型の体が結合し、人の腕の太さほどとなった茨が宙を走り、四方から良太郎の体を縛り上げる。

「あ、ぐっ…！」

「りよ、良太郎さん！」

目の前で異形にとらわれた良太郎を見て、まどかが涙声を上げる。茨は徐々に力を上げ、良太郎の口から苦悶の息が漏れ始めた。

（この、ままじゃ…！）

手足を必死に動かそうとするが、茨は決してその体を離そうとしない。

やがて良太郎の意識が徐々に薄れていき

刹那、2発の銃声と突然の閃光、そして爆発。

ほぼ同時に生まれた3つの変化に従い、茨の怪物達が粉々になつて消し飛んだ。

同時に良太郎を縛っていた茨も力を失い、解放された首を押さえて良太郎が座り込む。

「げぼっ、げぼっ！」

「えっ…えっ？」

突然の事態に、まどかとさやかも言葉を失った。

様子からして、彼女達が何かをした訳ではない。
全く別の何かが茨の怪物を倒した… かるうじて分かったのはそれ
ぐらいか。

「大丈夫かしら？」

後ろから新たな声が聞こえてきた。

3人が振り返ると、黄色を基調とした衣装を纏い、宝石と羽飾り
をあしらったベレー帽を身に纏った少女がいた。

綺麗な金髪の左右はロールになっており、この場には似合わない
暖かさを感じさせる笑顔を3人に向けている。

「は、はい…」

まどかは呆然としながらも言葉を返し、少女の視線がまどかへと
向く。

「そう、良かった。『キュウベえ』も無事だったみたいね」

「キュウ、ベえ？」

「うん、この子達が助けてくれたからね」

聞きなれない人名と思われる少女の言葉に良太郎が聞き返し、新

たな声が聞こえた。

声の出所は、良太郎の目の前 正確には、まどかのいる辺り。
更に絞るなら、まどかの腕の中 否、その手に抱えられている物だった。

結論。声を出していたのは、まどかが抱きかかえる白い謎の生物。

「え…えええっ!？」

「う、ウサギが…しゃべった!？」

「ウサギじゃないよ。僕の名前は『キユウベえ』さ。鹿目まどかに美樹さやか」

完璧に人語を話す生物 キユウベえは、腕の中からまどかとさやかを見る。

そして最後に、座ったままで自分を見る良太郎を見つめる。

「それで、君も僕が見えているのかい？」

「え、うん…君、なんでまどかちゃん達の名前…？」

「はい、そこまで」

聞き返そうとした時、金髪の少女がストップをかけた。
その視線は良太郎の先を見つめており、釣られて良太郎達もそち

らを向くと、先ほどより明らかに動きが早くなっている怪物達の姿。仲間を倒された事に怒っているのか、明らかに敵意が増しているのが、素人であるまどか達にも分かる。

「自己紹介は後で。まずは、こいつらを片付けてからね」

「片付けるって…どうやって？」

「こっやって」

さやかの声に答える代わりに、少女は手を前にかざす。

すると、何もなかったその空間に光が弾け、いきなり銃が生み出された。

細長い白い銃身に装飾が成された簡易的な構造　俗に言うマスケット銃と呼ばれるものだ。

白い銃身のそれを慣れた手つきで掴むと、迷いなく引き金を引く。ターゲットは良太郎の上空の毛玉怪物。

銃口から飛び出た弾丸はまっすぐ目標へと突き刺さり、その体を霧散させた。

それを合図にするかのように、怪物達が一斉に少女へと襲い掛かる。

対する少女は、逆に怪物達の中へと飛び込んで中央に立ち止まると、スカートの裾を軽く持ち上げた。

可憐な動きを思わせた刹那、少女を中心に地面に突き刺さる無数のマスケット銃。

「出血大サービスよ！ 受け取りなさい！」

その中の二つを両手で掴み、前後から襲い掛かる怪物に銃口を向けて発射。

単発式であるために弾が無くなったマスキット銃を投げ捨てて回転。動きに合わせて別のマスキット銃を掴んで発射。

投げ捨てたマスキット銃は地面に触れる前に、まるで空気のように消えていく。

発射 捨てる 掴む 発射の単調な繰り返し。

素人目から見ても熟練されたその行動は、華麗に回転しながら行う少女の容姿も重なって、展示会に飾られる絵のように見えた。

何より、その動きには一切の迷いも無駄もない。

外れる弾は一発たりともなく、自身に対する攻撃は全て撃ち落とし、近づく怪物には銃身と蹴撃を叩きこむ。

一体、また一体と瞬く間に数を減らしていく怪物達。

「これで、ファイナーレよ！」

ちょうど残された最後のマスキット銃の引き金を引き、同じように怪物が霧散。

それを最後に、良太郎達に襲い掛かった怪物達は全て消え去っていた。

少女は軽く息を吐き、マスコット銃を手のひらで回転させながら消失させると、良太郎達に向き合って笑みを浮かべた。

「はい、終わったわよ…っ!？」

その時、少女は突然真剣な表情を浮かべるとその場から一気に飛びあがる。

先ほどまで少女がいた場所に突如何かが着地し、衝撃で地面が陥没した。

無難に着地した少女、そして良太郎達の視線の先には、新たな影が現れていた。

先ほどの怪物達と違い、明らかに人型の容姿をしている。

左手にはドリルのような形状の武器。全身が青く、顔の部分には赤く丸い瞳があった。

イメージとしては、人型のモグラの怪物といった所か。

「ま、また出た…!」

「また『使い魔』かしら…でも、見たことない姿ね」

まどかが疑問を口にし、少女も初めて見る存在に困惑しながらも再びマスコット銃を取り出し、怪人に向ける。

だが少女が引き金を引くより早く、良太郎が驚きの声をあげた。

「まさか…イマジン…!？」

「イマ、ジン…？」

まどかが良太郎の発した言葉を繰り返すが、良太郎の耳には聞こえなかった。

その間にも、突如現れた怪人 『モールイマジン』 は、かなりのスピードで少女へと襲い掛かる。

「早いわね…でも！」

少女は冷静に相手の動きを感じ取り、迷い無く引き金を引く。タイミングは完璧。外すはずの無かったその弾丸は、まっすぐモールイマジンへと音速で飛翔し、モールイマジンはその弾丸を『叩き落した』。

「っ…!？」

目の前で起こった光景に、少女が初めて顔を驚愕に染める。

絶対の自信を持って放たれた攻撃を、左手のドリル一つで叩き落したのだ。

まだ避けるなら分かる。映画などでもよく見る光景だ。

だが、音速の銃弾による攻撃を、どれだけの強度があるかは分からないが左手一本で叩き落す。

そのありえなかった光景が、少女に僅かな隙を作った。

その隙を見逃さず、モールイマジンが左手を引き絞り

「て、てえい!!」

気の抜けた声と共に、横からモールイマジンに抱きつく形で無理矢理体制を崩した良太郎が、結果として少女への攻撃を中断させた。抱き合う形で地面を転がり、まどか達から少し離れた位置で立ち上がると、そのままモールイマジンに背を向けて走り出す。

対するモールイマジンも、標的を良太郎へと変更したのか、その背中を追いかけ始めた。

「りよ、良太郎さんっ!!」

「っ! 伏せて!」

良太郎を追おうとしたまどかに声を荒げた少女が、マスケット銃でまどかの頭上を狙う。

そこにいつのまに現れていたのか、先ほどと同じ毛玉状の怪物が直撃を受けて霧散。

同時に、良太郎とまどか達を分断するように現れた、毛玉と茨の怪物達。

「ま、まだこんなに!?!」

「大丈夫、すぐに片付くわ。2人とも、キュウベえをよろしくね」

驚くさやかをよそに、冷静さを取り戻した少女が再び大量のマスキット銃を召喚。

同時に脳裏に走るのは、先ほど自分を助けてくれた良太郎と、彼を追っていったモルイマジン。

「早く片付けて、彼を助けにいかなきゃ……！」

知らない人物とはいえ、助けられておいて助けないわけにはいかない。

少女は目の前に広がる怪物達に意識を集中させ、再びマスキット銃の引き金を引いた。

第2話『それと、電王って言うんだ』 3（後書き）

ども、ウェイカップです！

電王×まどマギを投稿開始して既に1週間。

10ヶ月経とうとしているディケイドデュアルの評価ポイントを、振り切ったぜ・・・！（風都署の刑事さん風

いやいや、まどマギ人気は凄いですな！

ポイントを入れてくださった皆様、ありがとうございます（地面に頭擦り付けて土下座

・マミさん登場

マミさん！！マ、マママミマミマミさあああああんっ！！！！改めて考えると、あの大きさで中学生ってありえねえのでは？w

という事で、ウェイカップが一番好きなキャラクター、バマミさんが初登場となりました。

まだ名乗ってないので、表記は少女のままですが、まあ金髪ロールとマスケット銃ですぐに分かるw

アニメでは、まどマギの価値観を一発で方向転換させたあの第3話のキーキャラクターですが・・・

皆さん、もちろん忘れてないですよ？

今作は『鬱展開撲滅！まどマギに明るさを！』がテーマだという事を！（何かパワーアップしてる？w

まあ詳しくはもうちょっと先になりますが、あのシーンをどう変化させるか、ご期待ください。

・・・あれ、メインヒロインってほむほむだよ・・・ね？（オイw

・イマジン

電王の敵、イマジン登場です。

最初はオリジナルを作ろうと思ったんですが、現時点でイマジンと願いの契約が可能なキャラが思いつかなかったので、とある経緯でモールイマジンに登場してもらいました。

まあ戦闘員みたいなもんですしw

もちろん、イマジンが結界内、そしてこの世界にいるのにも理由があります。

それはまた後日で。

次回、お待たせいたしました。
絶望を撒き散らす魔女の空間に、時を超えるミュージックが鳴り響きます。

では、ご感想お待ちしております。

第2話『それと、電王って言うんだ』 4（前書き）

6 / 18 『ケータツチ』 『ケータロス』に修正

7 / 13 加筆修正

第2話『それと、電王って言うんだ』

4

後ろを振り向けば、予想通りにこちらを追いかけてくるモールイマジン。

遠くで銃撃音が響く事から、おそらく毛玉の怪物などが再び現れたと予測するが、先ほどの少女の戦いぶりを見れば、モールイマジンをあの場に残し続けるよりは安全だろうと考え、足を止めて振り返った。

既にまどか達からはかなり距離が離れ、ここなら何があっても向こうに危害がいく事はない。

それに、まどか達から離れたもう1つの理由。

目の前で静止し、こちらを見て威嚇のような唸り声をあげる、モールイマジンの事だ。

必然的に電王に関する話題となるために、彼はまどか達から距離を取った。

「君、イマジンだよね！？ 誰と契約してるの！？ あの怪物も、君達の仕業なの！？」

イマジンとは基本的に、自分の欲望 未来改変を引き起こすために行動する。

なぜこの時間にいるのか？実体を持ったために契約をした人物がいるのか？

返事が返ってくるとは思ってないが、それでも聞かずにはいられなかった。

更に付け加えるなら、この異空間の事も疑問だ。

良太郎が知る限り、イマジンにはこのような異空間を作れる力など存在しない。

モモタロス達と連絡が取れない今、少しでも情報は入手しておきたかったのだが、

『で、ん…王…っ！』

片言の言葉でそれだけを言うと、何の脈絡もなくいきなり良太郎に飛びかかる。

万ーのためにポケットから抜いておいた物体　黒いケースらしき物体を構え、空いている左手を眼前に向けようとするが、予想より素早い動きで近づいたモールイマジンのドリルアームが良太郎の右手を弾く。

手に持っていたケースは弾き飛ばされ、近くの地面へ音を立てて落ちてしまった。

ドリルを振るった反動を利用し、空いていた右手が良太郎の頬を殴りつける。

ケースとは逆方向に吹き飛ばされ、異変が起こったが固いままの地面を転がった。

手のドリルを空に掲げる。

倒れたままの良太郎に向けて、鈍く輝くそれを振り下ろし

刹那、火薬が炸裂する破砕音と無数の弾丸が宙を走る風切音。それに合わせるかのゆに、モールイマジンの全身がいきなり火花を上げた。

飛来した無数の弾丸の直撃を受け、良太郎の眼前から吹き飛ばさ

れる。

「えっ…？」

目の前でいきなり起きた事に良太郎も戸惑いの声をあげ、倒れたまま後ろを振り向く。

いつのまにやってきたのか、先ほどと同じショットガンを構える黒髪の少女、曉美ほむらの姿があった。

「ほむら、ちゃん？」

「気安く名前を呼ばないでくれるかしら、それと…邪魔よ」

それだけ答えると、僅かに踏ん張りを入れた右足が地面を離れ、良太郎の横を高速で駆け抜ける。

かなりの速度を保ったまま、立ち上がったモールイマジンに肉薄すると、再びショットガンを向ける。

反射的にドリルアームを突き出すが、それに合わせて回転したほむらは銃身を直接突きつけ、至近距離から迷い無く発砲。

腹部に10発以上の弾丸を超至近距離で受け、モールイマジンの体が吹き飛んだ。

金髪の少女とは違うスタイルながらも、見事に銃を使いこなし、モールイマジンを圧倒するその戦闘技術。

だが、優勢なはずのほむらの内心は穏やかではなかった。至近距離から弾丸を受けてなお、モールイマジンは何事も無かつ

たかのように立ち上がり、再びほむらに襲い掛かったからだ。

（こいつ、効いてないの…！？）

自分が知っている怪物達は、ここまで攻撃を叩き込まれればほとんどが消滅。

倒すとまではいかない相手にも、かなりのダメージを与えられるはずだった。

だが、目の前のモルイマジンは、直撃を何度も受けてなお、決定的にダメージを受けている様子がほとんどない。

それどころか、ダメージを無視するかのようにほむらに対して攻撃を加えていた。

敵の攻撃をかわし、こちらの攻撃を当てる。

戦いに勝つために行うべき当たり前の方法が通用していない。

それがほむらに徐々に苛立ちを募らせる。

「だつたらっ！」

弾丸を使い果たしたショットガンの銃身を、フルスイングの勢いを利用してモルイマジンに投げつけ、僅かな時間を稼いで後退。

同時に左手の盾を眼前にかざし、無機質な音が響く。

そこに込められた『力』を発動。はめ込まれた砂時計の歯車のよなギミックが音を立て、盾表面の赤い光が砂時計のように流れ落ちる光景が『停止』した。

同時に、目の前でドリルアームを振り上げていたモールイマジンが『停止』する。

（とま、った…？）

既に立ち上がり、後方からその様子を見ていた良太郎が、モールイマジンが突如立ち止まった事に驚く。

同時にほむらが盾に触れ、中から無数の黒い物体を取り出す目の前で敵対する人物が動いているというのに、相変わらずモールイマジンは凍ったように止まったままだ。

（よく分からないけど、今なら！）

良太郎はその様子に戸惑いながらもチャンスと判断。その場から『動き出した』。

その何気ないはずの行動に驚いたのは、他ならぬほむらだった。後ろで『止まっている』はずの良太郎が、堂々と動いている事に。

（『この中』で、動いてる…！？）

その驚きが仇となり、無意識のうちに力を解除してしまった。ビデオの一時停止を解除したかのように、再び動き出すモールイ

マジン。

敵の殺気に気付き、取り出していた物体のスイッチを入れる事を断念して投げ捨て、ギリギリのタイミング飛びのくが、その左手がドリルの先端で切り裂かれた。

飛び散る赤い血飛沫が、彼女の視界に入る。

「あっ……！」

攻撃を受けた事で痛みが生まれ、ほむらの動きが明らかに遅くなった。

唸り声を上げ、何度もドリルアームを振り回すモールイマジンの攻撃を紙一重で避け続けるが、やがて足を滑らせて膝についてしまう。

「しまっ
」

その隙は圧倒的に致命的だった。

モールイマジンが右手を引き絞り、全てを貫くドリルをほむらの体に突き出す。

このまま鋭い先端が、ほむらの華奢な体を貫通し

「だああああ！」

横手から聞こえた良太郎の声と共に、モールイマジンの横腹にショットガンのグリップ部が叩き込まれた。

離れていた良太郎が、ほむらが投げ捨てたショットガンを拾い上げると、バットのようにフルスイングして叩き込んだのだ。

まともに衝撃を受けて吹き飛ぶモールイマジンを他所に、ショットガンを投げ捨ててほむらの前に立つ。

「大丈夫だった？」

「あ、なた…」

その背中中は、昨日出会った時のような弱弱しさも、先ほど金髪の少女を助けた時のようなやけくそさもない。

ただ純粹に、大きかった。頼もしかった。

少なくとも、ほむらはそう感じていた。

「君がどんな力を持つてるかは分からないけど、ただの銃とかじゃ多分、イマジンには効かないよ」

「…？」

聞きなれない単語に、言葉を失う。

「だから、ここは僕に任せて」

「ちょ、ちよつと待ちなさい！」

冷静な印象の彼女には珍しく、大きな声を上げていた。

立ち上がり、良太郎の腕を取って振り向かせると声を張り上げる。

「今の見てたでしょう！？ 銃弾をまともに受けても死なない怪物が相手なのよ！？ 何の力も無いあなたに、何が出来るって言うの！？」

「力なら、あるよ」

答えながらほむらに見せ付けたのは、先ほど拾った黒いケース。見ただけでは、ただの変わった印象のパスケースらしき物体だが、

「あのイマジンとは、何回か戦った事があるから。ほむらちゃんは下がってて」

良太郎が向ける顔に、思わず見入ってしまった。

そこにあるのは、昨日初めて出会った時や、先ほどまどかと一緒にいた時に見た顔とは全然違っていた。

強い意志を秘めた瞳。

自分と同じく、自分の知る少女達と同じく、戦う意思を持つ表情。決してぶれる事もないその視線の先には、立ち上がったモールイ

マジンの姿。

ほむらの肩に手を置いてどかせると、モールイマジンとほむらの間に立つ。

ほむらの脳裏に、様々な疑問が一気に押し寄せ、交錯した。

なぜ、彼はあの怪物の事を知っているのか？

なぜ、自分の力が働いていた中で動けたのか？

なぜ、怪物を目の前にして力強く立っていられるのか？

その答えを聞く前に、既に良太郎は行動を始めていた。

まだか達と共に逃げる際に使用していた赤い携帯電話を持ち、左手を眼前に翳す。

先ほどはモールイマジンに邪魔されたが、今度こそその手には、変わった装飾が成された銀色のベルトが握られていた。

慣れた手つきで左手を回し、腰に装着されるベルト。

表に見える銀色のバックル部分に、携帯電話を横向きで装着。

怪人を前にして行われるその行動に、ほむらは疑問と戸惑いを隠せない。

そして、思わず口に出していた。

「あなた、一体…？」

「僕は…野上良太郎」

初めて出会った時と同じように、笑顔で答える。

「それと、電王^{でんおう}っていうんだ」

「電、王…？」

ほむらの言葉に頷き、右手の物体 『ライダーパス』を構える。
左手で携帯電話『ケータロス』のボタンを押し、その場に響くミ
ュージックホーン。

それは、始まりを迎えるための儀式。

それは、誕生を意味する音楽。

それは、良太郎の姿を変える言葉。

残された最後の行動を行えば、全ては完了する。

その意味を知るのは、この場においては良太郎ただ1人。

そして、良太郎は言葉を叫んだ。

「変身！」

【LINER FORM】

パスを『デンオウベルト』にかざし、ベルトから響く機械音声。

同時に生み出された光の粒子が良太郎の体を覆いつくし、その姿を『変身』させる。

赤と銀を基調とした強化スーツ。

上半身には顔にも見える意匠の赤と銀の装甲。

デンオウベルトの左右には、黒と青で構成された4つのパーツ。
頭部に纏った仮面は、デンライナーの先端部『ゴウカ』を意識し
た赤い瞳と、それに追隨する青、黄、紫のライン。

頭頂部には、列車の上部に存在するパンタグラフ状の装飾。

いくつもの出来事を乗り越え、彼がたどり着いた『自分に来る
事』。

その願いを形にした、野上良太郎が戦うための姿。

その姿を知る人々は、今の彼をこう呼ぶ。

時間の波を捕まえ、人々の記憶という時間を守る時の守り人
『電王^{でんおう}』が、時を超え、異空間に誕生した。

第2話『それと、電王って言うんだ』 4（後書き）

ども、ウェイカップです！

変身シーンはやっぱり燃えますな。書いてて燃えるう！！

執筆BGMは『Real Action』。カラオケではよく歌っております。

デイクイド本編でライナーフォームの攻撃空ぶった時は笑いました
がw

・時間停止無効な良太郎

これについては後の話で判明する形にしますが、電王ファンの皆さんならすぐ分かる理由です。

ぶっちゃけ言えば、良太郎が だから。ほら分かったw

・子供良太郎になってからは不遇のライナーフォーム

今回はモモタロス達がいないので、当初はプラットフォームピンチ モモ憑依で俺参上！な流れにする予定でしたが、もう出しちまおうと堂々登場。

良太郎が自分の力で変身する形態ですし、何気に好きなフォームです。

しかし、超電王以降は登場しなくなってしまったのがちと悲しい。
r z

では、ご感想お待ちしております。

第2話『それと、電王って言うんだ』 5（前書き）

6 / 1 4	『ケータツチ』	『ケータロス』に修正
7 / 1 3	加筆修正	

第2話『それと、電王って言うんだ』 5

（な、なに…あれ…）

目の前で起こった良太郎の変身に対し、ほむらが真っ先に浮かんだ言葉がそれだった。

奇妙なベルトを装着し、叫んだと思ったら、一瞬で彼の姿が変化した。

まるで特撮ドラマに出るような強化スーツを纏ったそのカラフルな姿に、ただただ言葉を失っていた。

一方の良太郎は、慣れているはずの変身を終えても、自らの不安を拭えなかった。

彼が変身した姿の正確な名称は『電王 ライナーフォーム』。

デンオウベルトとライダーパスを用い、時の運行を守るために戦う戦士・電王の、数多く存在するフォームの一つであり、良太郎の持つオーラをフリーエネルギーと呼ばれる力に変換し、それを纏った形態だ。

通常なら彼の手元には、この形態のための専用の大剣が到着するのだが、いくら待っても武器が飛来してくる様子は無かった。

そして、いくら呼びかけても、モモタロス達の返事がない。

（やっぱり、変身してもモモタロス達との繋がりが感じられない、か…）

良太郎自身の戦闘力は、はっきり言って大した事はない。

電王として戦い始め、彼の傍にはいつもモモタロス達がいた。

彼らと体を共有し、各々が得意とするフォームを臨機応変に用いるのが電王の戦闘スタイルだ。

しかし、変身を終えてもやはりモモタロス達との繋がりは感じられない。

つまり、今は良太郎だけの力で戦わなくてはいけない。

「それでも…！」

今、目の前のイマジンを倒せるのは、電王としての自分のみ。

その現実を直視し、良太郎は思考を戦闘に集中させ、モールイマジンに突撃し、軽い跳躍から拳を叩きつける。

常人より遥かに高い能力を持つライナーフォームだが、振りおろした拳が直撃する事は叶わなかった。

「くっ！」

『電王…！ でん、おおおお…！』

モールイマジンの口から漏れるのは、相変わらず片言な『電王』という言葉のみ。

良太郎が記憶しているイマジンはほとんどが口が回っていたので、この口調に違和感を覚えるが、それを確認する暇もなく、モールイマジンはドリルアームを振りかざす。

「考えてる場合じゃないよね……！」

どうにかその一撃をいなして距離を取り、ベルトの両腰に備わった4つのパーツを手にする。

パーツの横に描かれた赤いマークを元に、一番と三番と四番を直線で接続。

二番を三番と並列に接続し、合体が完了。先端部に赤い刃が出現した。

デンメタルと呼ばれる特殊合金で作られた、電王専用の武装『デングッシャー・ソードモード』となった。

元々はモモタロスが好む武装だが、良太郎にとっても現状ではこれが一番扱いやすい武器だ。

デングッシャーを構え、モルイマジンのドリルを受け止める。

かなりの衝撃が両手を襲うが、どうにか耐え抜くと逆に身を引いて相手との位置を瞬時に入れ替え、無防備な背中にソードモードの一撃を叩き込んだ。

火花を上げたモルイマジンが振り返ったタイミングに合わせ、更に斬りつける。

圧倒とまではいかないが、幾度も電王として戦った経験が、彼の力不足を補っていた。

危なげながらも攻撃をかわしながら、デングッシャーを巧みに操って主導権を握る。

『グ、ガァッ……！』

振り下ろしの直撃を受け、モールイマジンが吹き飛ばされた。
それをチャンスと判断し、良太郎は再びライダーパスを取り出し、ベルトのバックルにタッチしようとするが、立ち上がったモールイマジンの様子がおかしい事に気付いた。

「グ、ガ…アアアアア！！」

今まで以上に激しい絶叫。

すると右手のドリルアームが突如分離し、ワイヤーのようなものと接続された状態で良太郎に襲い掛かった。

突然の遠距離攻撃に防御も間に合わず、直撃を受けてしまった。

「うあっ！」

背中から倒れて隙を見せる事は回避したが、モールイマジンは奇声を上げながら右手をがむしゃらに振り回した。

それに合わせ、ドリルが良太郎の四方から連続で襲い掛かる。

パスのタッチを中断し、デンガッシャーでどうにか叩き落とそうとするが、何度か受け止めた後、逆にワイヤーがソード部に巻きついてしまった。

「な、何、これ！？」

思わず口に出してしまった。

良太郎が知る限り、モールイマジンの武装にこのようなものは存在していない。

それに、ドリル部と繋がっているワイヤーが明らかに異様だった。まるで生物の鼓動のように波打ち、ワイヤーそのものが生きているという感覚さえ存在させる。

それは、先ほどまどかや自分を襲った怪物に茨に酷似していた。

しかしそんな事を考えている間にも、徐々にワイヤーを手繰り寄せてこちらに近づいてくるモールイマシン。

力比べでは明らかに負けている。

どうすべきか一瞬迷った瞬間、モールイマジンの体に生まれた無数の火花。

衝撃で体勢を崩し、ソードを縛っていたワイヤーも一瞬力が弱まる。

後ろを振り向くと、モールイマシンに向けてショットガンを放ったのであるう、ほむらの姿。

「ほむらちゃん！」

「何してるの！ 今よ！」

「う、うん！」

彼女が援護をしてくれた…その事実を受け止め、良太郎は今度こそライダーパスをタッチ。

【FULL CHARGE】

バックル部が虹色に輝き、先端部の『オーラソード』が強化。巻きついたワイヤー部が、強力なエネルギーによって霧散し、ソード部分が本体から切り離される。

同時に脳裏に走るのは、普段この技を使うモモタロスの口癖。

「必殺！え、えっと…僕の必殺技！！」

咄嗟に考えた技名を叫びながら、刃が無いデンガツシャーを虚空に振るう。

その動きと連動し、空中のソード部分が空を縦横無尽に駆け巡り、モールイマジンの体を連続で切り裂く。

最後に両手でデンガツシャーを引き絞り、自らの後方にソード部分が停止した事を確認し、気合と共に突き出す！

「モモタロスの真似斬りッ！！」

ドリル状に回転したソード部分が大気を貫き、高速でモールイマジンに直撃、その体を貫通。

必殺技

ソードモードのフルチャージ技『エクストリームスラッシュ』の前に、悲鳴すら残さずに爆発。

ソード部分がデンガツシャーの本体へと戻り、イメージを倒した事や毛玉の怪物なども現れない事を確認してから、良太郎はようやく一息ついた。

そのまま振り返り、ショットガンを盾に収納したほむらと目が合う。

「大丈夫だった？」

「…あなた、センスないって言われないかしら？」

「へっ？」

「何よ今の技名。聞いてるこつちが恥ずかしいわ」

ため息をつきながら答える。

その左手…先ほどモールイマジンの攻撃を受けた傷を右手で押さえているのに良太郎が気付き、腰からデンオウベルトを外す。

粒子が崩れ落ちるように電王への変身が解け、ポケットからハンカチを取り出すとほむらの左手を取った。

「ちょ、ちよつと!？」

「動かないで」

いきなり手を握られた事が原因か、ほのかに顔を赤らめたほむら

の言葉を見無視し、傷口の上から優しくハンカチを巻いていく。

少し赤い染みが残りそうだが、気にしない様子でハンカチを巻き終わると、安堵の笑みを浮かべた。

「とりあえず、これでいいかな。後でちゃんと消毒しておいてね」

「……」

いきなりの事にほむらの表情が唖然となっていた。

先ほどのまでの力の入った表情ではなく、年相応の普通の表情だ。と同時に、何かを思い出したかのように振り向くと、突然走り出した。

「あつ、ちょ、ちょっと待って！」

ライダーパスとケータロスをしまい、良太郎もその後を追って走り出した。

新たなイマジジンや先ほどの怪物達も見かけず、やがて良太郎はほむらに追いつく。

その視線の先には、既に怪物達を全て倒したのであろう金髪の少女。

少女の後方には、まどかとさやかが無事な姿もあった。

「まどかちゃん！さやかちゃん！」

「あつ、良太郎さん！」

「そつちも無事だったの！」

「う、うん。ほむらちゃんが助けてくれたんだ…ね？」

さすがに『変身して怪人と戦ってました』と正直にも言えず、ほむらには悪いと思いつつ咄嗟にごまかす。

同意を求めるが、ほむらは一瞬良太郎を見ただけで、すぐに視線を金髪の少女へ向ける。

同時に少女が微笑を浮かべる。

「追うなら早く追った方がいいわよ。この子達に話す事もあるし、今回はあなたに譲ってあげる」

「『グリーンシード』なら間に合ってるわ。それより、私が用があるのは」

刹那、その場に響く小さい音。

少女がマスキット銃を手に召喚し、まっすぐほむらに向けていた。

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるって言ってるの、分からない？」

「…」

2人の間に走る見えない火花。

ほむらの右手が盾に近づいていき、少女がマスキット銃の引き金に僅かに力を入れる。

その空気に不穏なものを感じ、良太郎が2人の間に割って入った。

「ちょ、ちょっとやめなよ2人とも！ 事情は分からないけど、今は僕らで争ってる場合じゃないよ！ さっきの怪物がまた現れるかもしれないのに！」

「それなら大丈夫。『魔女』が逃げた以上、もうすぐこの『結界』は消えるからね」

まどかが抱えているキュウベえが口にした瞬間、周囲の異空間が突如ねじれだす。

やがて割れるような音と共に、彼らの周囲は元の工事現場へと戻っていた。

「ほらね？」

キュウベえが答え、同時にほむらと少女もそれぞれの構えた手を下ろした。

ほむらの衣服が一瞬で元の制服となり、そのまま振り返って歩き

出す。

「あつ、ほむらちゃん！」

良太郎が背中に向けて声をかけるが、ほむらは振り返る事なくピルの外へと消えていった。

それを合図にするかのように、突如良太郎の体に何かが入り込んだ。

痙攣したかのようなその様子に、まどかやさやかが首を傾げる。

「良太郎さん？」

「ちょ、ちょっと？ どうし」

「『だああ！ やつと繋がったぜこんちくしょうがあー！』」

「ひうつ！？」

突然良太郎から放たれた乱暴な口調に、まどかが思わず身を引く。

さやかと少女も驚く中、良太郎は口調だけでなく外見も変化していた。

髪は逆立ち、一房だけ入った赤いメッシュ。

目つきはやたら鋭くなり、おまけに両目は真っ赤に染まっていた。

先ほどまでの、どちらかといえば気弱な良太郎はどこへ行ったのか。

その答えは、イマジンによる憑依。

イマジンは人に憑依し、その外見を変化させる力を持つ。

この状態はモモタロスが良太郎に憑依し、その体を使っている状態の外見…通称『モモタロスM良太郎』。

（も、モモタロス！？）

「『おい良太郎！ 何やってたんだお前！？ いきなり繋がなくなったと思ったら、突然繋がりがつて！！』」

（ちょ、ちょっと待ってよ！ 今はまずいつて！）

「『ああ！？ んなもん知るかあ！ 俺は最初からクライマックスだぜえ！！』」

（あ、ああ！ まどかちゃん達の視線が、視線が痛い！！）

良太郎の悲痛な叫びとは裏腹に、目の前でいきなり自分に向けて叫びだし、腰を落として決めポーズなど取る良太郎を見るまどか達の視線が、かなり痛かった。

（りよ、良太郎さんが不良になっちゃったあ！？）

（え、え、もうなんなのよこれええっ！！！）

（うーん…どうなってるの、かしら？）

（まったく、訳が分からないよ）

3人と1匹は盛大にため息をつき、モモタロスと良太郎の1人芝居に見える会話はしばらく続いたという。

そんな事があるとは露知らず、ほむらは夕暮れの街中を1人で歩いていた。

周囲を会社帰りの男性や、学校帰りと思われる学生の集団が談笑しながら歩く中、ほむらの脳裏には先ほどの出来事が繰り返し返されている。

「電王…イマジン…」

無意識のうちに口から出たのは、彼が変身した姿の名前と、戦った見慣れない怪人。

（『今まで』の時間には、あんな人もあんな怪物…イマジンもいなかった）

表情を仮面で覆い、見知らぬ怪物と戦っているという仮面の戦士。
イマジン

自分達とは違う戦う力と、『魔女』とも『使い魔』とも違う敵。今までの記憶を呼び起こすが、やはりあのような戦士の記憶はない。

その時、自らの左手に巻かれたハンカチが目に入る。

脳裏に浮かぶのは、このハンカチを巻いてくれた良太郎の顔。

「野上、良太郎…」

誰に言うでもなく、ほむらは無意識のうちに彼の名を呼んでいた。

次回予告

僕と契約して、魔法少女になってほしいんだ

でも、まどかちゃんとさやかちゃんは女の子だよ。戦うなんて…

あまり別の時間で好き勝手に動いてもらっては困りますねえ

俺、参上！

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら？』

時を越えて、願いが参上する！

第2話『それと、電王って言うんだ』 5（後書き）

ども、ウェイカップです！

第2話これにて完結！いかがだったでしょうか？

・モールイマジンのドリルアーム変化
イメー的には、仮面ライダーバースのドリルアーム+クレインアーム。

ただし、ワイヤー部分が使い魔の茨と似た形・・・
もちろん意味あります。今後もしろいろやっていきます。
いや、モールイマジンだけ出すって事じゃないですよ？w

さて次回、邂逅を果たした魔法少女と電王。

マミとキュウベえから語られる魔法少女の使命。

それに対し、まどかとさやか。そして良太郎が決めた事とは？
もちろん、イマジン組にも動きがありますのでお楽しみに！

では、ご感想お待ちしております。

ついでに、せっくなので技紹介。

・エクストリームスラッシュ ライナーバージョン
仮面ライダー電王・ライナーフォームが、デングァッシャーソードモードを用いて使用するフルチャージ技。
ソードフォームにおける『俺の必殺技パート2』と同じフォームから始まり、最後の一撃が真正面から刃部分を回転させ、敵を突き抜

けるタイプとなっている。

良太郎曰く『僕の必殺技・モモタロスの真似斬り』。

当作品とは無関係な話題ですが、声優の川上とも子さんが急逝なされました。

ケロロ軍曹の日向冬樹、AIRの神尾観鈴、ティルズオブデスティニー2のナナリー・フレッチなど、数多くの作品で僕らを楽しませる演技をなされた名優の方です。

病気のためとはいえ、早すぎる死に涙が止まりませんでした。

この場を借りてではありますが、謹んでご冥福をお祈りいたします。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 1 (前書き)

7 / 1 3 加筆修正

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』

1

「紅茶でよかったかしら? 良太郎さんも」

「うん。ありがとうマミちゃん」

女の子向けの家具が飾られた、とあるマンションの一室。

まどか達と同じ見滝原中学の制服を着た、金髪の少女 『巴マミ』と名乗ったこの家の主が、良太郎のカップに紅茶を注いだ。

そんな良太郎の横では、同じく紅茶を頂き、一緒に出してもらった色とりどりのケーキに舌鼓を打つ、まどかとさやか姿もある。

「いやあ、この紅茶もケーキもマジうまいっすよ!」

「あううう…おいひい…」

「うふふ、喜んでくれてうれしいわ」

心からの笑顔を見せる3人。

それは、つい先ほどまで異空間に閉じ込められ、異形の怪物に襲われた事など夢だったと思わせる光景だった。

それを眺める良太郎の頭には、ドスの効いた別の声が響く。

（おい良太郎、いつまで黙ってりゃいいんだよ!? 俺にもケーキ食わせろお!）

（いや、さっきみたいに勝手に体使われても困るし…）

（んな事言ってもよお！ さっきは事情知らなかったんだぞこっちはよお！？）

（も、もうちょっと待ってよ…）

異空間から脱出した直後、良太郎に憑依したモモタロスである。突然の変貌にまどか達は啞然とし、どうにかモモタロスを体の中に押し込んだ良太郎は、自分に向けて奇異の視線をぶつける3人＋1匹に対し、少し迷ったあげくこう言った。

『僕、たま〜にだけど…今みたいな暴れん坊とか、ホストっぽいのも、関西弁とか、子供みたいな口調になっちゃう病気なんだ…』

（待てコラああ！俺達病気扱いかあ！？）

体の中から叫ぶモモタロスの叫びが聞こえたが、とりあえず無視した。

まどか達も一応納得したのか、先ほどのM良太郎についてはこれ以上の追求は無かった。

時折『良太郎さん可愛そう…』だの『苦勞してるのね…っ！』だの聞こえたが、そこはとりあえずスルー！。

野上良太郎、少しは進歩しているのである。

淹れてもらった紅茶を口に含んだ時、マミの膝の上で座っていた

キュウベえが口を開く。

「それじゃあ話を続けよう。まどか、さやか。君達に頼みがあるんだ」

『頼み？』

名前を呼ばれた2人が揃って同じ言葉を返す。

まどかは律義にカップを置いて、さやかはフォークを口に入れたままでと、各自の性格を表すかのような格好でだが、キュウベえは気にしない様子で、自身の赤い瞳に2人を映しながら言った。

「僕と契約して、魔法少女になってほしいんだ」

「魔法…？」

「少女お？」

キュウベえが発した単語に、2人が顔を見合わせた。

「ゾンビの男の子と一緒に戦ってるチエーンソーの女の子の事かな？ あっ、日曜日のプリティでキュアキュアなあれ？ ハートキヤッチの最終回1つ前のバトルシーンは凄かったよね」

「何言ってるのよまどか。『お話を聞かせて！』って言いながら、

問答無用の全力攻撃で相手を沈黙させて『えへへ』って笑ってる白い魔王の事でしょ?」

「でもあれって、第4期が漫画になって主人公が男の子になっちゃってるよね。タイトルも『魔法戦記』になっちゃってるし」

「そりゃあ25歳で少女は名乗れないでしょ。原作の人は『純粋な心があればいつまでも魔法少女』って言うてるらしいけど、やっぱ年には勝てないわよね」

「ふつ、甘いねさやかちゃん。世の中には『お姉ちゃん』と呼ばれる人をトップにした人たちの集まりがあってだね。不思議なことに、その人たちは何年経っても17さ」

「そこまで。さすがにメタすぎるからやめておきなさい」

盛り上がった会話をピシヤリと止めたのは、現役魔法少女のバマミ。

「チエーンソーの方は『魔装少女』よ」と訂正しつつ、こほんっと咳払いをしてから話題を戻した。

「キュウベエの姿は、特殊な才能を持つ人しか見えないの。それが、私やあなた達なのよ。」

良太郎さんについては、さっきの空間に入ってしまった事で見えるようになったんでしょね」

「才能、ですか?」

まどかの問いに答えるように、マミは机の上に黄色に輝く宝玉を置く。

異空間の中で、マスケット銃を華麗に操って戦った少女　マミのベレー帽に飾ってあったものだ。

色こそ違うが、暁美ほむらの左手の甲にも似たような宝玉がついていた。

「これは『ソウルジェム』。私たちが、力を使うのに使う結晶よ」

「力…じゃあ、マミさんってやつぱり…？」

「そう。私は、キュウベえと契約した『魔法少女』よ」

宝石　ソウルジェムを手にし、自らの正体を明かすマミ。

そのまま、2人の顔を見ながら続けた。

「そして、あなた達にもその力が眠っているのよ。キュウベえが見えてるんですから」

「それが契約するための条件さ。そして僕と契約すれば、『どんな望み』でも一つだけ叶えてあげる事が出来るんだ」

キュウベえがその言葉を言った瞬間、さやかが一気にキュウベえに詰め寄った。

顔をガシッと掴み、超至近距離で鼻息を荒くして問い詰める。

「の、望みを叶えるって…それ、マジっすか！？ 金銀財宝でも、永遠の若さでも、満漢全席でも思いのままって事っすかぁ！？」

「さ、さやかちゃん、ちよつと落ち着いて！？」

「まどかぁ！ あんた、今のを聞いてなんとも感じないわけ！？ ドラマやアニメの中でしかない、どんな願いでも叶える方法が目の前にあるってのよぉ！？」

「そつだよまどか。君達が望みさえすれば、どんな願いでも」

「キュウベえ」

沈黙を保っていた良太郎がキュウベえに問いかける。

その口から放たれたのは、先ほどの言い訳の時とは天と地ほどの差も感じさせる真剣な言葉。

若干暴走していたさやかも思わず口を閉じ、その隙にキュウベえがさやかな手から抜け出してテーブルに着地。

その微動だにしない赤い眼で、良太郎をまっすぐ見つめる。

「なんだい、野上良太郎」

「その契約って…願いを叶える代わりに、まどかちゃんとさやかちゃんもさっきの怪物と戦えって事だよね？」

その言葉に、まどかとさやかの顔から笑みが一切消えた。
マミも言葉を話さず、部屋の中に静寂が訪れる。
やがて、キュウベえが口を開いた。

「鋭いね野上良太郎。その通りさ。

願いを叶える代わりに、魔法少女として魔女と戦う。それが、僕との契約さ。

マミも含めて、魔法少女はその宿命に値する願いを叶えた存在なんだ」

「た、戦う、って……」

さやかの口から出た言葉は、先ほどの期待に満ちた言葉とは打って変わり、消沈したものへと変わっていた。

まどかも言葉を返せず、良太郎とキュウベえの視線だけが交錯する。

良太郎がこの事実には、理由がある。
彼が幾度も電王として戦ってきた、イマジンの前例があったからだ。

モモタロス達のような一部を除き、イマジンは過去の人間に取り付き、『契約』を迫る。

それは『取り付いた契約者の願いを叶える』という、言葉だけを聞けば夢のような話。

しかし、イマジンが叶える願いは、他人の迷惑などを顧みない利己的な物。大金が欲しいと願えば銀行を襲い、サッカーのレギュラーになりたいと願えばチームメイトを傷つけるといった具合だ。

願いを半ば強引に叶える事で、イマジンはその人間が一番強い思いを抱く過去へと飛ぶ。

飛んだ過去では実態を保つ事が可能で、未来を自分の住みやすい世界に変えるために破壊活動を行うのだ。

例を上げれば、一人の人間を過去で殺したとしよう。

本来ならその人間が結婚し、子供を設け、その子供が大人になり、孫が生まれ、未来へ続いていく。

たった一人、その過去の人間を消してしまう事で、未来に続く多くの命が消える。

それらが数多く重なれば、やがて人の記憶によって成り立つ『時間』そのものが消失してしまう。

それを防ぐために、良太郎は電王として時を超え、イマジンと戦い続けてきた。

だからこそ、キュウベエの契約の裏に隠された真実にいち早く気づけた。

『望みを叶える』事と引き換えにした、『命がけの戦い』という真実に。

「でも、まどかちゃんとさやかちゃんは女の子だよ。戦うなんて…」

「別に僕は強制している訳じゃない。過去には契約しなかった子もいたし、マミのように契約した子もいる。それが事実さ」

キュウベエの発言に、良太郎は当事者であろうマミの顔を見る。その表情は先ほどと同じ笑みを浮かべてはいるが、眼は真剣そのもの。

一息ついてから、マミも口を開く。

「良太郎さん。私は、命を賭けるに値する願いと引き換えにキュウベえと契約したの。そりゃあ最初は戸惑ったけど、今はこの力を手に入れて良かったと思ってるわ。

絶望をまき散らす魔女から、この街の人たちを守る事が出来るんだもの。

心配してくれるのは嬉しいけど、契約は私自身が決めた事なの。キュウベえを悪く言うのはやめて」

「…うん、分かってる。ごめん」

「でも、良太郎さんの言う事も正しいわ。

鹿目さん、美樹さん。あなた達に叶えたい願いがあって、それが本当に命を賭けるに値するほどの願いなのか…よく考えてみて。

それで契約しなくても、誰にもそれを責める事は出来ないんだから」

「は、はい…」

「…分かりました…」

しばし誰も言葉を話さず、時計の音だけが部屋に響いた。

その重い空気を紛らわせようとしたのか、まどかが思いついたように口を開く。

「その…魔女って言うのは、さっきの毛玉や茨みたいなのなんですか？」

「ああ。あれは魔女が操る『使い魔』ね。魔女という女王を守る兵士……って考えればいいかしら。」

さっきの場所、私たちは『結界』って呼んでるんだけど、魔女はあの結界を生み出し、その中から使い魔を生み出して人々を襲うの。」

「ソウルジエムは魔女の存在を感知する力もあつてね。魔法少女は結界の中で魔女や使い魔と戦い、それを倒す使命を背負うんだ。結界でどれだけ暴れても、現実の世界に影響はないからね。」

マミの隣に降りたキュウベえが言う。

相変わらず真っ赤な眼で良太郎達を見つめ、ふさふさな尻尾を振り回していた。

沈んでいたさやかも、思い出したかのようにマミに向き合う。

「あつ、それじゃあさっきのモグラみたいなのも、その使い魔って言うやつなんですか？」

「うーん……あれは、私も初めて見るタイプだったんだけど……どうかしら、キュウベえ？」

「僕もあんなのは初めて見るね。魔女や使い魔特有の気配も感じなかったし……まあ、突然変異みたいなものって考えていいんじゃないかな。」

「そういえば、良太郎さんがあのモグラを引き寄せてくれたんですよね？」

まどかが思い出したように言い、良太郎が頬をかいた。

「う、うん。まあ逃げたはいいけど、倒してくれたのはほむらちゃんだったけどね」

「やつぱそうよねえ。いや、良太郎さんには悪いけど、あんな化物と戦える訳ないもんねえ」

「さ、さやかちゃん、ちょっと言い過ぎじゃ…」

「あはは、いいよまどかちゃん」

さすがに『僕も変身して戦いました』と正直にも言えず、ほむらが助けてくれた事にした良太郎。

ほむらもマミと同じ魔法少女という事は、以前に接触した事があったマミが話している事もあり、まどかとさやかはその話をあつさり受け入れた。

それからしばらくの間、マミの魔法少女話を聞いていたまどか達だったが、良太郎は3人の話を聞きながらも頭の中で思案する。

（あのイマジン…何か、様子がおかしかった…）

思い出すのは、結界の中で戦ったモールイマジンの事だ。あの姿のイマジンとは過去に何度も戦ったことがあるが、どの同形状のイマジンとも違う様子だった。

口調は片言で、武器には見た事もない能力が備わっていた。
そして何より…

（強かった…今まで戦った、どの同じ姿のイマジンよりも…）

まどか達に気付かれないようにズボンを握り、窓から外の夕焼け
を見つめる。

時間の逆転という現象に巻き込まれたデンライナー。

魔法少女と魔女。

モモタロス達との繋がりが切れる空間。

突如現れたイマジン。

確証はないが、全てがどこかで繋がっている。

良太郎は、心のどこかでそう感じていた。

（一体、何が起きてるんだ…）

（…腹減った…）

（あつ、ごめんモモタロス。忘れてた…）

体の中のモモタロスが、ガクンとこける音が聞こえたような気がした。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 1（後書き）

ども、ウェイカップです！

第3話の1つ目となりました、いかがだったでしょうか？

最初の魔法少女論争・・・？

ふつ、誰にだって遊びたい時はあるだろう・・・（すいません調子に乗っただけですごめんなさい

ちなみに作者的に魔法少女と聞くと、『リリカルなのは』と『神風怪盗ジャンヌ』辺りが浮かびます。

ジャンヌが魔法少女ものか？いや、変身してミナス力だし・・・違う？

・良太郎VSキュウベえ

イマジンの願いによる代償を知っている良太郎。

意外に鋭い場面もありますし、彼なら契約の裏にすぐ気付くでしょう。

よって今回、魔法少女の宿命を察知する役目を担ってもらいました。

さて次回、メインヒロインとなってるはずのほむほむの出番はあるのか！？（あ？

では、ご感想お待ちしております。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 2 (前書き)

7 / 1 3 加筆修正

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 2

太陽が完全に沈み、空は漆黒に包まれた時間。

街灯などもなく、所々に見える星の光のみが地面を照らす中、良太郎は山道を登っていく。

その傍らには、周囲に人がいない事で実体を見せた、モモタロスの姿もあった。

「や、っぱり…ぜえ…次からは、デンバードに…乗って、行く…ぜえ…」

「なっさけねえなあ。しばらく会ってなかった間、トレーニングとかしてなかったのかよ?」

「す、少しはしてたよ…たまに…」

「少しかよっ! おまけにたまにかよっ!」

疲労が溜まった足を押さえながら答え、溜まらず近くの木に背を預けて座り込んだ。

限界ではないが、疲れてないといえは完璧に嘘になる。

逆にまだまだ余裕なモモタロス、軽くジャンプして近くの木の枝に座りこみ、不本意ながらも良太郎がしばし回復するのを律儀に待っていた。

良太郎の息遣いと、夜の山に響く風の音だけが響く。
そんな中、モモタロスが口を開いた。

「お前、さっきのマミって女が言ってた『アレ』、どうすんだ？」

「…」

2人の頭に蘇るのは、1時間ほど前のマミの部屋での会話。

キュウベえの口から語られた、魔法少女の果たすべき使命。

すなわち、絶望を撒き散らす魔女との命がけの戦い。

その事実を知ったまどかとさやかは、契約については一時保留とした。

まどかに関しては、叶えて欲しい願いがまだ見つからなかったという事もあったのだろう。

キュウベえは意外にも「そう、ならしょうがないね」とあっさり引き下がった。

あまりにもあっさりとしたその様子に良太郎は若干の不安を覚えたが、ここで話をぶり返すのも何だろうと思い、契約についてはこれ以上の追求はしなかった。

その後、マミの口から魔法少女の力、魔女や使い魔についての話を色々聞いたまどか達。

口では保留と言いながらも、やはり気にはなるのだろう。

質問が多くなった事にマミは一度会話をやめ、しばし考えた後に手を打った。

「ねえ2人とも。しばらくの間、私の魔女退治を見学してみない？
魔法少女体験ツアー…みたいなものかしら」

「体験、ですか？」

「そつ。安全な場所で私の戦いを見てもらうの。
何も知らなかったさっきの状態より、事情を知ってから戦いを見る
方が知れる事は大きいでしょ。
もちろん強制はしないけど…どうかしら？」

「まあ、そりゃあ確かに…」

さやかが腕を組んで頷く。
やがて2人が顔を見合わせ、同じ事を考えていたのだろう、すぐ
に答えは出た。

「マミさん、よろしくお願いしますー！」

「かつこいい所、見せてくださいよお！」

「これは負けられなくなったね、マミ」

「そうね」

キュウベえに笑みを見せるマミ。

その顔はそのまま良太郎へと向けられた。

「良太郎さんはどうします？」

「で、でも僕は、その魔法少女…には、なれないんだよね？」

「そりゃあね。僕を見れるのがまず1つ。

それと発展途上の女性…つまり、マミ達ぐらいの女の子というのが、魔法少女の絶対条件だからね」

キユウベえが改めて説明する。

良太郎はマミのように魔法少女として戦う事は出来ない。

魔法少女とは違う電王という力を持つてはいるのだが、その事情を話してない以上、まどか達にとって良太郎は『魔女の存在を知った一般人』という認識でしかない。

その立場を利用し、このまま彼女達が進もうとしている世界から遠ざかるという選択肢も浮かんだが、良太郎は一瞬でそれらを頭の中から消し去った。

「…少し、考えさせてもらっていいかな。

このまま僕だけ何も知らないままっていつのも嫌だし」

「分かりました」

良太郎の保留の返事に、マミは嫌な顔をする事無く笑顔で答えた。

その後、良太郎は3人と連絡先を交換。
翌日の放課後、見滝原中学の校門で待ち合わせという事になり、
今日は解散となった。

ちなみに、繁華街で拾っておいたまどかの学生証はしっかりと返しておいた。

そんな会話を思い出し、良太郎はモモタロスに答える。

「モモタロスはどう思う？あのキュウベえとの契約の事」

「へっ、ハッキリ言って気に入くわねえな。願いを餌にして何かをさせるなんざ、うさんくささプンプンすんじゃないか。あゝおっかねえ！」

「……って、イマジンも似たような物じゃないの？」

「…………それはそれ！これはこれだ！！」

しっかりと溜めた後で返すモモタロス。
その様子に苦笑しながらも、良太郎は真剣な表情で考える。

「……僕は、マミちゃんが……魔法少女が戦う理由を知ってしまった。
どんな願いかは知らないけど、そのためにマミちゃんが戦うって
いうのは、やっぱり間違ってると思う。」

僕の力が助けになるなら、マミちゃんの代わりに僕が戦うっていうのが本音かな」

「お前らしい考えだなあ。でもよ、良太郎」

モモタロスが木から飛び降り、まっすぐ良太郎を見た。

「あのマミって女、お前と似てるぜ」

「ぼ、僕と？」

「ああ。戦うって事をしつかり受け入れてやる。

最初はどうか知らねえが、今はあれだけハッキリ覚悟してんだ。俺らがどうこう言ったって、あいつは戦う事をやめねえだろうよ。

お前だって、電王になってからはそうだったじゃねえか。だからほっとけねえんだろ？」

「…うん」

デンライナーと出会い、ハナと出会い、モモタロス達と出会い、電王として戦う事となった良太郎。

最初こそ戸惑いの連続だったが、彼が抱いていた『誰かの不幸を消してあげたい』という思いを胸に、電王として戦い続けてきた。

むしろ良太郎は平和主義者だ。戦う事自体は好きではない。

だが、全然知らない誰かだろうと、目の前で困っている人がいるなら手を差し伸べてあげたい。

それが、良太郎が電王として戦う一番の理由であった。

良太郎の電王としての始まりからずっと共にいたモモタロスは、その良太郎をずっと見続けてきた。

だからこそ、彼にはマミの戦う意思が分かっていた。

何か利益があるわけでもない。誰からも認められない。

それでも戦い続ける道を選んだ、彼女の決意を。

「どうせお前の事だから、なんとかしなきゃって考えてんだろ？ だったら好きにしたらいいじゃねえか。」

どうせデンライナーにいても片付けさせられるだけだからよ、手伝ってやるぜ」

「モモタロス…ありがとう」

「へっ、礼なんざいらねえよ。俺はただカッコよく戦いたいだけだからな！」

照れ隠しか、山道を登りながら答えるモモタロス。

その言葉に微笑を浮かべ、良太郎も重い腰を上げ、山道を再び登り始めた。

数分後、ようやくたどり着いたデンライナー。

まだ片付ける部分は山のようにあるが、それでも良太郎達が食事を取れるだけのスペースは確保されていた。

ハナから『どこ行つてたのよバカモモ!!』と鉄拳制裁を受けた

モモタロスに苦笑しつつ、良太郎はナオミが用意したチャーハンを口に運びつつ、今日の出来事を皆に説明した。

まどかとさやかとの出会い、ほむらとの再会、魔女と使い魔、マミという魔法少女、キュウベえとの契約。

そして、突然結界の中に現れたイマジンの事を。

「イマジンって、本当に？」

「うん。前に戦ったイマジンと結界の中で戦ったんだ。

ほむらちゃんが手伝ってくれてどうにか勝てたけど…凄いい、強かった」

良太郎が強いと言うのだ。ほんの少しではなく、かなりの強さだったであろうと、ハナ達が驚きの表情を見せる。

「魔法少女ねえ。人知れず戦うなんて、僕達みたいな存在がこの時間にもいるなんてねえ」

「世界は広いもんやなあ。泣けるで！」

「でさでさ、良太郎はその人達を手伝うって事？」

「うん、僕はそのつもりなんだけど…」

リュウタロスの問いに答える。ウラタロスが「でもさ良太郎」と口を挟んだ。

「そのまどかちゃんやマミちゃんって女の子達には興味あるけど、この時間の人間じゃない良太郎がそこまで関わっていい訳？」

デンライナーがいつ直るかは分からないけど、僕らはこの時間にいつまで入れるか分からないんだよ？」

彼らはこの時間に対しては、あくまで異邦人に過ぎない。

まどか達の未来の事を知らないとはいえ、本来あるであろう未来に介入する権利は彼らにありはしないのだ。

それに対し、良太郎は語尾を弱める事なく答えた。

「分かってる。でも僕は、まどかちゃん達をこのまま放っておく事は出来ない。」

それにイマジンが関係してる以上、それを止めるのが僕の…電王の役目だから。

少なくとも、イマジンが現れる原因が分かるまでは、マミちゃんを手伝おうって考えてるよ」

一刻も早く元の時代に帰る事。それが一番の目的なのはもちろんだ。

だが、14歳の女の子達が戦いに巻き込まれている。

その事実を知って、このまま黙ってこの時代を後にする事は出来なかった。

それに気付いてか気付かずか、モモタロスがウラタロスに詰め寄る。

「へっ！怖気づいてんのかカメ？」

「そんな訳ないじゃない、センパイじゃあるまいし。一応聞いてみただけだよ。もちろん、僕も手伝うしね」

隣で座っていたキンタロスとリュウタロスも、良太郎の方を見る。

「俺の命は、前から良太郎に預けとる。良太郎が手伝うって言うなら、オレも手伝うで！」

「僕も僕も！なんか面白そうだし！」

「って小僧！遊びじゃねえんだぞ、分かってんのか!？」

「分かってるよ、モモタロスじゃないんだし」

いつもの調子で騒ぎ出すイマジン達。

更に横を見れば、ハナとナオミも揃って頷いていた。

良太郎の心を仲間の暖かさが包んでいく。

自分が勝手に始めた事なのに、誰一人欠けることなく協力してくれるという。

それが何よりも嬉しかった。

「あまり関心はしませんねえ」

そんな盛り上がりをピシヤリと遮断するかのように、定位置である椅子に座ってチャーハンを口に運ぶオーナーが口を開く。

チャーハンの上部に立てられた旗を倒さないように、まるで砂場の棒取りゲームの要領でチャーハンをすくっていく。

「いくら良太郎君とは言え、あまり別の時間で好き勝手に動いてもらっては困りますねえ」

「で、でもオーナー！」

「ウラタロス君が言った通り、私たちがここにるのはあくまでデコンライナーの故障によるものです。

本来ならパスの貸し出しさえ特例だというのに、今以上にこの時間に関わってもらっては、時の運行に差し支える恐れがあります」

更にチャーハンの山を削り、僅かな量で国旗旗を支えている。

良太郎達がオーナーの言葉に消沈する中、更にチャーハンの山をすくおうとした瞬間、旗がパタリと横に倒れた。

「
」

スプーンを落とし、絶叫に近い表情を見せるオーナー。

山崩しに特別な思い入れでもあるのか、即座に食事を終わらせて

立ち上がり、良太郎達の横を抜けて前部車両へと歩き出す。

別車両へと続く自動ドアが空いたタイミングでいきなり立ち止まると、「しかし」と言いながら振り返った。

「デンライナーの修理にはもう少し時間がかかります。イメージがその魔女と関係している可能性がある以上、それを放っておくわけにもいかないでしょう」

「オーナー、それじゃあ…！」

良太郎達の表情が明るくなるが、それを止めるようにステッキを突き出す。

「ただし！ 分かってるとは思いますが、タイムリミットはデンライナーの修理が終わるまでです。

それが済み次第、私たちは速やかにこの時間から抜けますので、それを忘れないように。いいですね？」

「へっ、上等だ！ それまでにイメージの親玉を探し出して、キュウベエの野郎の目的をハッキリさせりゃいいんだろっが！やるぜお前ら！」

モモタロスの激に、全員が頷きあう。

すぐに良太郎はケータロスを取り出し、マミにメールを送った。

【件名・魔法少女ツアーについて】

【本文・夕方の話だけど、明日は僕も参加するよ。放課後の時間に学校の前で待ってる】

「やれやれ、随分変な事になったものだね」

家の灯りが数多く消えている深夜。

マミのマンションの屋上で、キュウベえは夜空を見上げていた。

相変わらず微動だにしない無表情と、月を映す赤い瞳。

誰に言う訳でもなく、誰に聞かせる訳でもなく、独り言をつぶやく。

「魔女の空間に入ってしまっただけなら、魔女や結界を認知する事はできる。でも、素質が無い人間に僕の姿が見れるわけがないのになあ」

その脳裏に映るのは、結界に入り込んだ青年
顔。
野上良太郎の

魔法少女になる資格を持っていないのに、自分の姿を見る事が出来る青年。キュウベえにとって初めての出来事だった。

「まあ彼については、スピアでも使って行動を調べてみるのも手かな。明日もマミと一緒に行動するみたいだし。」

まったく、僕はノルマを達成できればそれでいいのに、これだから人間は訳が分からないよ」

何の表情の変化もなく、言葉の抑揚もなく、ただ言葉という単語のみを呟く姿。

かなりの不気味さをもしだし、同時に彼が人間とは違う生物である事を嫌でも分からせる。

「それと、あのモグラの怪人…あれも気になるね。多くの魔法少女や魔女達を見てきたけど、今まであんな怪物は出てこなかったし」

次に口に出したのは、結界に現れた怪人 イマジンについて

「ただ」と言いながら、その白い尻尾が左右に揺れる。

「あの怪人、魔法少女や魔女と同等…それ以上のエネルギーを感じた。あの莫大なエネルギーを取り出す術が見つかれば、魔法少女システムより楽にエントロピーの法則を越えられるかもしれない」

マミにさえ話した事がない謎の単語を放ち、ようやく振り返って歩き出した。

「さて、これから忙しくなりそうだ。まずは明日、隙を見てまどか

達に契約を迫ってみよう。魔法少女は多いに越した事はないからね」

次の瞬間、キュウベえの姿は屋上から掻き消えていた。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 2 (後書き)

ども、ウェイカップです！

今週はライダーと戦隊がお休み！

おのれオープンゴルフ！今年も貴様のせいでスーパーヒーロータイムが破壊されてしまった！！

まあ昼まで寝れますから、いいっちゃいいんですけどねw

・キユウベえや魔女、結界を見れるか否か？

これは個人的設定で決めちゃったんですが、結界に取り込まれた一般人は、結界内では魔女や使い魔を認知できます。

これは上条恭介が、魔女化したさやかを結界内で目の当たりにした事からの推測。

ただ、生き残って結界から外に出してしまうと、それ以降魔女や結界を認知する事は出来ません。もう一回取り込まれりゃ別ですが・・・

同時にキユウベえの姿についても、認識できるのは魔法少女の素質がある少女達のみなので。良太郎が普通の人間なら見えないはずです。

彼がキユウベえを認識できてるのは、特異点という体質だから。

まどか達は「結界に巻き込まれたから」という理由で納得してますが、キユウベえは答えませんでした。

QB「だって質問されてないからね。言う必要もないだろう?」だそうです。

これだからQBは・・・(怒)

・ケータロス

携帯機能は普通に搭載されてるとの事なんで、メール機能も入って

るでしょう。

案外、Wi-Fiとかワンセグとかも普通に搭載されてそうですw

余談ですが、今回も間違えてケータッチと書いてしまいそうに・・・
どこの破壊者ですかあんたはw

その内マージフォンとかシヨドウフォンかモバイルーツとか書いち
やいそうで怖いw

良「よし、ライナーフォームに変身！」

ケ『ゴオオオカイジャーツ！！！！！！』

良「あれ？」

では、感想お待ちしております。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 3 (前書き)

6月25日訂正

黒い輝きを放つ宝玉 紫で染まった宝玉

黒かったらほむほむ魔女になっちゃうつうつうつ!!

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 3

天気は快晴。

雲がほどよく広がり、暑すぎず寒すぎずという絶妙なバランス。絶好のピクニック、バーベキュー、そして魔法少女体験ツアー日和?である。

目の前を通る学生達だけでも、長袖だったり半袖だったり、この時期特有の変化が見られていた。

「僕が学生の時もあんなだったなあ」と、己の過去をなんとなく思い出しながら、良太郎は見滝原中学校の校門前に立っていた。

そんな彼の傍らには、ここまで乗って来た独特なフォルムのバイク。

名称は『デンバード』。市販などはされておらず、この世界で良太郎しか持っていない。

と言うのも、このバイクはデンライナーの備品のような扱いだからだ。

デンライナーの先端部に格納されているデンバードは、デンライナーのコクピットも兼用し、時間移動の際の行き先を決定する機能も兼ね備えたスーパーバイクである。

もつとも2人ほどこれと似た形状のバイクを持つ人物がいるのだが、1人は遥か未来の世界、1人はどこも知れぬ時の中である。

手元の腕時計を何度か確認しながら、時折校門を見ている。

一歩間違えれば不審者だが、弟か妹を待つ兄とも思われているのである。変に声をかけられる事もなかった。

「少し早かったかな…?」

(良太郎く、ぷりりく)

そんな彼の頭の中には、さきほどからこのフレーズばかりが響いている。

うつぶせで顔だけ前を向き、コロコロ転がりながら言うイメージが見えたりした。

(ぷりりく、ぷりりく)

「…帰りまで我慢したら、僕の分あげるから…」

(マジで!?!よっしゃあ!!)

良太郎、観念して根負け。

モモタロス、まるで子供である。

そんな会話をしながら待っていると、徐々に校門から出てくる学生達が増えてきた。

時計を見ると時刻は3時過ぎ。

マミからメールで聞いていた通り、授業が終わって下校する生徒が多くなる時間だ。

学生達の流れを見ながら目的のまどか達を探す良太郎。

その視線が、1人の女生徒に固定された。

「あつ……」

思わず声を上げた良太郎の視線の先で、1人の少女が歩いていた。流れるような黒髪、同じく黒い瞳の少女……晁美ほむらだ。

隣には誰もおらず、ただ1人で校門から出てきたほむらもちちに気付いたのか、良太郎に視線を向けて立ち止まる。

しばらくその状態が続き、やがてほむらが振り返って歩き出した。声をかけようとしたが、歩きながらこちらを横顔で見ると、顔をクイッと自分の方に動かす。

口には出していないが、「ついてこい」という合図か。

良太郎は少し考えた後、デンバードを押しながら歩き出す。モモタロスも先ほどの『ぷりゅん』状態から、真剣な声に戻っていた。

（行くのか？良太郎）

「うん……彼女は僕が電王っていう事を知ってるし、聞きたい事もある。」

あつ、それとモモタロス。勝手に出てこないでよ？」

（さあてな）

それだけ言い、モモタロスは良太郎の奥へと引っ込んでいく。既に小さくなっていたほむらの背中を追い、歩き出した。

「あつ、そつだ」

と、同時に何かを思いついたかのように、ケータロスを取り出す。耳に当てて目的の人物と話し、やがてケータロスをしまつてから再び歩き出す。

ほむらも律儀に待っていたようで、やがて2人は微妙な距離のまま見滝原中学を離れていった。

30分ほど歩き、2人がやってきたのは雑居ビルの屋上。

最初こそ中に入るのを戸惑ったが、ほむらが相変わらず無言で「さつさと来て」と顔をクイクイ動かすので、仕方なくデンバードを止めて中に入ると、そこには誰の気配も感じられなかった。

疑問に思いながらもほむらを追って階段を登り、ようやく屋上でほむらが立ち止まる。

念のためにと屋上のドアを閉めたタイミングで、ほむらがこちらに振り向いた。

「あなた、一体何者なの？」

「い、いきなりだね」

「目の前であんなの見せておいて、疑問に思わない方がどうかと思うけど」

やはり彼女の目的は、良太郎：というか、彼が変身した電王についての情報だろう。

これについては予想が出来ていたので、良太郎は少し考えた後、逆に質問を返した。

「そういう君こそ何者なの？結界の中にいたし、戦い慣れしてるみたいだし」

「質問を質問で返すのは関心しないわね。
バマミと接触した以上、大方の予想はついてるのでしょうか？」

風がほむらの長い黒髪をたなびかせ、片手で押さえながらも一方の手を開く。
そこにあつたのは、紫で染まった宝玉 マミの持つ物と同じ
ソウルジェムだ。

「そう、私も彼女と同じ。
願いの成就と引き換えに魔女と戦う使命を背負った『魔法少女』
よ」

（やっぱり…）

良太郎の予感ハ的中。

彼女もまた、何らかの願いをキュウベえに叶えてもらい、異形と戦う宿命を背負った存在だった。

風が収まり、ソウルジェムを懷に収めながら口を開く。

「次は私の質問に答えてもらっわ。あなた、何者なの？」

「…あの時言っただよ。僕は電王。あの怪人…イマジンと戦ってるんだ」

質問の答えをもらっておいて、こっちは何も返さないのはフェアではない。

良太郎もこれといった抵抗も見せず、率直に答えた。

さすがに時を越えてきたとは言えないが、電王としての姿を見せている以上、これぐらいは言っても構わないだろうという判断に基づいてだ。

ほむらはまだ完全に納得していないのか、続けて口を開く。

「その電王って言うのは何なのかしら？あのイマジンって言うのは、魔女が使い魔の一種なの？」

「それは…」

この質問に正直に答えていいものかと思案する。

口を閉じたのを見たほむらはため息をつき、『別の質問に変えるわ』と言った。

良太郎が全く予想していなかった、その質問とは、

「あなた、何故この時間にいるのかしら？」

「っ!？」

明らかに良太郎の顔が驚愕に変わる。

電王やイマジンに関する質問だけと思っていたというのもあるが、このような質問をされるとは完全に予想外だった。

『この場所』という質問ならまだ分かるが、ほむらはハッキリと『この時間』といった。

まるで、良太郎が別の時間の存在だと知っているかのような質問。それに気付いてか気付かずか、ほむらは更に続ける。

「下、見てみなさい」

「？」

ほむらに言われるまま、柵から下を覗き込む。

そこから見えるのは街を行く人々。少なくとも、良太郎はその光景を予想していた。

「…えっ…？」

思わず声をあげる。

良太郎の視線の先に映っていたのは、道行く人々…そこまでは予想通りだった。

しかし、人々が止まっているのは完全に予想外だった。

人も、車も、ボールも、信号も、虫も、鳥も、全てが停止していた。

それも整列して止まっているのではない。

ボールや鳥は空中で、ボールを持っていたのであろう子供は投げ終わったままの姿勢で、車は十字路を曲がる途中で、人は笑いあう表情のままです。

「これが私の力よ」

横からかけられた声にほむらを見ると、一瞬の間に彼女の衣服は変化していた。

見滝原中学の制服とは異なる暗色系の衣服、左手に埋め込まれたソウルジェムと砂時計の盾。

結界の中で戦っていた、魔法少女としてのほむらの姿だった。

かざしていた盾に見える、止まっていた砂時計が再び動き出す。

それと同時に、下に見える街には再び活気が戻っていた。

車が走り去り、笑い声が聞こえる。

まるで先ほどの状況に気付いていないかのように。

「この力が働いている間、私以外の存在は何があらうと動く事は出来ない。」

でも昨日、イマジンと戦った時にあなたは動いていたわ。『誰も動けない』はずなのにね」

良太郎の脳裏に蘇るのは、ほむらと戦ったモールイマジン。

ほむらが目の前で武器を取り出している間も、武器を振り上げたままで立ち止まっていたあの姿。

（あれは、ほむらちゃんの力だったんだ…！）

それを知らず、良太郎は逆にチャンスと思い、ライダーパスを拾うために動いてしまった。

だからこそほむらは驚愕し、力を無意識の内に解いてしまったのだ。

そして、ほむらが決定的に言った。

「もう一度聞いわ。」

あなたは『私の知るこの時間』には存在しないはず。なんであなたは今、この時間にいるの？」

瞳をそらさず、まっすぐ良太郎を睨みつける。

同時にその質問に、良太郎は違和感を感じた。

良太郎が別の時間から来たというのは、仮に気付かれているとしても。
よう。

最悪、この状況なら知られても仕方ないと思った。

だが、たった今彼女は言った。『私の知るこの時間』と。

だからこそ良太郎は疑問に思った。

まるで『この時間』を繰り返しているといった、その口ぶりに対して。

「僕は
」

「っ！？」

その時、ほむらが突然虚空を睨みつけた。

彼女の視線の先には、このビルとほぼ同じ大きさの廃ビル。
良太郎からも見えるそのビル全体が、突如歪み出したのだ。

それは、良太郎も昨日巻き込まれた魔女の結界。

道行く人は気付いていないのか、誰も騒いだりはしない。

ほむら達魔法少女や、一度巻き込まれた良太郎にしか見えないの
だろうか。

「あれって、魔女の結界……ほむらちゃん！？」

良太郎の制止も聞かず、ほむらは屋上を力強く踏みしめると跳躍。刹那、その体は何者かに叩き落され、再び元いたビルの屋上へと戻された。

「っ！」

空中でどうにか体勢を立て直して危なげに着地すると、上空を睨みつける。

そこにいたのは、遅れて屋上に着地した2体の異形。緑の体色にキリギリスをイメージさせる異形と、黒い体色にアリの模した異形。

童話・アリとキリギリスのイメージから生み出された『アントホッパ―イマジン』だ。

そしてこのイマジンもまた、過去に良太郎が戦った事があるイマジンである。

「イマジン！？」

『電王…！たお、す…！』

『ヒヤハ、ハハア！女あ！てめえもだああ…！！』

アリのイマジン『アントイマジン』は寡黙に、ギリギリスのイマジン『ホッパリーマジン』は狂ったように笑いながら。

共に童話の通り、働き者のアリとお調子者のギリギリスを意識しているのか、言葉遣いがハッキリと分かれていた。

その見た目の細さとは違う力強い攻撃をギリギリでかわしながら、手に持ったデノオウベルトを装着。

ほむらもアントイマジンのスピードに苦戦しているのか、結界に向けて飛び出すタイミングを計れずにいる。

やがて2人は背中合わせとなり、それぞれの眼前に敵の姿を納めていた。

油断なくホッパリーマジンの動きを見ると、後ろでほむらがぶつぶつ何かを言っているのに気付いた。

「…なんで『今回』は、こんなまで出てきてるの…!？」

「こん…かい？」

その言葉に違和感を覚える。

同時にそれをチャンスと判断し、イマジン達は全く同時に2人に襲い掛かった。

2人も僅かに意識を逸らしていたためか、電王への変身も盾から武器を取り出すのにも間に合いそうにもない。

『どいてろお前ら!!』

刹那、叫び声と共に良太郎の体から光の球体が飛び出した。

球体は2人の間を回転しながらアントホッパーマジン達に体当たりを行い、無理矢理弾き飛ばすとそのまま赤い体色の人型となり、憑依していたモモタロスが屋上に降り立つ。

「モモタロス！」

「よう良太郎！やっつと俺の出番だなあっ！」

「か、体の中から…出てきた…？」

彼女にしては珍しく呆気にとられた様子を見たモモタロスが、ほむらの顔を見る。

「てめえが…あけ、ほむ…思い出せねえから、『ほむほむ』でいいな」

「ほむ、ほむ…？」

「違うよモモタロス、曉美ほむらちゃんだよ」

「けっ、呼びづらいからほむほむでいいだろうがよ！」

答えながら振り返ると、いつのまに合流したのかイマジン達ができ上がった。

ほむらも表情を真剣な物へと戻し、盾から取り出した二丁の黒い拳銃を両手に持つ。

魔女の結界へ行く事より、ここでイマジン達を倒す事を優先した決意でもあった。

一方、良太郎とモモタロスは顔を見合わせる。

長い間共に戦った二人は、それだけで全ての意思を疎通させた。

「そんじゃ、分かってんだろうな良太郎！」

「最初からクライマックス、だよ。行くよ！」

ケータロスを装着していない状態のデンオウベルトのバックル部の4つのボタンの内、一番上の赤いボタンを押す。

鳴り響くのは、甲高い音と力強いリズムの鼓動。
それは良太郎とモモタロスを繋ぐ合図。

「変身！」

【SWORD FORM】

バックルが赤く輝き、モモタロスが再び精神の状態となって良太郎の体と重なる。

全身はライナーフォームの時と違い、銀と黒を基調とした姿
電王の基礎形態である『プラットフォーム』となり、さらに虚空

に6つのパーツが生まれ、良太郎の周囲を回転しながら上半身に連結して合体し、赤い装甲を纏わせる。

頭部の仮面中央のレールの後部から流れてきたのは、モモタロスの意思を秘めた桃型の装甲。

レールを走るように眼前に移動したそれが真つ二つに割れ、赤い二つの瞳へと変化。

変化が終わり、全身から溢れるのは、良太郎と重なったモモタロスの荒々しい気配。

右手親指で自分を指差し、脚を開き、大きく手を左右に広げ、自らを決める言葉を叫ぶ。

「俺、参上!!」

赤いバツクル、赤い装甲、赤い瞳。

全身を赤で染めた、電王の数あるフォームの1つ。

モモタロスの戦う意思、そして力を宿した姿。

『電王 ソードフォーム』、参上。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 3（後書き）

ども、ウェイカップです！

先日のニコニコ動画、まだマギ全話一挙放送よかったですね。

仕事の都合で帰宅が遅くなって、見れたのは7話？（さやか魔女化回）からでしたけど、

初めて見たまどか マギカは、すごく面白かったなって。

同時に、集めてた情報との相違点ありまくりでプロットを少し書き直す羽目になったという・・・orz

・モモ「ほむほむ」

いや、モモってバカじゃないですか（褒め言葉

ディには『テンドン』、海東大樹には『ダイオキシ』と言うくらいですから、

もうこいつに『ほむほむ』と言わせないで誰に言わせる!？

まあ、やっていいものと小一時間悩みましたが、もうやっちゃったって事で。

・アントホッパライマジン

ガンフォームを圧倒した二人で一人のイマジン。

緑と黒ですが「さあ、お前の罪を数えろ!」のライダーとは違いますw

原作電王では、武器が違うだけで見た目は完全同じだったんですが、今作は色と見た目をそれぞれのモチーフに変更してます。

電王ソードとほむらが共闘するって事で、敵も2人にしようと思っ
ての起用です。

・頭部分のモモ『ぷりゅん』

分かる人には分かる、某ギター少女の家でのシーンから拝借。
だが私はあやまうわなにをするやめry

では、感想お待ちしております。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』

4

街の廃ビルに生まれた結界。

既に内部には、使い魔を銃撃で蹴散らす黄色の魔法少女　　巴マ
ミの姿があつた。

その後方には、キュウベえを抱えたまどか。

隣には、護身用にも持ってきたのだろうか、マミによつて魔力を
注がれてカラフルな色となつた金属バットを握りしめるさやかの姿
もある。

マミは両手のマスケツト銃を投げ捨て、後方に跳躍しながら別のマ
スケツト銃を扇状に並べて召喚。

手をかざすと共に、広がつたマスケツト銃の引き金が同時に引かれ、
迫つていた使い魔達を一気に殲滅。

軽く息を吐きながら銃を消し、後ろにいた二人に笑顔を見せる。

「大丈夫だった、二人とも?」

「は、はい!」

「マミさん・・・すっげえ! かつこい!」

「ふふ、褒めても何も出ないわよ」

「行きましょう」と先陣を切るマミを先頭に2人も歩き出す。
さやかがまどかを守るように周囲を警戒する中、時折後ろを振り返

るまどかに気付き声をかけた。

「まどかぁ。さっきからどうしたのよ？」

「う、うん。さっきから、何かに見られてる気が・・・」

「何かって、こんな結界の中で？」

それはないっしょ。この場所に普通の人は入れないってマミさん言ってたじゃん」

「そう、だよね・・・」

さやかの答えに頷き、気のせいだと割り切って前を向く。

気付くとマミとキュウベえが少し先で待っており、2人は少し早足で歩きだした。

（危ない危ない。でも、こんなストーカーみたいな真似、僕の主義に反するんだけどなぁ）

その後を少し離れた位置から追う、光の球体に気付かないままで。

一方、離れた雑居ビルの屋上。

良太郎に憑依したモモタロスが電王ソードフォームに変身し、デンガツシャーをソードモードに組み替える。

先日のライナーフォームとは違う姿にほむらが戸惑う中、デンガツシャーに生まれた赤い刃を左手で叩きながら、眼前のアントホッパ―イマジン達を睨みつける。

「さあて！さつさと片付けさせてもらうぜ、黒野郎に緑野郎おつ！
」

デンガツシャーソードモードを構え、敵対するイマジンに突撃し、真正面からデンガツシャーを振り下ろす。

剣術も戦術も何もない、ただただ力任せの一撃。

だが、何も問題はない。

己の力を信じ、己の剣を信じ、下手な小細工など使わずに、真正面から敵を叩き切る。

その姿を意味する『ソードフォーム』の名の通り、剣による近接戦闘のみで全てを決める。

それこそが、モモタロスの戦闘スタイルであった。

アントイマジンがスコップ状の剣を手にとってモモタロスの一撃を受け止め、後ろから飛び上がったホッパ―イマジンが跳躍からヴィオラ型の剣を叩き付ける。

が、モモタロスは鎧迫り合いからアントイマジンに蹴りを叩き込み、離れた一瞬で上段への切り上げに太刀筋を変化。

ホッパ―イマジンの一撃を受け止め、逆にその状態で押し返した。

「てめえらとは前に戦った事があるからなあ！動きが見え見えなんだよ！！」

『ぐつ、電おおお・・・！！』

『ヒヤ、ハハハ！殺す殺す殺すうううつ！！』

狂った笑い声を上げるホッパイメージンが再び飛びかかる。だが、後方にいたほむらがホッパイメージンに向けて2丁拳銃を撃ちこみ、動きを一瞬だけ止める事に成功。

その隙はモモタロスが一撃を与えるには十分であり、即座に懐に入り込んで連続で切り裂いた。

距離が開いた事で若干の余裕が生まれ、ほむらに振り返る。

「へっ、礼は言わねえぞ」

「言われたくもないわね。それより、それ・・・野上良太郎の体でしょ？どついうこと？」

「まっ、後で良太郎から説明してもらうんだな。今はこいつら潰す方が先だろ？」

「・・・そうね」

会話を終えると共に、眼前のアントホッパイメージンが同時に立ち

上がる。

ほむらもモモタロスの隣に立ち、二丁拳銃のマガジンを交換。

「足止めは任せなさい。前衛は任せていいのよね」

「当たり前だろうが！行くぜ行くぜ行くぜえ！！」

敵に合わせ、前に飛び出して戦いを再開するモモタロス。

イマジン達はモモタロスを先に倒そうとしているのか、2体同時に左右から襲い掛かる。

迫る攻撃を剣で防ぎ、ある時は素早く距離を取って逆に斬り付け、モモタロスは随時優勢であった。

このアントホッパーイマジン達、かつて良太郎達の前に現れた固体はかなりの強さを誇り、一度は電王に完勝した事がある。

しかし、良太郎もモモタロスも、あれからかなりの力をつけてきた。故に以前苦戦した相手でも、今の彼らにとってはかなり優勢な相手となっていた。

更に、有利な理由がもう1つある。

「そこっ！」

着地した2体に合わせ、両手の拳銃のマガジンに込められた全ての弾丸を一気に撃ち込む。

それは倒す事こそ叶わないが、相手の動きを一時的に止めるには十

分すぎる連射。

射撃が止んだ隙に、モモタロスが2体まとめて一気に切り裂く。

これがもう1つの理由。ほむらの存在だ。

モモタロスの行動を全く邪魔せずに放たれる攻撃は、ダメージこそほとんど無いが、アントホッパリーマシン達の動きをかなり押さえ込んでいた。

とは言うものの、モモタロスは基本的に好き勝手に動いている。

初めて共闘する相手の動きを即座に察知し、的確に援護を行うほむらの技量が驚異的なのだ。

とても初めての連携とは思えないモモタロスとほむらのコンビネーションに、防戦一方のアントホッパリーマシン達。

何度目かの攻撃で吹き飛ばされ、モモタロスが剣を左手に持ち替える。

「そんじゃ、そろそろ決めるぜ！」

（待つてモモタロス！様子がおかしい！）

ライダーパスを抜こうとしたモモタロスの中から、本来の人格である良太郎の意識が声をかける。

それに合わせるかのように、モモタロスとほむらの見ている前で、2体のイマジン突如痙攣を始めた。

『でん・・・おおお』

』

『ヒヤ、ハ・・・コロスコロスコロ、ス・・・コ、ロ』

声が掻き消えていき、その姿が徐々に変貌していく。

頭部からは蝶のような羽が片方だけ生え、腕や脚の一部が毛玉のような形となり、持っていたそれぞれの剣が異様な茨に包まれた。元の姿を多少は残しながらも、全く別の存在へと変貌していく。

「なんだありゃあ!？」

(あれって・・・!)

「まさか・・・!？」

モモタロスとほむらの声が重なり、イマジン達の変貌が完了した。口が回っていたホッパ―イマジンの方も一切言葉を話さず、2体ともただ唸り声のような奇怪な声をあげている。

直後、変化した剣を一気に振り下ろし、剣先から伸びた茨が2人に襲い掛かる。

「くっ!」

「ぬおっ!？」

ほむらはギリギリでかわすが、モモタロスは直撃ではないが一撃を

受けた。

イマジン達はその隙に一気に詰め寄ると、先ほどのようにモモタロスに集中するのではなく、連携を阻止しようとしているのか、それぞれが別個にモモタロスとほむらに襲い掛かった。

先ほどよりも更に機械的かつ、力が増した攻撃を繰り返す。

「なんだこの野郎！？いきなり強くなりやがって！？」

（モモタロス！ほむらちゃんが！）

「わぁってるよ！だが、こいつ！？」

離れたほむらの援護に向かおうとするが、言葉を話さないアントイマジンがその行く手を阻む。

一方、ホッパリーイマジンと近距離で戦うほむら。

剣による攻撃を銃身を交差して挟み込むが、力が段違いなのか徐々に押されていた。

「こい、つ・・・！」

「この、ときやがれえっ！！」

モモタロスがアントイマジンの腹に蹴りを叩き込んで反転。

すかさず走り出すとホッパリーイマジンの背中に切り付け、膝をついていたほむらの前に立ってデンガッシャーを構えながら後ろを見る。

「大丈夫かよ」

「ええ、でもやっかいね」

ダメージを受けながらも、未だに唸り声をあげ続けるアントホツパ
ーイマジン達を見る。

先ほどのように分断されては、決定打を持たないほむらの援護に気が回ってしまい、再び同じ事の繰り返しになる恐れがあった。

どうすべきかと、僅かな時間で悩んだその時。

『ほむらちゃん、聞こえる?』

「野上、良太郎?」

「あん?おい良太郎、いきなり声出すんじゃないよ」

モモタロスの中にいる良太郎の声が、外にいるほむらにも聞こえた。

『ちょっと考えた事があるんだけど、手伝ってもらえないかな?』

「・・・何かしら」

ほむらがその話に乗り、良太郎が自分が考えた作戦を説明する。

やがて会話が終わったタイミングで、アントホッパーイマジン達が再び動き出す。

モモタロスとほむらも、それぞれに武器を構えた。

「ほむほむ、行けるのか？」

「さっきの言葉返すわ。私を誰だと思っているの？」

「へっ、そんじゃ・・・行くぜ行くぜ行くぜえっ！」

2人も同時に駆け出し、先ほどと同じようにそれぞれがイマジンに相対する。

先ほどと違う部分といえば、ほむらが攻撃を積極的に仕掛けず、距離を取っている事だろうか。

攻撃を避け、ある時はわざと左手の盾で受け止め、少しずつ気付かれないようにモモタロスと距離を取っていく。

やがて屋上の両端ほどの距離が開けた時、良太郎が叫んだ。

『モモタロス！』

「わあってるよ！」

刹那、アントイマジンに拳を叩き込んで距離を取ると、デンガッシ

ヤーをほむらに向けて投げつけた。

『パーツを組み替え、銃を思わせる構成にした状態で』。

「っ！」

ほむらも即座に拳銃をホッパライマジンに投げつけて跳躍。

空中で『デンガッシャー・ガンモード』を手に取ると、着地と同時に両手で構え、狙いをつけて引き金を引く。

放たれたフリーエネルギーによる銃弾は、ホッパライマジンの全身を連続で撃ち抜き、決定的にダメージを与えた。

これが良太郎が考えた作戦。

ほむらがイマジンに対して決定打を持っていないなら、決定打となりえる武器を使えばよいという単純な発想。

故に、アントホッパライマジン達がすぐに互いの援護に回れないようにわざと距離を開け、タイミングを見計らってモモタロスが武器を投げ渡す。

それも、ほむらが使いやすいガンモードにした状態で。

作戦は成功し、ホッパライマジンが膝をついた。

ほむらが後ろを見ないままデングッシャーを投げ、既に駆け出していたモモタロスがそれをキャッチし、走りながらソードモードに変化させ、今度こそライダーパスをタッチ。

【FULL CHARGE】

「必殺！俺の必殺技、パート1！！」

パスを空に投げ捨て、刀身部分が赤いエネルギーに包まれたデンガッシャーを構える。

先日良太郎が使用した時とは違い、デンガッシャーに剣部分がついたままの状態でホッパーイマジンに連続で切り付け、最後の一撃と共に振り返ると天に向けて右手をかざした。

そこにちょうど落ちてきたのは、先ほど空に向けて投げたライダーパス。

それを掴み取り、更にベルトにタッチ。

「んでもってえ！！」

【FULL CHARGE】

パスを投げ捨てると共にソードの先端が分離し、モモタロスの意思に従って刀身部分がアントイマジンを連続で切り裂き、最後に天に向けてデンガッシャーを翳した。

空に固定されたソードがモモタロスの視線の先にいるアントイマジンを標的を定め、デンガッシャーを振り下ろすと同時にまっすぐ急降下。

「パーツ3つ！！」

落下した必殺の刃が、アントイマジンを真正面から真っ二つに切り

裂く。

必殺のエクストリームスラッシュを受け、アントホッパーイマジン達は悲鳴を上げずに同時に爆発し、消えていった。

剣先がデングァシャーに戻ったタイミングでモモタロスがデンオウベルトを外し、変身を解く。

同時にモモタロスが良太郎から離れ、実体化して屋上に降り立った。

「しっかし聞いてはいたが、少しは骨があるイマジンだったな」

「うん。今のイマジンは前に戦った時も強かったけど、姿が変わってから更に強くなったね」

「だな。まっ、俺たちにとっちゃ楽なもんだったけどな」

「よく口が回るイマジンね」

立ち上がったほむらが近づいてくる。

その表情は戦いの前と同じように、良太郎に対する疑惑の目だった。いや、良太郎にというより、彼から出てきたモモタロスに対して、というべきか。

「中断されたけど、あなたは一体何者なの？」

それに、あなた・・・モモタロス、だったかしら？イマジンのあなたが、何故彼と一緒にいるの？」

「質問、増えてない？」

「いいじゃねえか良太郎。言っちゃってもよ」

その質問に答えを返したのは、モモタロスだった。

「怪物にしては、随分と良識的なのね」

「さつきてめえと良太郎が話してた時と一緒にだ。フェアじゃねえのは嫌いなんだよ。」

俺達だけがお前の事を知ってるのに、こっちの事を話さねえってのは卑怯だろうが」

モモタロスの言葉に少し沈黙した後、良太郎はほむらをまっすぐ見て口を開く。

「・・・多分、君の考えてる通りだよ。僕達は、こことは違う別の時間から来たんだ」

語りだしたのは、自分達がこの時間へ来てしまったという事実から。

そして、ほむらは知る。

自分以外に、時間に干渉する存在を。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 4 (後書き)

ども、ウェイカップです!

投稿の設定をしながらTBSのランク王国を見ていたら、DVDランキングでまどマギ2巻が1位でした。

紹介映像が、マミさんがマミってるシーンでした・・・(涙
なんでそこなのお!?やあめえてえっ!!

・ほむらの戦闘技術

まどマギ本編ではほとんど1人で戦っていたので、あまり思われて
ないかもしれないですが、今作におけるほむらは、繰り返し過去の
の中で他の魔法少女達と共闘した経験が多くあります。

共闘する相手がいた場合、銃撃によるサポートがメインになります。
モモタロスの戦闘スタイルとさやかの戦闘スタイルが同じ剣戟の近
接戦闘つても理由ですね。

いや、さやかも考え無しで突っ込んでそうじゃないですかw

・俺の必殺技あつ!!

You Tubeで俺の必殺技集などを見て確認したんですが・・・
パート2、パート3、パート5、同じじゃないかな・・・?(by

良太郎

作者的にはパート1がお気に入り。

ハッハア!決まったぜえっ!!

さて次回は、今回の戦いの裏で行われていたまどかサイドの話です。
もちろん電王側からも出番があります。

では、感想お待ちしております。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 5

「なるほど、ね・・・」

ビルの屋上、良太郎とモモタロスから話を聞き終えたほむらが、納得した様子で頷く。

良太郎が、こことは違う別の時間の人間だという事。

イマジンとは、未来の人類の精神体であるという事。

そのイマジンと戦う、電王と呼ばれる姿の事。

モモタロスと他の仲間達はイマジンではあるが、良太郎と共に時間を守るために戦っている事。

時間を越える電車、未来からの侵略者、侵略者と戦う仮面の戦士。

漫画かアニメ、もしくは妄想の一言で片付けられるようなキーワー

ドの羅列だが、ほむらは意外にもあっさり話を受け入れた。

「私も魔法少女なんて、人から見ればアニメみたいな存在よ」と返し、腕を組んで口を開く。

「それであなたは、その時の空間の中で『時間の逆転』に巻き込まれて、この時間にたどり着いたって事でいいのかしら」

「うん。そういえば、あれの原因も分かってないんだよね」

「だな。オッサンとハナクソ女が言ってたが、実際に時間の中に入って調べるまでハッキリしないんだとよ」

オーナーとハナがしていた会話を思い出し、モモタロスが告げる。
一方、ほむらは顎に手をこつこつぶつけながら、何かを呟いていた。

「時間・・・繰り返し・・・まさか、私の・・・でも、なんで今回に限って・・・？」

「ほむらちゃん？」

「っ、なんでもないわ・・・」

その時、ほむらが何かを思い出したかのように振り向く。
視線の先には、未だにどす黒い結界で覆われている廃ビル。

「しまった、イメージに気を取られてて・・・！」

「どうしたの？」

「・・・あの結界内に、バマミや鹿目まどか達がいるのよ」

「えっ・・・！？」

「行くわ。続きは、また近いうちに」

走り出そうとしたほむらの手を良太郎が掴み、動きを止める。

「っ！？何するのよ？」

突然の邪魔に声を荒げるほむら。

一方良太郎は、落ち着いた様子で言葉を続ける。

「あの中にいる魔女って、マミちゃんだけじゃ辛い・・・かな？」

「・・・多少苦戦はするでしょうけど負ける事はないわ。それが何？」

「だったら、ほむらちゃんが行かなくても大丈夫」

良太郎が、確信に満ちた言葉を言った。

「もう、手助けなら行ってるからさ」

場所は変わり、結界の最深部。

周囲を薔薇のような形状の何かに覆われた空間内で、舞い踊るのは一人の魔法少女。

マスケット銃を構えるマミの視線の先には、景色と同じ薔薇を全身

に咲かせ、先日の使い魔のような茨と毛玉を従えた巨体の姿。

この巨大なる異形こそ、使い魔を生み出す大元の存在。

絶望を振り撒き、人々を襲う異形の存在 『魔女』。

正式名称は『薔薇園の魔女 ゲルトルート』。

『不信』を自らの性質とし、あらゆる者に不信感を募らせる拒絶の魔女だ。

マミと相対するゲルトルートは、背中に生やしたアゲハチョウを思わせる羽根を羽ばたかせて空中に止まっている。

同時に周囲の使い魔達が一斉にマミへと襲い掛かるが、マミは次々とマスケット銃を撃ち続けて、近づく使い魔達を一掃していく。

「キリがないわね・・・！」

その口調に僅かの焦りが浮かんだ。

倒すそばからゲルトルートが体を震わせ、自らの中から新たな使い魔を生み出しているのだ。

マミが倒す速度とゲルトルートが生み出す速度はほぼ同じ、つまり敵の数が減る事はない。

しかしマミには、これを打開する1つの技がある。

その策を行うため、自らの首元のリボンに手をかけた、その時。

「きゃあああ！」

「ま、マミさん!!」

突然聞こえた声に振り返ると、声のした場所はマミのいる位置から高い場所。

この結界の最深部へと続くドアほどの大きさの入り口から、背後から現れた使い魔達に押し出される形で、キュウベえを抱えたままのまどかとさやかが落ちてきたのだ。

「くっ！」

ゲルトルートへの攻撃を中断し、後方への跳躍と同時にリボンを解き放つ。

宙に浮いたりリボンは一瞬でその長さを延長させ、絡まりあつて台座のような形となった。

マミの違つもう一つの魔法、リボンを自由自在に操るその力で組まれた台座にまどか達が落下し、衝撃を最大限に殺して無事に着地させる。

「大丈夫!？」

「は、はい。なんとか・・・」

「し、死ぬかと思つた・・・」

まどか達からの返事に安堵する。

しかし、その隙を見逃すほど、魔女という存在は生易しいものではない。

周囲の使い魔達が体を融合させて茨となり、マミの体を縛り上げた。

「あ、ぐっ!？」

自らを縛る茨によって宙に持ち上げられ、マミは壁へと叩きつけられた。

「マミさぁん！」

まどかが悲鳴に似た声をあげるが、彼女達にも脅威は迫っていた。使い魔の多くはマミの動きを封じるために茨となったが、本体であるゲルトルートはもちろん動ける。

まどか達の眼前に降り立ったゲルトルート。その顔の部分にあたる異形が2人を見下ろす。

さやかがまどかを守るようにバットを構えるが、その足は完全に震えており、まともに動く事も出来ない。

その現実には、祈るように組み合わせた両手に力を込める。

その足元にいたキュウベえが、赤い眼でまどかを見ていた。

「まどか、力が欲しいかい？」

「キュウ、べえ？」

「だったら僕と契約して魔法少女になればいい。そうすればマミとさやかも助けられるし、これからマミと一緒に戦う事も出来る」

キュウベえが自身との契約を促し、まどかがマミとさやかを交互に見る。

体の自由を奪われながらも必死に動くマミ、目の前で自分を守ろうと、目尻に涙を浮かべながらもバットを構えるさやか。
このままでは、自分も含めて全員が・・・

「わたしは・・・」

「っ！鹿目さん、後ろお！！」

「えっ・・・」

気付くと、縛られながらもマミが自分に向けて叫んでいた。
言われるままに後ろを向けば、いつのまに至近距離に近づいていたのか、使い魔たる毛玉が目の前に。

その毛玉に亀裂が走り、口らしき物体が現れてまどかを覆いつくし

「女の子に手を上げるなんて、しつけがなってないね」

使い魔の奥から声が聞こえた。

同時に、使い魔の体を貫いたのは青い六角形の刃。

使い魔の体がそのままはじけ飛び、ちょうど影に隠れる形だった刃の持ち主が姿を見せる。

青い体色と、人ではないその姿 ウラタロスの容姿に、まどか達は言葉を失った。

「やあ。初めまして、お嬢さん達」

「・・・ひやうううつ!？」

「しゃ、しゃべったあ!？」

明らかに人ではない存在に、忘れていたように悲鳴を上げる。

同じように呆然としていたさやかが我を取り戻し、即座にウラタロスの前に立つと、まどかを自分の背中に隠してバットを構える。

ただし、構える手も踏みしめる足もさつきよりめちやくちや震えていた。

「だ、誰だよお前! 使い魔か! ? 魔女か! ? あ、あ・・・あたしが、相手になって、やるぞおっ!」

「予想通りの反応とは言え、さすがに傷つくねえ」

「あ、あなた・・・誰、ですか?」

ウラタロスが発する自分達と同じ言葉に、まどかは僅かに警戒心を緩める。

それに合わせるように、ウラタロスはわざとらしく会釈した。

「まっ、通りすがりのボディガードって所かな。

女の子には名乗ってあげたいけど、こっちにも事情があってね」

「ぼでい、がーど？」

「いやいやいや！こんな結界の中で、都合よくボディガードなんて来る訳ないじゃないのよ！

はっ！あんたまさか、こんな人が来ない場所で私たちの体をいじくり回して、あんな事やこんな事を・・・っ！！」

「やれやれ。僕のこと、そんな風に見られるのは」

「ちょっと待って、2人とも」

その時、足元から3人を見上げていたキュウベえが口を開く。

ウラタロスも初めてその姿を直接確認し、良太郎から聞いていた特徴と照らし合わせる。

（こいつがキュウベえ・・・聞いた通り、見た目は不思議生物だけど・・・）

同時に、とてつもない不快感がウラタロスの思考を覆う。

この小さい生物から発せられる、感じたことのない不快感のためだ。

（なるほど、確かに只者じゃ無さそうだね）

「その彼について考えるより、今はこの場を切り抜ける方が先じゃないかな」

「えっ？」

キユウベえの言葉に気付いて後ろを振り向くと、ゲルトルートが再び羽根を広げていた。

さやかが咄嗟に震える手でバットを構えるが、その上空から放たれる無数の銃弾によりゲルトルートの体が爆発。

攻撃の主であるマミが茨より解放され、3人の前に着地。

「マミさん！」

「ごめんなさい、心配かけちゃったわね」

僅かに付着した茨を取りながら笑顔で答え、ベレー帽についていたソウルジェムをウラタロスに向ける。

魔女や使い魔の反応を察知すると光るその宝玉は、ウラタロスに対しては何の反応も示さなかった。

「反応無し・・・あなた、魔女や使い魔じゃないのね？」

「僕をあんな下品な怪物と一緒にしてもらっちゃ困るなあ。
まっ、君たちから見れば化け物って言うのは分かってるけどね」

自らが異端だという事を認めつつ、ウラタロスは苦笑しながら答えた。

そのまま、再び羽根を広げ始めたゲルトルートに視線を向ける。

「今は詳しく話す時間はないけど、君達が考えている通り僕は人間じゃない。

それでも、僕は君達を守ってあげたいと思っている」

彼の癖である、右手の指をこすり合わせる動作を重ね、まっすぐ3人を見つめた。

「僕を、信じてくれるかい？」

その言葉は本心からの物。

良太郎に頼まれてまどか達を隠れて追っていたのは事実だが、彼自身がこの少女達を守りたいと思っていた。

その言葉に込められた想いを受け止め、マミがその隣でマスケット銃を構える。

「あいつの動き、一緒に止めてもらえるかしら？」

「仰せのままに、お嬢様」

それを合図にするかのように、ゲルトルートの腕と思われる部分から茨状の触手が飛来した。

ウラタロスがまどかを、マミがさやかを抱えて飛びのき、1秒前まで彼らがいた場所に触手が叩きつけられる。

着地と同時に2人を降ろし、マミは上空へと跳躍、ウラタロスは自身の武器である両端に六角形状の刃がついた棒『ウラタロッド』を持ち直すと、まっすぐゲルトルートに突撃。

茨の横に滑り込むと、ウラタロッドで茨を一気に切り裂いた。

分断された触手の先端は霞となって消えていき、痛みで体を仰け反らせたゲルトルートにマミのマスキット銃が連続で着弾、盛大な爆発を引き起こす。

「あなた、やるじゃない！」

「そりゃあ、鍛えてますから！」

着地したマミの笑顔に答えながら、迫ってきた使い魔達をロッドでなぎ払う。

遠くの使い魔にはマミの銃撃が。銃撃を掻い潜って近づいてくる使い魔にはウラタロスの斬撃と蹴撃が。

とても初めてとは思えないコンビネーションで、全ての使い魔は消滅した。

「それじゃ、そろそろ釣り上げますか！」

「ファイナーレよ！」

ウラタロッドを持ち直すと、羽ばたこうとしたゲルトルートに一直線に投擲。

まっすぐゲルトルートに体へ突き刺さると、まるで結晶のような力がゲルトルートに捕縛した。

同時にマミも手をかざし、魔力で作られた黄色い糸が、更にゲルトルートに全身を縛り上げる。

ウラタロスとマミ。二人の力が合わさり、ゲルトルートは一切の動きを封じられた。

マミは解いたりボンを新体操のように操り、リボンが徐々に形を変えていく。

やがてマミの傍らに現れたのは、人のサイズを雄に超える巨大な一丁のマスケット銃。

ウラタロスは「ちょっと借りるね」と断りを入れた上で、巨大マスケット銃を足場に上空へ跳躍。

回転の後に右足を突き出し、そこに込められたのは自身のエネルギーを集中させた青い光。

マミは巨大マスケット銃を構え、銃口をゲルトルートに突きつける。2人は勝利を確信し、笑みを浮かべて同時に叫んだ。

「お前、僕に釣られてみる!？」

「ティロ・ファイナーレツ!!」

マミの持つ最大攻撃魔法『ティロ・ファイナーレ』が黄色い閃光となつてゲルトルートの腹部を貫き、ウラタロスが青い流星となつてゲルトルートの頭部らしき場所に直撃。

ゲルトルートが耐えたのは、僅かに一瞬。

次の瞬間、ゲルトルートは悲鳴をあげる事すら許さずにその全身が爆発を引き起こした。

ウラタロスが着地したと同時に、結界の源でもあったゲルトルートが倒れた事で周囲の結界が元の景色へと戻っていく。

マスケツト銃を消し去ったマミは変身を解除し、先ほどまでゲルトルートがいた場所まで歩いていくと、その場に落ちていた黒い結晶を迷わずに拾い上げた。

キュウベえを抱えたまどか、バットを持ったさやかが手を振って駆けつける。

「マミさん!」

「鹿目さん、美樹さんも。ごめんね、怖い思いをさせちゃって・・・」

「そ、そんな! あやまらないでくださいよ! 私たちだって、危険な事についていくつて覚悟してここまでついてきたんですから!」

「2人とも・・・ありがとう・・・」

「うん。やっぱり、女の子は笑顔が一番似あうよねえ」

少女3人が笑いあう中、横から話しかけたのはウラタロス。
3人は若干警戒したままだが、それを予想していたのか、態度を崩さないまま振り返ると、背中を向けたまま歩き出した。

「あ、あの！」

そこに声をかけたのは、キュウベえを抱えたままのまどか。
瞳には戸惑いの色が見えるが、それでもウラタロスへと声をかける。

「その・・・助けてくれて、あり・・・がとう・・・」

「どういたしまして」

「・・・あなた、名前は？」

マミの問いかけに対し、少しだけ悩むような素振りを見せる。

「さっきも言ったけど、訳あって名乗れないんだ。ごめんね」

「な、何よそれ！？名前ぐらい言いなさいよ！ってか、結局あんた何者な訳！？」

「君たちが魔女と関わりを持ち続けるなら、また会う事になるかもしれないから、その時に教えてあげるよ」

その言葉を最後に、ウラタロスは背を向けて歩き出した。
すると何かを思い出したかのように、まどか達に声をかけた。

「まどかちゃん、さやかちゃん、これはちょっとしたおせっかいだから、聞き流してもらっても構わないんだけど」

「な、何ですか？」

「願いつて言うのは、自分で叶えてこそ意味があるものだと思
うな。」

それをどう受け取るかは、君達次第。覚えておいてね」

それだけを告げ、今度こそウラタロスは廃ビルを去っていった。
ウラタロスの姿が完全に見えなくなった時、キュウベえが首を傾げる。

「彼、なんでまどかとさやかの名前を知っていたのかな？」

「・・・あつ」

その問いに答えを返せる者は誰もいなかった。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 5（後書き）

ども、ウェイカップです！

今回は前回の良太郎・モモ・ほむらサイドとは別の視点。

その時に結界内にいたまどか達と、それにこっそりついてきたウラタロス側の話でした。

ウラタロスが誰かに憑依すると考えてらした皆様、申し訳ございません（土下座

もちろん今後、イマジンの誰かがまどまぎサイドの人物に憑依する展開もございますので、その時までしばしお待ちをw

・結界内inデンライナー組イマジン

良太郎がライナーフォームに変身した時にはイマジン達と繋がりが一時的に切れてましたが、今回なぜウラタロスが結界内に入れたのか？

これにはきちんと理由があります。

後の話で説明しますが、これには何かしらの理由があると考えてください。

・ウラタロスキック

何気に好きなこの技。

テレビ版で初披露した際は、スライディングからイマジンの股間？を蹴り飛ばすというなんとも笑える技でしたが、実際はこんなにかっこいいんだ！・・・多分！

次回で第3話ラストとなります。この後の良太郎達サイドに戻りま

です。
では、感想お待ちしております。

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』

6

「それじゃ、まどかちゃん達は無事なんだね」

『心配ないよ。結界も消えたし、僕とマミちゃんで魔女も倒したしね』

良太郎が言葉を交わすのは、ケータロスの向こうにいる存在。

電話の相手は、結界内でまどか達を守り、戦いを終えて少し離れた場所に移動したウラタロスだ。

話しながらも良太郎から見える視線の先には、先ほどまで見えていた結界は跡形もなく消滅している。

『しかし、ついていって正解だったよ。あのままじゃまどかちゃん、頭からパクリ!だったかもしれないしね。良太郎の勘が当たったって所かな』

ウラタロスがまどか達のピンチに都合よく駆け付けられた理由。

それは、良太郎に起因していた。

見滝原中学の前ではむらと出会った時に良太郎がケータロスで連絡を取ったのは、デンライナーの修理をしていた・・・否、リュウタロスが勝手に始めた落書きにナオミやハナの視線が向かった隙に、デンライナーの外へ出たウラタロスだった。

本人的には少々の骨休めのつもりだったのだが、そのタイミングで良太郎から連絡が入り、その内容と言うのが、

ほむらちゃんと話をする事になったから、まどかちゃん達についててあげてもらえる？

という願いだった。

元よりまどか達を間近で確認しておきたかったウラタロスにとって、この頼みを断る理由などない。

仮に相手が女性でなかったとしても、良太郎の願いなら受け入れてただろう。

その後、球体状態でこっそりまどか達についていったウラタロスは、マミが結界に空けた穴より自身も結界に入り、まどか達のピンチを救ったという訳である。

ちなみに、デンライナーから抜け出した事に気付いたハナが『あのバカウラ〜!!』と憤慨していたのは、この場の誰も知らない秘密である。

『それじゃ、僕はデンライナーに戻ってるよ。詳しい話は、良太郎と先輩が戻ってきてからって事で』

「うん、後でね」

『ハナさん辺りが怒ってるかもしれないけどねえ・・・戻りたくないなあ』と最後に聞こえながらも連絡を終え、ケータロス閉じて振り返る。

風が吹きぬけるビルの屋上に響くのは、先ほどとは違う新たな争いの声。

「てめえ・・・何度言えば分かるんだ、あぁん？」

「そっちこそ、いい加減にしてもらえないかしら」

相対するのは、未だに魔法少女モードな暁美ほむら。

そして、赤い体色の鬼ことモモタロス。

モモタロスの眼光が鋭く光り、ほむらの持つ銃身が鈍い光を反射する。

まさに『一触即発』という言葉が当てはまるように、2人の間には見えない火花がバチバチとぶつかり合っていた。

ただし、かゝなり低いレベルの争いというのを追記しておこう。

「だからよお、ほむほむでいいだろうが！呼び方ぐらい俺の勝手だろ！」

「何度言えば分かるのかしら、私の名前はほむらよ。分かるかしら？ほ・む・ら・よ。」

そのほむほむと言う呼び方やめなさい。ハッキリ言って不愉快だから」

「つつせえよほむほむ！俺が決めたんだから、ほむほむでいいんだよ！なあ、ほおむうほおつて痛えええ！！」

「本当にイマジンに銃は効かないのね。どれぐらいの衝撃なら倒せるのか、試してみたくなったわ」

「待てコラアア！！てめえ今、迷わずに撃つただろ！？効かねえつつつてもすっげえ痛えんだぞこれ！！」

「これでダメなら・・・そうね、調達したばかりのアレなんかも試してみようかしら」

「無視かよっ！！」

「あ、あのほむらちゃん。そんな事したら、他の人に気付かれちゃうよ・・・？」

良太郎の制止を受け、小さい舌打ちの後、取り出しかけた巨大な筒状の何かを盾に収納。

直後、ほむらの衣服が一瞬輝いたと思うと、その衣服は見滝原中学の制服へと変化。

それを合図にして良太郎が口を開いた。

「大丈夫、まどかちゃん達は無事だつて」

「そうね。結界が消えたのは事実だし。あなたの仲間が行ってたというのも本当みたいね」

「けっ、カメ野郎においしい所譲りやがってよお」

モモタロスが面白くなさそうにそつぽを向く。

『カッコよく戦う事』を信条としている彼にとって、魔女という未知の敵と戦ってみたかったという願望があったのか、ウラタロスに先を越された事が面白くなかった。

そんなモモタロスに苦笑すると、良太郎はほむらに改めて向き直る。

「ほむらちゃん、話があるんだ」

「奇遇ね。私もあなたに確認したい事があるわ」

話を聞いてもらえると判断し、良太郎が続ける。

「さっきのイマジン、前の結界に現れたイマジンと一緒に、前に僕達が戦った事があるイマジンなんだ」

「でしょうね。そのモモイマジンが『前に戦った事がある』と言ったものね」

「おい待て！俺はモモタロスだっつつてんだろぅが！！」

「人の名前をまともに言えない相手の名前を呼ぶ義理なんてないわ」

先ほどのお返しとばかりに即答。

モモタロスはそれにへそを曲げたのか、屋上入り口の給水塔に飛び上がると座り込んだ。

それに苦笑しつつも、良太郎はほむらとの話を続ける。

「でも前に戦った時は、今日みたいに姿を変化させるような事は無かったんだ。それに、あの姿・・・」

「言わなくても分かるわ」

良太郎の言葉を予測していたのか、ほむらの眼光が鋭く光る。

「あの姿は、結界であなた達を襲った使い魔と似ていた。そう言いたいのでしょうか？」

「・・・うん」

アントホッパーイマジン達に現れた変化。

茨状の剣、全身に生まれた毛玉、言葉を話さなくなった状態。

それら全てが、良太郎とほむらの中に、ある一点の疑念を抱かせた。

この時間に現れたイマジン達は、魔女と何かしらの関係を持っている。

それが、2人のたどり着いた結論だ。

「確認するけど、あなた達が過去に戦ったというイマジン達は、全員あんな変化はしなかったの？」

「うん・・・あつ、大きくなったのは何人かいたかな」

「大、きく・・・？」

「あつ、ちゃんと倒してるよ。こっちにも対抗できるのがあるし」

過去に戦ってきたイマジン達の様子を思い出して告げる。

一方ほむらは、良太郎の言葉から、頭の中でその状況を思い浮かべてみた。

倒されたイマジン達が、何らかの力で巨大化した！

ビルを破壊し、人々が嘆き、街が悲しみに包まれる！

そこに颯爽と現れるのは、変身した良太郎とモモタロス達仲間のイマジンだった！

『くそっ！また巨大化しやがったなあ！良太郎っ！！』

『うん！モモタロス、みんな、行くよっ！』

『応っ！！』

彼らの持つ大いなる力が天を切り裂き、そこに生まれるのは時を越える巨大な機械の神！

巨大化したイマジンから世界を守る、電王にのみ与えられた力！

その名は！その名は！その名はあつ

！！

「らちゃん、ほむらちゃん？」

「ッ！」

目の前で良太郎が手をブンブンしているのにようやく気づき、わざとらしく咳払い。

これまたわざとらしく黒髪を手でなびかせ、元のクールなほむらへと戻る。

（前にあの子から借りてた、何とか戦隊のDVDの影響かしら・・・
まあ、意外と面白かったし・・・）

「えと、大丈夫・・・？」

「ええ、何でもないわ。とにかく、あなた達が戦ってきたイマジンは、あんな変化は起こさなかったって事ね」

「う、うん」

ほむらの様子に若干首を傾げつつ、良太郎は自身の考えをまとめた。

「可能性だけど、まずはイマジンが魔女と何らかの形で契約してる

って言うのが一番高いかな」

「ありえる話ね。だけど、魔女に人のような意思はないわ。あいつらは、ただ絶望を撒き散らす存在。

あなたから聞いた、イマジンが人間の願いを叶えるという契約。魔女には、イマジンにその願いを伝える方法はないはずよ」

「仮に伝えられたとしても、その願いは何か……って事になるよね」

「まあ、あなた……というか、電王が関係してるって言うのが一番有力ね。電王電王うるさかったし」

モールイマジン、そしてアントホッピーイマジン達。

この時間で現れた3体のイマジンの口から発せられていたのは、『電王』という単語が最も多かった。

倒してしまった今の時点で調べる方法はないが、イマジン達がこの時間に現れている理由に電王という存在が関係しているのは間違いないだろう。

とりあえず、今分かる事はこれぐらいか。

ほむらもそれを考えていたのか、イマジンに関する話題を断ち切った。

それを合図にするかのように、良太郎が口を開く。

「……ほむらちゃん。さっき言ったように、僕達はこの時間の人間じゃない。

本来僕らは、この時間に干渉しちゃいけないんだ」

ほむらはただ黙ってその言葉を聞く。

「でも僕は、イマジンをこのまま放っておく事はできない。彼らが魔女と関係している以上、僕らが戦っていた今まで以上に、この街の人たちに危険が及んでしまいかもしれない」

イマジンを野放しにすれば、傷つく人々が生まれる。過去が壊され、無くしてはいけない時間が消えてしまう。もしもそれに魔女が関わっているなら、更に悲しみと絶望が生み出されてしまう。

だからこそ良太郎は、真正面からほむらを見つめ、ゆっくりと右手を差し出した。

「だから僕は、この時間を守るためにイマジンや魔女と戦う。僕と一緒に、戦ってくれないかな？」

自身が関係を持たない時間だろうと、立ち入る事が許されない別の時間だろうと、そこに住む人々を守るために戦う。それは電王としての使命もあるが、嘘偽りない良太郎の気持ちだった。

そして戦いを決意した以上、この時間で魔女に詳しい人物の協力があるに越した事はない。

巴マミならば事情を話せば協力してくれそうだが、彼女にはまだ電王としての素性を話していない。

自分の力を説明し、理解しているであろうほむらの協力も得られれば、戦いはかなり有利となるだろう。

差し出された右手をじっと見つめるほむら。

モモタロスも給水塔の上から見下ろす中、少しの静寂を挟んでほむらが動く。

良太郎へと近づき、右手を掴める距離まで歩き、その横を無言で通り過ぎた。

「えっ・・・？」

一瞬何が起こったのか分からない中、ほむらが目の前を通り過ぎた事を認識すると振り返った。

無言のままで屋上の出口へと歩を進めていたほむらは、ドアノブに手をかけたタイミングで一度立ち止まり、振り返った。

その瞳には、明らかな拒絶の意思が光っている。

「私が倒すのは魔女と使い魔だけ。イメージが魔女と組んでいようが、知った事ではないわ」

「ちょよ、ちょっと待ってよ！イメージが人を襲ってもいいっていの！？」

「ええそうよ。第一、私がイメージを倒しても得になる事はないも

の」

言いながら取り出したのは、彼女の持つソウルジェムと1つの黒い結晶。

よく見るとソウルジェムの中身が先ほどより黒く濁っており、結晶をソウルジェムと軽くぶつけた。

すると、ソウルジェムに溜まっていた濁りが結晶に映され、瞬く間に元の紫の光沢を取り戻す。

「今は・・・？」

「魔法少女が魔力を使うと、ソウルジェムに『穢れ』が溜まってくる。」

魔女を倒す事で手に入るこの『グリーンシールド』を使い、穢れを移す必要があるのよ。」

つまり、私がイマジンを倒しても魔力の無駄遣いにしかならないという訳」

「それじゃあ、君は・・・」

「ええ。私はグリーンシールドを落とす魔女としか戦わない。」

別に責められる事はないわよ。これが魔法少女の基本なのだから」

何のためらいも無く、ハッキリと言いつた。

その態度が気に喰わないのか、給水塔から飛び降りたモモタロスが声を荒げる。

「てめえ、さつきから聞いてりや偉そうによお！じゃあてめえは、何のために戦ってんだよ！？」

「・・・私の目的は、たった1つ」

黒髪をなびかせて振り返り、強い意志を秘めた黒い瞳を2人に向ける。

「あの子・・・鹿目まどかを、魔法少女にさせない事よ」

「まどか、ちゃんを・・・？」

「そう。だから私は、彼女に関係しようとする全ての魔女を殲滅する」

出てきた意外な名前に疑問を抱く。
なぜ、ここでまどかの名前が出てくるのか？彼女を魔法少女にさせないとは？

「彼女を魔法少女にさせない・・・それが私の全て。
彼女に危害を加えない限り、イマジンを何をしようと私は構わないわ」

「そんな・・・そんなのおかしいよ！周りの人が困ってるのに助けないなんて！」

「とんだ正義感ね。」

もしかして、私たち魔法少女が愛と正義の使者だとも思ってたのかしら？

私たちは、己の為にしか魔法を使わない。グリーンシードを奪い合い、魔法少女同士で戦う事だってある。

バミミは人の為に魔法を使うとか言ってたけど、他の魔法少女からすればとんだ笑い話よ」

「ほむらちゃん・・・でも！」

思わず手を握り締めた良太郎の肩をモモタロスが掴む。

「モモタロス！？」

「やめる良太郎。こいつの目、俺らが何を言っても聞きゃあしねえよ」

「あら、聞き訳がいいのね」

「だがな、1つだけ言わせてもらっぞ」

表情を変えないほむらを真正面から睨みつける。

「てめえ、んな考えだといつか大怪我するぜ」

「・・・大怪我なら、とつくの昔に受けたわ。魔法少女という、一生かかっても癒せない傷をね」

（魔法少女が、傷・・・？）

「今回はイマジンの事を確かめたかったから協力しただけよ。私の邪魔をするなら、あなた達も私の敵・・・覚えておきなさい」

ハッキリとした拒絶の意思。

その意思を明確に伝えたほむらは、そのまま屋上を後にした。残された良太郎は、彼女が消えたドアを見つめるだけ。

「ほむら、ちゃん・・・」

「落ち込んでる暇ねえぞ良太郎」

「モモタロス・・・」

「あんでだけえ音出しちまったんだ。誰かに気付かれる前に、さっさと抜け出そうぜ」

「・・・うん」

モモタロスに続き、同じように屋上のドアへと近づいていく。その心には、彼女が最後に残した表情が焼きついていていた。

次回予告

か、『仮面ライダー』・・・ですか!?

もう何も怖くない!

女の子に入るのは、趣味じゃないんだけどねえ

大丈夫だよ。怖くないから・・・ね?

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』

時を越えて、願いが参上する!

第3話『あなた、何故この時間にいるのかしら?』 6 (後書き)

ども、ウェイカップです！第3話終了となりました！

今回は原作でのマミVSゲルトルートに合わせる形で、良太郎とほむらの共闘をメインに書いてみました。

ちなみに作者の小説における戦闘描写についてですが、手元にあるS・H・フィギュアーツを動かし、実際に戦闘シーンのポーズで固定して、それを見ながら地の文を書いてます。

意外と細かい部分も分かるので、この方法オススメです。

・デングッシャーガンモード

感想でいただいたのですが、本来デングッシャー・ガンモードはガンフォーム専用の武装ですので、他の人物が使う事は出来ないというのが公式らしいですが、

今回の場合、モモがガンモードに組み替えて投げる時に、彼のフリーエネルギーをチャージしてます。

武装が使えないといっても、エネルギーのチャージぐらいは出来るでしょう。

そのため、既に充電済みの弾丸をほむらが発射し、敵イマジンにダメージをア与える事が出来たという設定になります。

決して後付じゃないですよ？w

さて次回は、アニメで視聴者の度肝を抜いた第3話のあのお話。もちろん救済しますよ！なぜなら、この小説は『ハッピーエンド至

上主義』だからだ！！（拳を握って

そして電王サイドでも大きな動きが。

次回予告セリフで『仮面ライダー』の単語が！？
果たしてどういう事なのか！？誰が言うのか！？

では、感想お待ちしております。

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』 1 (前書き)

文章の書き方を少し変えてみました。
違和感あるかもですが、ご了承ください。

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』

1

「ティロ・ファイナーレッツ!!」

魔力の糸で動きを封じられた黒い体躯の存在に、マミが最後の一撃を放つ。

夜を圧縮したような結界の主である『暗闇の魔女』は、漆黒の闇を切り裂く閃光にその身を貫かれ、断末魔と共に消滅。周囲に固まっていた黒猫型の使い魔達も消滅し、結界が碎け散ったと思うと、本物の夜空がまどか達の上空に戻ってきた。

戦いを終えて街灯の上に着地したマミは、空から落ちてきたグリフシードを手のひらでキャッチ。

離れた場所で戦いを見守っていたまどか、さやか、そして良太郎の元へと飛び降りると変身を解く。

「マミさん、お疲れ様です!」

「いやあ、相変わらずかつこいいですなあ!!」

「もう、見世物じゃないわよ」

先ほど手にしたグリフシードを手元のソウルジェムに近づけ、今のティロ・ファイナーレで溜まった穢れをグリフシードが吸い込んでいく。

ほどなくマミのソウルジェムは元の輝きを取り戻し、役目を終え

たグリーンフィードは霞みとなって消えていった。

そんな中、良太郎はせわしく周囲を見渡していた。

まるで何かを警戒するかのようなその様子に、まどかの傍らで座っていたキュウベえが気付いた。

「どうしたんだい、野上良太郎？」

「う、うん。今回は、イマ・・・あの人型の怪人が出てこないなあ
って思ってた」

「そういえばそうねえ。」

でもモグラの以来出てきてないし、やっぱりキュウベえが言ってた
みたいにレアキャラっぽい使い魔だったんじゃないの？
倒したら経験値ドーン！で、レベルアップ！みたいな？」

答えたのはさやか。

当初は良太郎に対して敬語だったのだが、元から敬語が苦手だった
のだろう。

良太郎の許可もあり、良太郎に対してはまどかと同じように、非
常にフランクな言葉遣いとなっていた。

「あの使い魔：かは分からないけど、あれについては保留にしてお
きましょう。」

ここで話しても、答えは出ないでしょうしね」

マミが可愛らしい腕時計を確認すると、短針が既に6を指している。

結界に入っている間に時間が経っていたのか辺りに人の姿は無く、太陽も完全に沈もうとしていた。

「それじゃ、今日は時間も遅いしこれで解散にしましょうか。途中までいっしょに行きましょう」

『はい！』

マミの提案に答え、4人は今回の結界の発生場所であった公園を抜けようとする。

その時、良太郎の体の奥底から声が響いてきた。声の主は、彼の体に憑依していたモモタロスだ。

『良太郎、イマジンだ！』

「えっ……！」

『間違いねえ！さっさと行くぜ！』

「？ 良太郎さん？」

突然声を上げた良太郎にまどかが振り向くが、当の良太郎は慌てた様子で、

「う、ごめん！僕、用事思い出したから、先に行くね！また連絡するから！」

一方的に答えると、抜けたばかりの公園を突っ切って全力ダッシュ。
ユ。

そのまま近くに止めてあったデンバードに跨ってエンジンをかけ、まどか達の進行方向とは逆へ駆け抜けていく。

残されたまどか達はポカンとしたまま、デンバードが残したアクセル音を聞くだけであった。

見滝原町の片隅にある大きめのゲームセンター。

ボーリング場やカラオケなども完備した、この街で人気のデートスポットでもある建物の入り口に向け、警報を受けてやってきたパトロール中だった4人ほどの警官が、黒光りする銃口を向けていた。彼らの視線の先には、既に原型を留めていないほどに破碎されたガラス扉から一歩ずつ歩いてくる異形の存在。

緑の体色に長い舌。手には紫の鞭を構えたその名は『カメレオンイマジン』。

このイマジンもかつて良太郎達の前に現れ、とある契約者の『大金が欲しい』という願いに答え、無数の銀行を襲って望み通りの大金をかき集めたイマジンだ。

セキュリティシステムの反応を受け「また誤報か、やんちゃな若

者のいたずらか」とパトカーを走らせた警官達から見れば、まさかこのような怪物が中から出てくるなどと想像できるはずもない。

唸り声を上げ、一歩ずつこちらに歩いてくるカメレオンイマジンが足元のガラスを踏みしめる音が響いた瞬間、

「構わん！ 射撃用意！ 撃てえ！」

4人の中で階級が一番高い人物の合図で、警官達の拳銃が一斉に火を噴く。

一発で人の体にめり込み、命を奪える弾丸は、4発中3発がカメレオンイマジンに命中。その体を僅かに仰け反らせた。

が、それだけ。当のカメレオンイマジンは何事も無かったかのようになり歩を進める。

「ば、化け物……！」

「ひ、怯むなあ！う、撃てええ……！」

拳銃に装填された全ての弾丸を連続で発射。20発の弾丸が時間差で標的に迫る。

銃弾が着弾する直前、突如カメレオンイマジンの体色が光ったと思つと、その名の如く周囲の景色に体色が同化。

結果、目標を見失った20発の銃弾は全てがゲームセンターの壁に穴を開ける事となった。

「き、消えた……」

「ど、どこに」

驚きを隠せない警官達を他所に、突如、後方に止まっていたパトカーが盛大な炎をあげて爆発。

巨大な爆音で耳をやられ、爆発に吹き飛ばされた警官達が地面や木々に叩きつけられる。

その後方からは透明化を解除したカメレオンイマジンが、倒れた警官に近づき、無機質な目で見下す。

「ひ……！」

いくら訓練された人間だろうと、彼らが訓練しているのは、あくまで対人用の域。

当然、このような人外存在と戦う術など、持ち合わせているはずもない。

腰を抜かし、立つこともままならない警官に向け、カメレオンイマジンは手にした鞭を振り上げ

「待て待て待てええええっ……！」

響いてきたのはバイクの排気音と威勢の良い男の怒号。

直後、カメレオンイマジンが真横からの衝撃をまともに受け、ゲームセンターの壁へと吹き飛ばされた。

バイクごと体当たりをぶちかました、良太郎に憑依したモモタロスを見ていた警官を逆にギロリと睨み返す。

「てめえら邪魔だ！さっさと失せろ！」

「は、はいいいいっ！！」

「て、てっしゅううう！！」

モモタロスの怒声に警官達は一目散にその場を避難。残されたのは、モモタロスとカメレオンイマジンのみ。

ヘルメットを外し、憑依の証でもある赤いメッシュを揺らしてデーンバードから降りると、真っ赤な瞳がカメレオンイマジンを睨みつける。

一方、最高速のバイクによる直撃という一撃を受けたカメレオンイマジンは、何事もなかったかのように立ち上がり、逃げ出した警官には目もくれずにモモタロスに視線を向けた。

『電、王…か…』

『しゃべった…？』

「今回は話を通じる野郎みてえだな。まっ、さっさと片付けさせてもらう事には変わりねえぜ！」

左手を構え、手に握られているのはデンオウベルト。

慣れた動作でベルトを装着し、足を肩幅以上に広げ、右手でライダーパスを握り締め、両手を大きく広げて叫ぶ。

「変身！！」

【SWORD FORM】

バックルに通されたライダーパスに反応し、電子音声と生まれるフリーエネルギーの装甲。

全身に装甲を纏い、モータロスの意思を持つ電仮面が展開され、電王・ソードフォームへと変身が完了。

「俺、参上！さっそくだが、いきなりクライマックスだぜえ！！」

即座にデンガッシャーをソードモードに組み替え、赤い刃を出現させながら駆け出し、カメレオンイマジンに真っ向から切りつける。カメレオンイマジンは直線に振り下ろされた攻撃をかわし、空いた背中に蹴りを叩き込もうと左足を鋭く切り返すが、

「甘えっ！！」

左に一步ステップしたことで、カメレオンイマジンの蹴りは肩のアーマーを掠るだけとなった。

ステップ終了と同時に鋭く詰め寄ると、右手に持ち直したデンガ

ツシヤーを袈裟懸けに振り上げる。

カメレオンイマジンの胸部に切り傷が生まれ、その隙を逃すまいと連続でソードを振りまくる。

刃の直撃と共に無数の火花が生まれ、最後の斬り付けと共にカメレオンイマジンが宙へと吹き飛んだ。

が、吹き飛ばされながらも手元の鞭を操るとゲームセンター屋上の看板に巻きつけ、それを利用して軌道を修正。危なげなく屋上へと着地し、地上にいるモモタロスを見下ろす。

「なんだなんだあ！？逃げるつもりかカメレオン野郎！」

このまま逃がすか！と、自らもゲームセンターに入ろうとした、その時。

『ガアアアアアア！！』

突如、カメレオンイマジンの口から、先ほどとは違う叫びが巻き起こった。

口から漏れる巨大な叫びと共に、左右に広げた両手から漆黒の何かが溢れだした。

見た目は黒い煙だが、所々に紫電をバチバチと生み出すそれが屋上からゲームセンターを包み込んでいき、外観が徐々に変貌していく。

それは、この時間にたどり着いた良太郎達が、既に2回も目にしている異空間。

「おい良太郎！こりゃあ……！」

『魔女の、結界……！？』

驚く良太郎達を他所に、ゲームセンターは完全に変貌を完了。

魔女のみが生み出せるはずの異質な空間の中へと、カメレオンイマジンが消えていく。

「あつ！てめえ、待ちやがへぶしっ！？」

逃がすまいと意気込んだモモタロスが最初に割れていたガラス戸の入り口から入ろうとするが、見えない壁に阻まれるかのように入る事は出来なかった。

おまけに真正面から顔面を勢い良くぶつけてしまい、鼻を押さえて座り込む始末だ。

「いつつうう……！　ちくしょう、なんだこりゃあ……！」

『な、なんで入れないの！？ウラタロスは入れたのに！？』

仮面のおかげで大事にはなっていないが、多少痛む鼻を摩りながら見えない壁のような障壁で阻まれた結界に触れる。

試しにデンガッシャーで切り付けてもみるが、固い何かにぶつけ

る感触だけが手に残り、中に入れるような様子はない。

「だああめんどくせえ！こうなったら…！」

『って、フルチャージダメだって！結構体力使ったよこれ！？』

「男は気合だあ！って、ドリルで何でもぶち抜くアニメで青い髪の男が言ってたんだよお！って事で、結界ごと叩き斬るぜえ！！」

『近所の人に気付かれちゃうでしょ！ダメだって！』

フルチャージのためにライダーパスを持った右手を腰へ動かすモタロスと、周囲の被害を考えて別の方法を探すために右手を腰から離そうとする良太郎。2人の動きが重なったためか、右手を振り子のようにブンブン動かすという動きになる電王。

どこかの路上で行われている、売れない大道芸か何かと思われるその動きに、いきなりツツコミが入った。

「とりあえず、不審者以外の何者でもないわね」

「っ、ほむほむ！？」

「だからその呼び方やめなさいって言ってるでしょう」

後ろから聞こえた声に振り向く。

いつのまに來ていたのか、既に魔法少女に変身していた曉美ほむ

らが立っていた。

デンオウベルトを外し、変身と憑依を解いたモモタロスと良太郎が向き合う。

「近くで結界の反応があったから来てみたのだけれど、あなた達がいるという事は、またイマジンが出たのかしら？」

「この結界を作ったのが、さっきまでここにいたイマジンなんだ」

「イマジンが…結界を作った？ 本当なの？」

「ああ。中に逃げちまったけどな。

「ただだよ、何でか知らねえが俺たちじゃ中に入れねえんだよ。くそっ！」

モモタロスの言葉に少し考える素振りを見せると、モモタロスを押しのけて結界の前に立つ。

盾を装着した左手で結界の入り口に触れると、先ほどまで固い壁のようだった結界に光の亀裂が入り、すぐに亀裂は大きくなって入り口が現れた。

「あ、あれ……？」

「理由は分からないけど、あなた達では結界に入り口を作る事が出来ないみたいね」

「ああ？なんだそりゃあ。この前、カメ野郎は普通に入れたって言

つてたぞ」

「そのカメ…っていうのはあなた達の仲間のイマジンよね？
恐らく、バマミが開いた入り口から入ったのだと思うわ。
結界に穴さえ開いていれば、中に入る事は可能だから」

2人との会話から、電王には結界の入り口を作る事が出来ないという推測に辿りつく。

これはこれで対策を考えなくてはいけない問題だが、入り口が空いた以上、中にいるカメレオンイマジンを追う事が可能となった。
良太郎とモモタロスが並んで入り口前に立つと、髪をなびかせたほむらも隣に立つ。

「なんだ、ついてくんのかよ」

「その結界を作ったイマジンが気になるから、今回は協力するわ。
さっさと行くわよ」

「けっ、勝手にしやがれ」

「モモタロス、ほむらちゃん、行こう！」

3人は慎重に結界へと突入する。

それから数分後。

ほむらと同じように結界を察知したマミと、一緒についてきたまどかとさやかもゲームセンターに到着。

炎を上げるパトカーや割れた鏡にまどかが驚く中、既に空間に穴が開いていた事から、自分達以外の魔法少女が既にこの中にいる事にキユウベえが気付く。

「どうやら他の魔法少女がもう中にいるみたいだね」

「他のって、まさか…ほむらちゃん!？」

自分の知るもう一人の魔法少女　ほむらの存在が脳裏を走る。
マミも同じ意見だったのか、マミは早くも指輪をソウルジェムに変化させると眼前にかかげ、魔法少女へと変身。

マスケット銃を片手に召喚し、先頭に立って結界の入り口を睨みつける。

「2人はどうする？　怖いならここで待っててもいいのよ？」

「……行きます!」

「あたしもです　？」

マミに答えた所で、さやかゲームセンターの傍らに止まっていたバイク　デンバードに気付いた。

入り口の影に隠れて全体は見えないが、どこかで見たような形状に首を傾げる。

「あれ…あれって……?」

「さやかちゃん、どうしたの?」

「あつ、なんでもないって! それじゃマミさん、いっきましょー!」

「こ、こら! 後ろから押さないの!」

疑問はあるが、今優先すべきはこの結界を解放する事。
そちらに思考をシフトし、まどか達と共に結界へと突入した。

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』 1（後書き）

ども、ウェイカップです!第4話スタートとなりました!

今回の話を書いて『暗闇の魔女って名前あったっけ?』とネット
で調べる事1時間:結果「まあいいか」で収まりました。

いや、僅か数行でティロられる運命でしたしねえ(笑)

それと今回から、文章の段落などの書き方を変えてみました。

携帯で見てみたら、こっちの方が断然見やすいという...

三点リーダーも組み込んでありますので、過去の文よりは見やすい
と思います。

当作品並びに、作者の他小説も随時変更していく予定なのでご了承
ください。

そして当小説ですが、先日ついにお気に入り数が100超え!総
合評価が300を突破!!

この場を借りてではありますが、お気に入り登録を下さっている
皆さん。評価を入れてくださったみなさん、ありがとうございます!

これからも『仮面ライダー電王×魔法少女まどか マギカ』未
来へ続く願いをよろしく願います!

次は目指せ200件&500ポイント!

ディケイドデュアルどうした?シャインは?シンケンは?

ええ、やってます...やってるんですが...っ!

今回の第4話、ある意味『とんでもない事』をやっちゃいます。
この作品で自分が絶対にやりたかった事でもありますので、第4話
の最後の方をお楽しみに！

では感想お待ちしております！

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』

2

結界の中は、青空、夕焼け空、夜空、高層ビル、田園、水平線など、分別も種類も何も無い、この世に存在するだけの数多くの景色を、片っ端から混ぜ合わせた空間となっていた。

突入していた良太郎達は、結界の最深部と思われるこの場所で、結界を生み出した張本人であるカメレオンイマジンを発見。

当のカメレオンイマジンも良太郎達に気付いていたのか、待っていたかのようにその場に立ちつくしている。

「へっ、ようやく見つけたぜこのカメレオン野郎!」

『ふ、ん…待っていたのは、こっちだ…』

「きちんとしゃべってる…前のイマジンとは違うって事かしら」

モモタロスがイマジン体における自身の獲物、赤い片刃を持つ巨大剣『モモタロスオード』を構え、ほむらも盾から取り出した拳銃の銃口を向ける。

臨戦態勢を整え、2人がそれぞれの武器を構える直前、良太郎が一步前に出て2人を制した。

「待って二人とも。少しだけ、時間をちょうだい」

「あっ? 何言ってるんだよ」

「どうしても確認しなきゃいけないことがあるんだ…お願い」

「…何かあったら、すぐに仕掛けるわよ」

その言葉に何かを察知したのか、完全に納得してないながらも銃口を下ろすほむら。

モモタロスも舌打ちしながら剣を肩に背負う。

それは敵対しているカメレオンイマジンも同じであり、武器である鞭は持っているものの、構えている様子はない。

良太郎は更に数歩前に出ると、質問をぶつける。

「君達は…どうして、この時間にいるの？」

『ふ、ん…変な事を聞くものだな…俺たち、イマジンがどういう存在か、知ってるだろう…』

良太郎、というより、電王の事を知っていたのか、軽口のような口調で返す。

『ただ』と、言葉を付け足した。

『1つだけ、違う事があるとすれば…俺、たちは…何者かによって、この時間に強制的に、連れてこられた…』

「連れて、こられた？」

ほむらが首を傾げる。

良太郎から聞いていたイマジン達は、自らの意思で良太郎達の時代に現れていた。

だが、今のカメレオンイマジンの発言から、まるで彼らを無理矢理この時間に呼び出した何者かがいる、そんな意味が感じられる。

『何者かは、分からん…だが、奴は俺たちに体を与え……っ！』

突如、カメレオンイマジンの体が痙攣。

同時に、何かが空気を切り裂く音。

「ッ！ 良太郎！」

モモタロスが即座に良太郎の前に立つと、飛来してきた鞭による攻撃を剣で叩き落した。

その攻撃の主であるカメレオンイマジンの瞳に、今まで会話していた際に僅かに灯っていた意識の色はもはや存在せず、今まで戦ったイマジン達同様、低い唸り声を上げるだけ。

同時にその体にも異変が起こり、漆黒に染まった黒猫の手足や尻尾のような物体が付着していた。

「あの猫みたいなの、さつきマミちゃんが戦った魔女の…！？」

「『暗闇の魔女 スライカ』の使い魔…やはり前のイマジン達と同様、体を侵食されているようね」

「だな。だが、ハッキリした事もあるぜ。こいつらをこの時間に呼び出した野郎は、魔女と組んでるって事がなあ！ 良太郎っ！」

「…うんっ！」

この状態になつては、もう言葉を聞く事は不可能と判断。他人に害をもたらすなら、ここで倒さなくてはいけない。

モモタロスが良太郎の体に入りこむとほぼ同時、左手に出現させたデノオウベルトを装着し、右手で構えていたパスをタッチ。

「変身！」

【S W O R D F O R M】

良太郎の体が装甲に包まれ、電王・ソードフォームが結界内に参上した。

「俺、もっかい参上！」

敵を前にしても決めセリフを忘れない辺りが、ソードフォームの意思を決定しているモモタロスらしい所だ。

既に合体を完了したデングッシャー・ソードモードを構えると同時に、ほむらも銃を持ち直す。

「行くぜ行くぜ行くぜえっ!!」

先に動いたのはモモタロス。右手のデンガッシャーを振り回しながら突撃し、勢いをつけて振り下ろす。

相対するカメレオンイマジンには、鞭をしならせ、天井のあちこちに付着したフックのような装飾に絡めると、それを利用して空中に飛び上がった。

その身のこなしは、先ほどより遥かに強化され、スピードが圧倒的に増している。

「この野郎！　ちょこちょこ飛びまわりやがって！」

「任せなさい」

剣という獲物故に、空中への攻撃手段を持たないモモタロスに代わり、ほむらが盾から取り出したのは、連射力に優れたアサルトライフル。

発射機構を連射に設定。マガジンが装填されているのを確認し、高速で飛び続けるカメレオンイマジンに向け、斉射。

弾丸は天井の風景に火花を撒き散らし、それでもカメレオンイマジンには器用に鞭を利用し、全ての攻撃を避け続ける。

更には弾切れを起こし、マガジンを交換する僅かな時間に地上スレスレを飛びながら、二人を四方から蹴りつけた。

「ん、なるお！」

近づいた瞬間を狙って剣を振るうが、敵が移動する速度の方がはるかに速い。

それはほむらも同等で、放たれる銃弾は一発もカメレオンイマジンには当たっていない。

徐々に手持ちの弾丸も少なくなった中、ほむらが叫ぶ。

「モモタロス、止めるわ！」

ライフルを収納し、左手の盾をかざして時間停止を発動。
空中を飛びまわるカメレオンイマジンを停止させ、そこに攻撃を叩き込もうとしていた、その瞬間。

「ほむらちゃん！」

「うわ！ 何、あの赤いの！？」

「敵ではなさそうだけど…魔法少女じゃないわね」

その瞬間、後方から聞こえてきた3種の声。
時間停止を忘れ、ほむらが振り返ると、そこには結界に入ってきたまどか達の姿があった。

「まどか…！？」

（マミちゃん達も！？）

驚いたのはモタロスと良太郎も同様だったのか、思わずそちらを向いてしまう事で隙が生まれた。

カメレオンイマジンが高速で振り子のようにモタロスに向かい、その体を掴んで空中に移動するとそのまま蹴り飛ばし、壁に叩きつける。

衝撃でモタロスの手を零れ落ちるデンガッシャー。

獲物を離してしまった事に舌打ちする前に、鞭を巧みに操り、地面に落下する前のデンガッシャーを絡め取ると、マミの生み出したバリアに守られたまどか達の眼前へと投げ捨てる。

空を数回ほど回転したデンガッシャーの先端が、固い地面に突き刺さった。

「ひゃうっ！？」

突然飛来してきた、赤い刀身の剣らしき物体にまどかが悲鳴をあげ、念のためにとバリアの強度を上げたマミが一步前になる。

同時に、弾薬交換のために距離を取り、まどか達の傍に着地したほむら。

ほむらはもちろんだが、再び現れた人型の使い魔、それと戦うモタロスを注意深く見ながら、マミが口を開く。

「暁美さん。あそこの赤い人はお友達かしら？」

「詳しい話は後。手伝ってもらえると助かるわ」

「あら、珍しいわね。あなたが私に協力を求めるなんて」

「話に來ただけなら、その2人を連れて帰りなさい」

「ふふ、冗談よ。それじゃあ、行きましょうか！」

2人がほぼ同時に飛び出し、徒手空拳でカメレオンイマジンと戦っていたモモタロスを援護。

だが、2人の魔法少女の弾幕すら、カメレオンイマジンの緑の体軀には当たらない。

空中を飛び跳ねるだけではなく、時には右手の鞭を高速で回転させる事で簡易的なシールドとし、僅かな隙については鞭による中距離からの攻撃。

3対1という圧倒的な状況でなお、モモタロス達にのみ疲労は溜まっていた。

その戦いの傍観者となっている、バリアに護られたままのまどか、さやか。

まどかは手を握り、何も出来ない自分を悔やみながらもその戦いを見つめて祈りを捧げる。

一方、隣のさやかは、何かを決意したかのように拳を握り締めていた。

「あ、あたしだって…！」

青い瞳が、目の前に突き刺さっているデンガッシャーに向けられ

る。

見た事もない意匠だが、おそらくあの赤い装甲の人物の武器だろう。

それだけ確信し、突然バリアを飛び出した。

「さやかちゃん!？」

「ふにゅうううっ!!」

残されたまどかが驚く中、さやかは突き刺さったデンガツシャーを力ずくで抜き取る。

抜く事には成功するが、その重さは彼女が想像していたものよりかなりの重量で、持ち上げるだけでも精一杯だった。

「こ、のお…!」

額に汗を浮かべ、全身に力を込めて剣を持ち上げる。

地面からは浮かび上がるが、僅か数センチ上がった状態のまま、さやかの体は静止してしまう。

やはり、魔法少女でもなんでもない自分には、何も出来ないのだからか…

一瞬、脳裏に走るのは、赤い瞳を自分に向ける白い生物との契約。

その時、突然剣が軽くなった。

何事かと剣を見ると、自分の手に添えられた細い腕。

腕の先には、同じようにバリアを飛び出したまどかが、さやかと

一緒に剣を持ち上げていた。

ちなみに、キュウベえだけはしっかりバリアの中に残っている。

「まどか!？」

「えへへ、ちょっと、重いね…!」

「ば、バカ! あんたはバリアに戻ってなさい! これぐらい、あたし1人で…!」

「一緒にやろう、さやかちゃん!」

まどかの眼が、さやかをまっすぐ見る。
何の疑いもない、純粋なまどかの瞳。

ああそうだ、この眼だ。

優しい心を持ち、争い事を好まないこの少女が時折見せる、このまっすぐな瞳。

こうなった時のまどかは、誰にも止める事は出来ない。

親友である自分が、誰よりも知っている。

刹那、さやかの顔に笑みが戻った。

「…オッケー! 気合いれなさいよお!」

「う、うん!」

「そこの赤いあんたあ! これ、どうすればいいのぉ!？」

『まどかちゃん、さやかちゃん…!』

「…へっ！ 思いっきりこっちにぶん投げろお!」

まどかとさやかの勇気に笑みを浮かべながら、モモタロスは後退してライダーパスを構える。

それに何かを感じたのか、追いつこうとするカメレオンイマジンだが、モモタロスの前に立ち、盾を構えたのはほむら。

地面を踏みしめ、盾の後部から右手を這わせ、腰を落とす。

カメレオンイマジンの振り子キックが、盾に吸い寄せられるように直撃。

「ぐ、ううううっ…!」

あまりの衝撃に地面を削るが、どうにかその一撃に耐え抜く。それは同時に、足止めに成功した事を意味していた。

「巴、マミっ!」

瞬間、カメレオンイマジンの横腹に突き刺さる白い銃身。

「この距離なら、外れる訳がないわよねっ!」

密着させたマスケット銃の引き金を引く。

銃身から放たれた零距离の衝撃は、今度こそカメレオンイマジンに衝撃を与え、その体に僅かだが苦悶の叫びを上げさせた。

それこそ、さやか達が必死に耐えたチャンス。

「いくよまどか！」

「う、うん！」

『せいのっ！！』

2人が息を合わせ、全力で Dengassha を投げつけた。
弧を描く赤い剣。だが若干パワーが足りなかったのか、Dengassha はモモタロスの予想より離れた場所へと落ちようとしていた。

「任せて！」

マミが首元のリボンを解き、魔力の糸を生成。

黄色いラインが宙を駆け、Dengassha の柄を掴むと、モモタロスの方へと投擲。

まどか達によって廻された Dengassha を受け取り、ほむらが座り込んだ頭上を真横になぎ払う。

ほむらとマミによって動きを止められたカメレオンイマジンの体に、横一文字の斬撃が炸裂。

吹き飛ばされたカメレオンイマジンが倒れ、最後の仕上げにパス

をタツチ。

【FULL CHARGE】

「必殺！ 俺の必殺技っ、パート2！！」

先端が分離し、上空に飛来したソード部分を一気に振り下ろす。

一直線にカメレオンイマジンに振り下ろされたエクストリームスラッシュは、まっすぐその体を叩き斬り、カメレオンイマジンは断末魔と共に爆発、そして消滅。

それを合図にするかのように、周囲の結界も消滅。元のゲームセンター内部へとその姿を変えた。

「よっしゃあ！ 決まっただぜえ！！」

己の信条通り、カッコイイ戦いを繰り広げたモモタロスが満足そうに叫び、変身を解こうとデノオウベルトに手をかける。

当たり前だが、戦いの後は変身を解かない訳にはいかない。この恰好のまま、街をバイクで走り回るなどもってのほかだ。

だが今回だけは少々事情が異なり、彼にだけ聞こえる声で、良太郎が叫ぶ。

（ちょ、ちょっと待ってモモタロス！ まどかちゃん達がいるから、ここで変身解いちゃダメだって！）

「ああ？ 別にいいじゃねえかよ、りよ」

（ダメだって！ とにかく、今日はデンライナーに戻ろう！）

「…ちっ、わあったよ。ほむほむ、悪いが後は任せるぜ」

「勝手にしなさい」

この場にいる少女達で唯一、電王の正体を知っているほむらが、ため息をつきながらも了承。

内心はカッコよく変身を解除したい衝動に押されながらも渋々納得し、一般人が誰もいなくなったゲームセンターを後にする。

入り口に置いてあったデンバードに跨ると、同じく外に出てきたまどかが声をかけてきた。

「あ、あの！」

「あ？ なんだよ」

「その、間違ってたらごめんなさい、なんだけど…」

手をモジモジさせ、上目遣いでモモタロスをちらちら見る。その態度に、良太郎は嫌な予感を覚えた。

（まさか…気付かれた？）

思い出してみれば、まどか達はモモタロスが良太郎に憑依した時、彼の言葉を少しだが聞いている。

その特徴的なドスの効いた言葉遣いを、まどかが覚えていたとしたら？

「その、もしかしてあなた…」

（ま、マズイ…）

良太郎が冷や汗を掻いた次の瞬間、意を決したまどかが口を開いた。

「か、『仮面ライダー』…ですか!？」

「かめん、らいだあ？」

（仮面、ライダー…？）

まどかの口から出た聞きなれない単語に、モモタロスと良太郎がハモる。

「えと、新聞で見たのとは姿が違うけど、仮面みたいなものつけてるし、魔女みたいな怪物と戦ってるし…それにそれ！ バイクに乗ってるじゃないですか！」

(…おい良太郎。なんだよ、かめんらいだあって。食えるのか?)

(わ、分かんないけど…電王を何かと間違えてるのかな?)

呼ばれた事のない名称に、意識の中で会話する2人。

その時、変身を解いたマミにほむら、さやかとキュウベえもゲームセンターから出てくる。

このままここに残っていても、ささいな事で正体がバレかねない。

(モモタロス、とにかく今日は行こう)

(わあってるよ……まっ、これぐらい言っても問題ねえだろ)

(へっ?)

良太郎が間の抜けた言葉を返す間に、モモタロスはデンバードのエンジンをかけながらまどかに振り向いた。

「おい、その桃色娘」

「も、桃色娘…!？」

「その、かめんらいだあ……ってのは知らねえがよ、俺は『電王』だ。覚えときな」

「でん、おっ？」

首を傾げるまどかはそのままに、デンバードのアクセルを吹かす。
そのままゲームセンターを走り去り、夜の街へと消えていった。

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』 2（後書き）

ども、ウェイカップです！

マミさんねんどろいど化決定だぜひゃっほううううっ！……！
第3話を彷彿させる呆け顔とシャルロット付き！

凄い！第3話の食べられちゃう所が再現できるじゃないかっ……！

…あれ、なんでだろう？ 涙が溢れてくるよ……？

・イマジン

少しだけ情報が出ましたが、この世界に登場するイマジンは『何者か』が強制的に呼び出した事が判明。

これはこのクロスを考えてた時から決めてまして、何気に超重要事項となります。

・この距離なら外さない
敵がバリア持ちだったら『この距離ならバリアは張れないわねっ！』
になったのにつ……！

・仮面ライダー、ですか？

はい、何気に一番の重大発言ですよまどかちゃんw
この世界では既にとある『仮面ライダー』が誕生しており、一般人にも若干の情報が出回っており、良太郎達にも関係する事となります。

一般人にも情報が知られてるライダーって限られますが…さて、どのライダーでしょうか？

余談ですが、上目遣いで手をもじもじって…まどか、恐ろしい子っ！

さて、イマジン戦を挟んだ今回を経て、次回はようやく本編の流れに戻ります。

マミさん救済しますよー！

では、ご感想お待ちしております！

追伸

よいこのみんな！ 今年のなつ、あたらしい仮面ライダーがやってくるよ！

うちゅうの力をひめたスイッチで変身する、うちゅうでかつやくする、むてきの仮面ライダーなんだ！

仮面ライダーキョーダイン、9がつ6にちスタート！！

いや、あの頭部はキョーダインでしょうフォーゼさん…w

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』

3

ゲームセンターにおけるイマジンの戦いから数日後。

あれ以来、魔女や使い魔、そしてイマジンの出現などは感知されておらず、良太郎は警戒と地理把握もかねて見滝原街を見回る毎日进行していた。

「そろそろ夕方か…一旦戻ろうかなあ」

既に傾き始め、まもなく街をオレンジに染めるであろう太陽を細めで眺め、大体の現在時刻を確認。
修理をしているハナ達にお土産でも買っていこうかと、ポケットから財布を出して中身を確認した、その時。

「あれ？ 良太郎さん？」

「ん？ マミちゃん？」

後ろから声をかけてきたのは、綺麗な金髪を左右でロールにした顔なじみの少女　バミミだった。

荷物の入ったビニールを持っている所から、買い物帰りか何かと行った所か。

今は1人なのか、周囲にはまだか達やキュウベエの姿も見えない。

「奇遇ね。どうしたのかしら？」

「まあ散歩って所かな。マミちゃんこそ、今日はあっちは大丈夫なの？」

「ええ、今のところは。鹿目さん達も今日は別の用事があったみたいで、体験ツアーもお休みね」

まだか達の中で一番の年上だったと言うのもあり、敬語を交えつつもフランクな言葉遣いとなったマミ。

さすがに往来のど真ん中で『魔法少女』だの『魔女』だのと話す訳にもいかず、それとなく互いにだけ分かるような言葉で話す。

2人はそのまま同じ方向へ他愛ない会話をしながら歩いていると、少し前を歩いていたマミが突如話題を変える。

「良太郎さん、1つ聞いてもいいかしら？」

「ん？ 何？」

「答えづらかったら構わないんだけど…」

少し言いよどむような素振りを見せた後、いきなり振り返る。その目はまっすぐ良太郎を見つめ、そして口を開いた。

「ゲームセンターに生まれた結果から出てきたの、あなたよね」

「え…?」

良太郎の足が止まる。

その言葉が意味する理由を知っているからだ。

「な、なんで…!？」

「そのバイク、結界から出て行く人が乗ってた物と同じ形よね。かなり珍しい形だし、鹿目さんは分からないけど、美樹さんも何となく気付いてたみたいよ」

かなりの誤算だった。

それとなくデンバードをまどか達が直視しない位置に停めたりして、注意はしていたつもりだった。

確かに特徴的な形状をしているが、まさか形を覚えられていたとは。

ママは責めるような口調ではなく、いつも通りの言葉遣いで続ける。

「私も魔法少女なんてやってるし、人に言えない事情があるっていうのは分かるわ。どうしても言いたくなかったら答えなくてもいいの。」

でも、これだけは聞かせてほしい」

その質問は、もう1人の魔法少女に言われたのと同じ質問。

「あなた、一体何者なのかしら？ 私達の敵？ それとも、味方なの？」

2人の間に言葉はなく、夕焼けに染まりだした空に鳥の泣き声が木霊する。

（はあ… やっぱり、僕はウラタロスみたいに嘘はつけないなあ…）

心の中でため息をつき、観念して良太郎が口を開こうとした、その時。

ママが指にはめている指輪 ソウルジェムが、突如輝きを放つ。

「っ、魔女の反応！」

「えっ！？」

「ママさん！」

横手の道からママを呼ぶ声に2人が振り向くと、息を切らしてこちらに走ってくる桃色の髪の少女 鹿目まどかの姿があった。

まどかは2人の近くに到着すると、元々体力があまりないのだから

う、肩で息をしながら膝を押さえる。

「鹿目さん、どうしたの？」

「びよ、病院に…グリーンフシードが！」

どうにか息を整えたまどかが指差したのは、住宅街の間から見える大きな建物。この街で一番大きな総合病院『見滝原病院』。既に魔女の結界が生まれはじめ、どす黒い空間が建物を徐々に覆っている。

「病院つて、あんな所で魔女が暴れたしたら…！」

「鹿目さん、美樹さんとキュウベえは？ 一緒じゃなかったの？」

「そ、それが…結界の奥で、グリーンフシードを見張るって二人とも…！」

身振り手振りでもどかが説明する。

さやかのお見舞いである少年のお見舞いに2人で向かったのだが、病院の廊下に埋め込まれたグリーンフシードを偶然にも発見。

ちょうど合流できたキュウベえとさやかがグリーンフシードを見張るためにその場に残り、まどかがマミと連絡を取るためにここまで走ってきたという。

と、そこで良太郎が疑問を口にした。

「グリーンフシードって、ソウルジェムの穢れを移す道具の事じゃないの？」

「確かにそれもあるけど、グリーンフシードは元々、魔女の卵なのよ。卵が孵化すれば生物が生まれる…グリーンフシードの場合、新しい魔女が生まれてしまうという訳」

「あれ、良太郎さん…なんでグリーンフシードの事を？」

「あ…う、うん。ほむらちゃんから聞いてたんだ。それよりマミちゃん、さっきの話だけど…」

「ええ、今は結界を優先するべきね。行きましょう」

互いに頷き、良太郎はデンバードに跨ってアクセルを吹かす。おそらく近道があるのだろう、マミは既に細い路地から走り出しており、残されたまどかには良太郎が予備のヘルメットを差し出した。

「まどかちゃん、乗って！」

「は、はい！」

まどかが後部に乗った事を確認し、デンバードが走り出す。目指すは、新たに生まれた魔女の結界。

見滝原病院に生まれた魔女の結界の最深部。

溢れ続ける結界に覆われたその場所に、美樹さやかと肩に座るキユウベえがいた。

物陰に隠れながら監視を続ける2人が見つめる先には、今まさに何かを生み出そうと、徐々に鼓動を強くしているグリーンフィード。

「ああ、もうあんなに…キユウベえ、マミさんとの連絡は？」

「いまちょうど結界に入った所みたいだ。まどかや野上良太郎と一緒に、こっちに向かってるよ」

「良太郎も…？」

出てきた名前に首を傾げた。

彼女の脳裏に浮かぶのは、先日のゲームセンターで出会った仮面の人物。電王が乗るバイクと、良太郎が乗っていたバイクの関連性。

「…ねえキユウベえ。良太郎ってさ、何者なのかな？」

「なんだいいきなり」

「今考えるとさ、この前の結界で使い魔やモグラの怪物が出てきた時も妙に冷静だったし、まるでモグラ怪物の事を知ってるみたいだった。」

ゲーセンのバイクだってそう。あそこまで似てるバイクがちょうど近くにあったなんて、出来すぎじゃない」

「つまり、あの仮面の人物は野上良太郎だって言いたいのかい？」

「証拠はないけどね」

自分の考えを告げながらも、確たる証拠がない事に苦笑い。
キユウベえは肩から飛び降り、尻尾を振りながら答える。

「実は、マミも同じ事を考えていたんだ。あの仮面の人物は野上良太郎じゃないかってね。次に会う時に聞いてみるって言うてたから、今頃話してるんじゃないかな？」

「やっぱりね…あいつ、本当に『仮面ライダー』なのかな…」

怪人と戦う仮面の戦士。

まどかと同じく、さやかも似たような特徴を持つ人物を知っていた。

その単語を初めて聞いたかのように、キユウベえが首を傾げる。

「なんだい、その仮面ライダーっていうのは？」

「あんだ、仮面ライダーのニュースとか見てないの？」

「マミと一緒に魔女退治で出かける事が多いから、テレビという媒体からは情報をそんなに集めないからね。僕も別に必要だとは思わないし」

「ふん…まあいいわ。仮面ライダーっていうのはね」

自分の持つ情報を教えようとしたその時、目の前のグリーンフィードの鼓動がより一層高まった。

2人は思わず会話を中断する。

「ちょ、ちょっとやばくない！？ マミさん達まだなのお！？」

「マミ、聞こえるかい？」

さやか of 悲痛な声に合わせるかのように、キュウベえが結界内に突入しているマミへとテレパシーを送った。

少し時は遡り、結界内部に突入した良太郎達。

マミがまどかの手を引きながら指輪を掲げ、少しずつ強くなる光を元に慎重に歩を進める。

その後ろには良太郎も続き、3人で並んで結界内部を進んでいた。

自分の手を引いているマミを見つめながら、まどかはポツポツと語りだした。

「私、昔から特技や才能とかが何もなく、いつもさやかちゃんや仁美ちゃん…みんなに迷惑をかけてばかりで、それが嫌でしょうがなかったんです…」

こんな私でも誰かの役に立ちたいって、いつも考えてて…そんな時に、キュウベえやほむらちゃん、マミさんに会って、魔法少女の世界を知ったんです。

みんなを守るために怖い魔女と戦うマミさんが凄くかつこよくて、そんなマミさんに私、憧れたんです」

その口から聞こえるのは、目の前で自分の手を引く先輩への羨望。自分もこの人みたいに戦えたら。人の役に立つ事ができたら。その事に胸を張って生きていけたら。

「私、憧れるほどかつこよくなんかないわよ」

マミが振り返らずに、前を見ながら告げる。

「戦い始めた時なんて、弱い使い魔との戦いでも怪我ばかりだったし。負けて大怪我して、死んじやいそうになって、泣き喚いた事も一度や二度じゃないわ。今だってそう…私、強がってるだけなのよ」

まどかの手を握る手が、少しだけ震えていた。

まどかと良太郎からは伺えないが、その表情には影が落ちている。

「ほらね？　今もこんなに震えてる……　未来の後輩にいい所見せた
くて、強がつてるだけなのよ」

「マミさん……」

「良太郎さんも、こんな私に幻滅したでしょ？　都合のいい時だけ
先輩ぶって、いい所を見せようと無駄に張り切って……」

その言葉に、自分を貶める感情がにじみ出る。

きつと良太郎も、こんな自分の本性を知ったら幻滅し

「……そんな事ないよ」

彼の口から出たのは、マミの予想とは正反対の優しい言葉だった。
思わず立ち止まって振り返る。

「マミちゃん、1人でずっと戦ってきたんだよね？　誰にも認めら
れなくて、誰からも褒められないのに、傷ついても頑張ってきたん
だよな？」

自分もそうだった。

誰にも知られず、礼を言われる訳でもなく、それでも仲間と共に戦い続けてきた。

何故、そこまでして戦ってきたのか？

「それって凄い事じゃないかな」

「凄い…私が……？」

「うん。自分の時間を捨ててまで、他の人の時間を守るために戦って凄いことだよ」

自分がそれによつて不幸になろうとも、目の前の人たちが笑顔でいられるなら構わない。

それがマミの、そして良太郎が選んで走り抜けてきた、戦いと言ふ名の線路。

「マミちゃんは、今までずっと1人で戦ってきた…そろそろ、誰かに頼ってもいいんじゃないかな？」

一歩前に歩みだし、マミの手を握る。

男性に手を握られたことでほのかに顔を赤らめたマミに、笑顔を向けた。

「僕もいるし、まどかちゃんもさやかちゃんもいる。もうマミちゃ

んは、一人ぼっちなんかじゃないんだ」

「あっ……」

マミの口から漏れた言葉。

次の瞬間。その瞳から、大粒の涙が溢れ出した。

今までずっと1人ぼっちで戦い続け、誰にも相談できず、孤独という暗い一本の線路を進んでいた。

これからもずっとその線路が続いていくと思っていた。

だが、マミの前に降り立ち、手を差し伸べてくれる人達が現れた。共に戦うであろう未来の後輩達。そして、笑顔に向けてくれる1人の青年。

「良太郎さん……鹿目さん……」

涙を流しながら2人の名を呼ぶ。

「本当に……私と一緒にいてくれるの……？　一緒に、戦ってくれるの……？」

まどかと良太郎は一瞬だけ顔を見合わせた。
そのままマミに笑顔を向け、

「はい、私なんかでよければ」

「うん。僕も、一緒に戦うよ」

心からの偽りのない言葉を送った。

『マミ、聞こえるかい？』

それを合図にするかのように、マミの頭に響き渡るキュウベエの声。

『グリーンフシードがから魔女が生まれそうだ。 急いで！』

「っ…分かったわ！ キュウベエは、美樹さんを安全な場所まで避難させて！」

脳裏に響くキュウベエの声に返し、涙を拭ったマミは指輪を取り外すと眼前に掲げる。

指輪は瞬く間にソウルジェムへと形を変え、溢れる黄色い魔力の光がマミの体を包み込む。

やがてその姿は見滝原中学の学生服から、彼女の戦闘スタイルである魔法少女の姿へと変化した。

その後ろにいる良太郎達の視線の先には、この結界の奥を形作る無数のお菓子の山。

キャンディ、チョコレート、クッキーなど、巨大なものから小さいものまで無数のお菓子で埋め尽くされた結界の通路には、多数の使い魔の姿が。

「良太郎さん。鹿目さんのエスコート、よろしくね！」

「うん！」

良太郎の返事を聞き、足元に魔力を形成して跳躍。

リボンを解いて天井に引つ掛けると、先日のカメレオンイマジンのように空中を高速で移動しながら使い魔達にマスケット銃を乱射。その動きには一切の迷いも、戸惑いも、恐怖もない。

誰かが後ろにいてくれる。一緒に歩いてくれる。心に暖かい気持ちで灯る。

「もう大丈夫……私は1人じゃない！ もう、何も怖くない！」

「マミさん、凄い……！」

今まで以上に圧倒的なスピードと射撃で使い魔を蹴散らすマミの姿に、良太郎の背後にいるまどかは魅入られていた。

それはまどかが憧れた、人々を守る正義の魔法少女そのもの。自分も、あんな風にみんなを守れたら

「まどかちゃん、慌てちゃダメだよ」

「良太郎さん…？」

その気持ちを察したかのように、良太郎が話しかけた。

「叶えたい願い事、本当はまだ決まっていなくていいんでしょ？」

「…はい」

「この前マミちゃんが言ったよね。本当に命を賭けるに値する願いなのかどうか…それが見つかっていないなら、まだキュウベえと契約するべきじゃないって思う。」

今すぐじゃなくてもいい。君が心から叶えたい願いを見つけて、戦う事になってもいいと思ったなら…その時、契約すればいいんじゃないかな」

「良太郎さん…」

「まあ僕としては、まどかちゃん達に危ない事はしてほしくないっていうのが本音だけどね」

最終的に結論を出すのはまどか達だが、この考えだけは変えるつもりはない。

だからこそ、今、戦う力を持つ人が、まどか達を含めた周りの人々を助ければいい。

その思いを口にする前に、良太郎は異を決してライダーパスを取り出そうとする。

まどか達の目の前での変身するのも最初は戸惑っていたが、今の彼に戸惑いはなかった。

デンオウベルトを呼び出そうとしたその時、前線で戦っていたマミが突如後退してくる。

何事かと2人もマミと同じ方を向くと、使い魔の代わりにそこにいたのは、黒い髪の魔法少女　　暁美ほむらの姿。

「ほむらちゃん…！」

「どういづつもりかしら、暁美さん？」

「この先に行つてはだめ。あなたに、あの魔女は倒せない。鹿目まどかも危険な目に合うわ」

決め付けるように言い放つ。

だが、今のマミにそのような言葉を言つても意味はなかった。

「ご忠告ありがとう。でもね、はいそうですかって、私が素直に従うと思うかしら？」

ほむらとマミ、両者が互いの獲物である銃を同時に相手に向けたのは、ほぼ同時。

その瞬間、両者の間に割り込む影があった。

「ほむらちゃん、やめて！」

「っ!？」

両手を広げ、マミを守るように立ちふさがるまどか。

ほむらの顔が驚愕に染まり、それはマミに次の一手を使わせるのに十分。

即座に無数のリボンを生みだすと、何重にもまとめてほむらの体を縛り上げる。

魔力で生み出した巨大な錠前も、おまけでつけておいた。

「しまっ　!？」

「良太郎さん、先に行くわ!　鹿目さん、しっかり掴まってね!」

「え?　って、マミさああああん!？」

まどかが答える暇もなく、まどかの手を取ったマミは一気に跳躍。結界の奥へと走り去っていった。

残された良太郎がほむらを解放しようと近づく

「ほむらちゃん、ごめんね。今ほどくから　」

「私はいいから、早く追いかけなさい!」

ほむらには珍しく、焦りを交えた声。

「このままでは、巴マミが魔女に殺されるわ！」

「えっ……」

マミちゃんが　死ぬ？

言われた言葉の意味が、すぐには理解できなかった。

「おおい、良太郎お！！」

その時、バイクの排気音と聞きなれた声。

振り向くと、結界の入り口の方からこちらに近づいてくるライトの光　結界の傍に置いてきたデンバードと、それに跨っているモモタロス。

更にその周囲には、3つの球体が浮かんでいた。

「モモタロス！　みんなも！」

「やあつと追いついたぜ。で、てめえはそんなところで何遊んでんだほむほむ？」

「遊んでないわよ！　私はいいから、早く先に行きなさい！」

「モモタロス、ごめん！」

「あっ？」

一応断りを入れてからモモタロスをどかすと、デンバードに跨る。

「つて、お前なあ！ いきなり何すんだよ！」

「ほむらちゃんの事、お願いね！ みんなは僕と一緒に来て！」

『りょくかい』

『まかせい！』

『おっけ』

3通りの声を発する球体が、そのまま良太郎の体へと入り込む。それを確認すると、モモタロスとほむらを残し、デンバードで結界の奥へと走り去っていった。

一方的に残されたモモタロスが、地団駄と共に憤慨。

「あんの野郎！ 魔女と戦うのは俺だあ！ ほむほむ、さつさと抜け出せよ！」

「言われて抜け出せるなら、苦労しないわ…っ！」

抜け出そうともがいているのが分かるが、何重にも巻かれたリボ

ンが解ける様子はない。

それに業を煮やしたモモタロスは、最終手段に出た。

「だあああつ、まどろっこしい！ 体借りるぞっ！！」

「えっ？ ちょ、ちよつと」

ほむらの返事を聞く前に球体となり、そのままほむらに突撃。

赤い精神体となって入り込むと、足元から憑依の証である大量の砂が溢れ出す。

次の瞬間、ほむらの目が真紅に染まった。

「ぬりやあああああつ！！」

ほむらには似つかわしくない気合の叫びと共に、全身に力が溢れ出す。

それは強固なはずのリボンと錠前を一瞬で霧散させ、空中で体勢を立て直すとそのまま着地。

前髪を逆立たせ、赤いメッシュを入れ、目つきが今まで以上に鋭くなったMほむらが、不適な笑みを浮かべた。

「へっ！ まっ、こんなもんだな！」

『あ、あなた！ 人の体で何してるのよ！』

奥底へと押し込まれたほむらの意識が叫ぶ。

良太郎へのイマジンによる憑依は見ていたが、知っているのと体験するのではこうも違うものか。

「ああ？ 別にいいじゃねえかよ、助けてやったんだからよお」

『それとこれとは話が別よ！ いいから、さっさと出て行きなさい
』！』

「んな事知るかあ！ このまま良太郎達に追いつくぜ！ 行くぜ行くぜ行くぜえっ！！」

宿主であるほむらを無視し、おなじみのポーズの後、そのままの状態で結界を走り抜けていった。

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』 3 (後書き)

ども、ウェイカップです!

連続投稿しちまいましたぜひゃっほう!

今回はマミの心情と、名セリフ「もう何も怖くない!」のシーンに良太郎を入れてみました。

人知れず戦う運命を知っている良太郎だからこそ、この場面でマミを励ます役目にはピッタリだったかと。

このセリフが死亡フラグだったとは、この時誰が予想したでしょうか……(涙)

・Mほむら

ついに、やっちまいました……! まどマギキャラへのイマジン憑依! 最初の犠牲者? は、ほむほむinモモタロス!

やっとメインヒロイン? の本領発揮です! (そういう意味じゃないだろw

さて、ついに次回は第4話一番の大バトル。

良太郎達は、マミの運命を変えられるのか?

もちろん、『ただ』では終わりません。

結界内で4タロスが勢ぞろい。つまり……? (ニヤリ

では、ご感想お待ちしております。

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』

4

モモタロス以外のイマジン達を体に宿し、途中で何体かの使い魔に襲われるが、危なげながらも使い魔の攻撃を全て避け続け、一度もデンバードを止める事なく結界をひた走る。

余談だが、現在19歳の良太郎。モモタロス達としばし離れていた際に、バイクの免許は取得済みである。

やがて視界が開け、目の前に広がったのは、通路以上のお菓子が積み重なった結界の最深部。

その中心地から発射音が響き、相対する無数の使い魔を前に仁王立ちしていたマミが、今までの中で最大数のマスケット銃を一気に召喚。

手を振り下ろすと共に、100を超える銃身から一斉に攻撃が放たれた。

「ティロ・アヴァランチッ!」

ティロ・ファイナレが一発の攻撃に魔力を注ぎ込む対個人用攻撃魔法ならば、この『ティロ・アヴァランチ』はその名の通り、雪崩アヴァランチのごとき無数の弾丸による広範囲攻撃。

地面に降り注ぐ豪雨のような銃弾に身を貫かれた使い魔達の奥に、目的の敵はいた。

見た目はかわいらしい、子供が見たら喜びそうな外見の小さな人形。

だが、人々に不幸を撒き散らす魔女は、外見など意味を成さない。

この人形のような物体こそ、この結界の主『お菓子の魔女 シャルロッテ』。

ティロ・アヴァランチの着弾による衝撃に目を細めながらデンバードを停車させた良太郎に、近くで隠れていたまどかとさやか、そしてキュウベえが気付いた。

「良太郎！ こっちこっち！」

「さやかちゃん！ まどかちゃんも大丈夫？」

「はい、私達は大丈夫です」

「これで合流できたね。それに、マミの方もそろそろ終わりそうだ」

キュウベえの声に振り向くと、マミとシャルロッテの戦いも終盤を迎えていた。

「これで決めるわよっ！」

マスケット銃を手のひらで回転させ、銃身を掴んでフルスイング。シャルロッテはなす術なく上空へ跳ね飛ばされ、同時にマミが右手をかざす。

編みこまれた魔力の糸がシャルロッテを縛り上げ、全ての身動きを封じ、最大クラスのマスケット銃を召喚。

空中で止まったシャルロッテを狙い、力ある言葉を解き放つ。

「ティロ・ファイナーレっ!!」

限界の魔力を放出し、黄色い閃光がお菓子山の山をも貫き、シャルロッテの全身を包み込んだ。

戦いに慣れてないまどか達から見ても完璧な勝利。

勝利を確信したマミが、立ち上がって駆け出したまどか達に笑顔を向けた。

その瞬間、良太郎の全身に、感じたことのない悪寒が走った。

(何、これ……)

悪寒の出所を探ろうと、全ての神経を集中する。

理由は分からない。ただ、何かが自分の脳髓に叫び続けていた。同時に蘇るのは、先ほどほむらが叫んだ言葉。

『このままでは、巴マミが魔女に殺されるわっ!』

顔を上げ、ティロ・ファイナーレに貫かれた空間を見上げる。

そこから落ちてくるのは、”全身を包むサイズの攻撃”の直撃を受け、”腹部にのみ穴が開けて”落下するシャルロッテの姿。

良太郎は、無意識の内に全力で叫んでいた。

「マミちゃん！ 逃げてえっ！！」

「えっ……？」

マミが疑問の声を上げた、次の瞬間。落下していたシャルロッテの腹部に空いた空洞から、黒い物体が飛び出した。

長い体軀にピエロを思わせる奇怪な目と模様。

文字通り奇怪なこの姿こそ、かわいらしい外見に秘められたシャルロッテの本当の攻撃手段。

突然の事に呆気にとられたままのマミに向けて飛翔し、口を開き、無数のキバを見せ付ける。

口に生えたキバが何をするための物か？ 答えは単純。

対象物を蹂躪し、引き裂き、噛み砕くため。

まどかが口元を覆い、さやかが自分の身も省みずに駆け出し、キウベえが赤い瞳を輝かせる。

普通の少女であるまどか達がいくら叫んだところで、いくら走った所で、到底間に合うはずもない。

このままマミの体に、あの鋭いキバが覆いかぶさり

まどかも、さやかも、他ならぬマミ自身も、最悪のシナリオを脳内に描いた。

それは決して変えられない、決められた線路。

「…まだまだ！」

ただ1つだけ、彼女達には間違いがあった。

それは、この場にもう1人の人物　野上良太郎がいた事。

（まだ、終わってないっ！　僕が！僕達が、終わらせないっ！）

「ウラタロスっ！　キンタロスっ！　リュウタロスっ！」

これ以上の言葉も、まどか達がいる事への遠慮も捨て去った。

良太郎の確固たる意思に従い、彼に憑依していた3体のイマジンが即座に実体となって飛び出す。

最初に動いたのはリュウタロス。

「あいつ、撃つていいよね!？」

手にしたのは、彼の体色でもある紫色の巨大銃『リュウボルバー』。

ダンスを踊るように1回転を挟み、シャルロットへと銃口を向け、

「答えは聞いてない!!」

放たれた数発の光弾が。音速を超えてシャルロットに着弾、無数の爆発を巻き起こした。

衝撃で思わず目を閉じたマミの体に、青い糸が巻きつく。

「あ…えっ…」

何が起こったかを確認する前に、体が宙に舞った。

ちょうど地面に顔が叩きつけられたシャルロッテを遠目で見つ、マミの体は何者かによって抱きかえられた。

腿と背中に感じる感触。俗に言うお姫様抱っこでマミを支えているのは、ウラタロッドの先端から伸ばしたリールで、文字通りマミを自分の手元へ釣り上げたウラタロス。

「あ、なた…この前の…」

「やあマミちゃん。僕に釣られてくれて、ありがとう」

この場に似つかわしくない、いつも通りの甘い言葉。

直後、倒れていたシャルロッテが起き上がり再び口を開く。

恐怖に顔を引きつらせるまどか達とは違い、ウラタロスとリュウタロスには微塵も驚きはなかった。

お菓子の山を駆け上り、ちょうどシャルロッテの真上から跳躍したキンタロスの存在を知っていたから。

手に持つ黄色の巨大斧『キンアックス』を大上段に振りかぶり、奇声を上げるシャルロッテへ振り下ろす。

マミの魔力光と同じ黄色い閃光を放つ一撃は、黒い体躯を真っ二つに両断。

「ダイナミックチョップ……生」

着地と同時に技名を名乗ったキンタロス。
直後、叩き斬られたシャルロッテの体が、奇声と共に消滅した。

「まっ、こんなもんかな」

「勝った勝った〜！ ブイ！」

「俺の強さは、やっぱ泣けるでっ！」

黒い粒子を撒き散らして消えたシャルロッテを確認し、3人のイマジンが並び立つ。

その視線は良太郎へと向けられ、良太郎も笑みを返した。

「みんな、ありがとう」

「りよ、良太郎…さん…？」

背後から聞こえてきた、戸惑いに染まっているまどかの声。

隣に立つさやか、助けられたマミの顔にも、驚愕と戸惑いが浮かんでいた。

さやかに至っては、人差し指で良太郎と3人のイマジンを交互に指差している。

「え、その青いのと知り合いなの……っていつか、良太郎の体から出てきて、黄色い熊に紫の龍……！？」

「さやかちゃん、落ち着きなつて。かわいい顔が台無しだよ？」

「こー！　これが落ち着いていられるかつてのよお！　あんた達、一体」

さやかの言葉を遮り、ウラタロスがいきなりさやかに向けて特攻。「へっ？」と声を上げる前にその体に入り込むと、即座に跳躍。キントロスがまどかとマミ（抱えていたキュウベえもついでに）を抱え上げ、リュウタロスはウラタロスが憑依したように良太郎に憑依。

全員がその場を飛びのくと同時に、真上から急降下してきた黒い物体が地面のお菓子を食い破り、風穴を開ける。

着地したキントロスがまどか達を降ろし、その横にさやかと良太郎も着地。

その姿を見たまどかが、驚きの声を上げた。

「さ、さやか……ちゃん？」

「女の子に入るのは、趣味じゃないんだけどねえ。まっ、緊急事態って事でしょうがないかな」

『え、え！？　何これ、あたしどうなつてんのぉ！？』

青い髪が七三分けとなり、より濃い青のメッシュが入り、いつの

まにか眼鏡をかけていたうさやか。ウラタロス

ウラタロスが憑依した証でもある眼鏡に触れつつ、目の前の穴から出てきた黒い姿　さきほど倒したはずのシャルロッテを睨みつける。

「そ、そんな！　さっき、確かに…！」

「もう、めんどくさいなあ！　また倒していいよね？　答えは聞いてないっ！」

『リュウタロス、魔女に言っても通じないと思うよ？』

マミに答えたのは、同じく隣にいた良太郎　否。彼に憑依し、紫のメッシュと帽子を被り、瞳が紫に染まったR良太郎。リュウタロス

彼の特技でもあるダンスステップを踏みながら、右手をシャルロッテへと突き出す。

その中から聞こえた良太郎の声に、まどか達が更に驚いた。

「良太郎、さん…ですよね？」

『…うん、僕だよまどかちゃん。それと、キンタロスとリュウタロスは初めましてだよね？』

「良太郎、挨拶は後の方がいいんじゃないかな？」

ウラタロスの声に合わせるかのように、シャルロッテが咆哮。

周囲のお菓子を吹き飛ばすほどの衝撃が良太郎達を襲う。

「さて、どうやって釣り上げるか…」

『みんな、来るよ！』

良太郎の声に合わせ、戦える術を持つ全員が構えを取った。
緊迫した空気が漂い、シャルロッテの大きい瞳が良太郎達を睨みつけ、

「どけどけどけえええっ！！」

その空気をぶち壊す叫びと共に、何者がシャルロッテの顔面を全力で蹴り飛ばし、別のお菓子の山へと叩きつける。

反動で空中を3回転ほどうしながら着地したのは、ほむらに憑依したままのモモタロス。

鋭い目つきでシャルロッテを睨みつける。

「へっ、魔女つても大した事はねえなあ！　オラオラ、さっさと起き上がってこいよおっ！！」

『モモタロス！　ほむらちゃんも、大丈夫？』

「あつたりまえだろうがよ！　しっかしこの体、意外と使いやすいなあ」

『わ、私の体でそんな言葉遣いしないで！ さっさと出て行きなさい！』

「ちっ、わあっ たよ」

中から聞こえたほむらの声に渋々従い、憑依を解いてイマジン体で地面に降り立つ。

ウラタロスとリュウタロスもそれぞれの憑依を解き、良太郎とさやかが元の外見へと戻った。

「み、美樹さん… 暁美、さん？」

「… はっ！ ここはどこ！？ 私は美樹さやか！ 今をときめくスパー美少女！」

「お約束通りにボケなくてもいいわよ、美樹さやか… まあ、戸惑うのは私も同じだけど…」

「えと、良太郎、さん… あなた、一体…？」

『ピイイイイイイ！』

まどか達が戸惑いの声を上げる中、結界に響く別の存在の叫び声。全員が振り向くと、お菓子の山の頂上に座っていたシャルロツテの人形の体から、再びあの黒い体躯が生み出されていた。

その光景に、あの魔女の能力が判明。

「そうか…あの人形が魔女の本体で、あれを倒さない限り無限にある黒い姿を生み出せるんだ」

「へっ、だったら話は早いじゃねえか！ さっさと片付けて」

叫びながらモモタロスオードを構えた瞬間、良太郎達とシャルロットの間に突如、光輝く球体が現れた。

突然の乱入者に両者の動きが止まる。

そして、乱入者の正体にいち早く気付いたのは、良太郎達デリライナーク組。

「あれって、イマジンやないか！」

キンタロスが言った通り、そこに現れたのはイマジンの精神体。モモタロス達も他人に憑依する際などに用いるその姿は、シャルロットの黒い体躯の周囲を飛びまわる。

シャルロットもそれに興味を持ったのか、しばらくその動きを目で追っていたが、やがて飽きたかのように口を開き、球体に噛み付こうと口を大きく開いた。

その瞬間。球体に突如黒い穴が空き、周囲の空気をもの凄い勢いで吸い込み始める。

離れている良太郎達は座り込んでどうにか凌ぐが、目の前にいるシャルロットはすぐに限界を向かえ、その長い体躯が球体の中へと吸い込まれる。

物理法則を無視し、シャルロッテの本体から黒い体躯が全て引き寄せられ、数秒もしない内に人形の体から黒い体躯が消え去る。

同時にシャルロッテの本体は、意識を失ったかのようにお菓子の山から転がり落ち、結界の大地へと叩きつけられた。

何が起こったのか誰も分からない中、吸引を終えた球体が脈打つ。地面に着地し、砂の上半身と下半身が合体したと思うと、そこには一体のイマジンが現れていた。

本体を構成していた桃色に近い赤と、体躯の色であった黒が合わさった全身には、至る所にお菓子のような装飾。

右手を初めとした全身の至る部分には、黒い体躯に映えていたキバと、ピエロのような色合いの瞳。

可愛らしい外見と裏腹に、そこから放たれる気配は相当な敵意を撒き散らし、低い唸り声を上げている。

イマジンとは、憑依した契約者のイメージした姿を元に自己の姿を形成する。

ならば、シャルロッテのイメージ お菓子を元に生み出されたその名は『スウィーツイマジン』と呼ぶのが正しいか。

「イマジンが……魔女を、吸い取った……!？」

「っ！ てめえら、伏せろお!!」

直後、敵意を感じたモモタロスの叫びに反射的に全員が伏せ、その頭上をスウィーツイマジンの伸びた右腕が通り過ぎた。

サイズダウンはしたが、黒い体躯そのものとなった右腕は結界最

深部の壁を食い破り、再び体へと戻っていく。

あれをまともに喰らえば、上半身など一撃で噛み砕かれるだろう。その恐怖を想像してしまったのか、マスケット銃を取りこぼしたマミが座り込む。

「な、何なの…何なのよ、あれえ……！」

「ま、マミさん…」

口ではマミを心配しているが、まどかとさやかも気持ちは同じだった。

突然現れた球体に魔女が吸い込まれたと思ったら、いきなり人型の怪人へと姿を変えたのだ。そこから放たれる圧倒的な敵意は、戦いに慣れていないまどか達にすら絶望を感じさせる。

「…大丈夫だよ、みんな」

その絶望を振り払うかのように、良太郎が言った。

決して大きい声ではないが、まどか達の心を安堵させるかのような優しい言葉。

「ほむらちゃん、みんなをお願いね」

「…わかったわ」

ここで手伝おうとしても、今の自分では足手まといにしかならない。

それを分かっているからこそ、ほむらは自分を中心としたバリアを張り、まどか達を守るために防御に専念。

それを確認し、良太郎はイマジン達と共にスイーツイマジンに相対する。

「モモタロス、行ける？」

「当たり前だろうが！ 行くぜ良太郎！」

モモタロスが良太郎に憑依し、デンオウベルトを装着。

赤いボタンを押し、流れるミュージックに合わせてライダーパスをタッチ。

「変身！」

【SWORD FORM】

プラットフォームとなった良太郎の体にモモタロスの意思を示す桃型の電仮面、赤いオーラアーマーが装着され、彼の姿は電王・ソードフォームへと変身を完了した。

「俺、参上！」

「っ！？ 良太郎さん、が…電王！？」

ほむら以外の面々が驚き、モモタロスはデングァッシャーを取り外してソードモードに合体。

ウラタロス達もそれぞれの武器を構え、4人は同時にスイーツイマジンへと飛びかかった。

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』 4（後書き）

ども、ウェイカップです！

鬱展開回避ひゃっほおおおっ！！！！

マミさんが生きてるよおおおっ！！！！

もう何も怖くないいいいいっ！！

…失礼。あまりの嬉しさに興奮しました（反省

・ティロ・アヴァランチ

アニメで最初：でしたっけ？で使ってた広範囲攻撃に技名つけてみました。

その名の通り、雪崩の如く広範囲にマスケット銃を一斉に発射する魔法です。

・スウィーツイマジン

そして今回のクロスオーバーで、もつとも気合が入った部分。

『魔女の力で体を手にしたイマジン』の登場です。

契約したのではなく、シャルロッテの持つ魔力などを全て吸い取り、体を手にしました。

当然能力はシャルロッテ準拠ですが、かなり強いです。

・Uさやか

一瞬だけ登場、第2の被害者w

青繫がりです。いや、それだけ…マヂですw

さて、次回は現れたスウィーツイマジンとのバトル！

4人に暴れてもらいますよー！

では、感想お待ちしております！

折角なんで、一つほど設定を。

スイーツイマジン

結界内部に突如現れた未来人のエネルギーが、お菓子の魔女シャルロットの持つ魔力を吸い取り、シャルロットの持つお菓子のイメージから生み出されたイマジン。

シャルロットの攻撃手段である黒い体躯を全身に生やし、他のイマジンよりも圧倒的な力を持つ。

外見は、仮面ライダーWのスイーツドールパントを2/3ほど黒くし、全身にシャルロットの黒い体躯の目と口を生やした感じ。

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』

5

最初に動いたのはモモタロス。手にしたデンガッシャー・ソードモードをスイーツイマジンに対して振り下ろす。

それに対するスイーツイマジンは、右手の口の中から黒い剣のよな形状の武器を左手で引き抜き、デンガッシャーと鏖迫り合う。

「なるっ!?!」

『パワーが、凄い…!』

お菓子に彩られた外見からは想像できないほどのパワーにデンガッシャーが弾かれ、開いた腹部に強烈な右手の一撃が炸裂する。

「ぬおっ!?!」

たった一撃で数メートル吹き飛ばされるモモタロス。

どうにか膝をついて着地するが、スイーツイマジンが即座に駆け出し、体勢の整っていないモモタロスに突進。

その間に、ウラタロスとリュウタロスが割って入る。

「相手はセンパイだけじゃないんだよねっ!」

「お前、お菓子がいっぱいだけど嫌いだ〜!」

リュウバルバーの連射で隙を作り、ウラタロツドの鋭い斬撃がス
イーツイマジンを襲う。

その間にモモタロスは立ち上がるが、隣にはいつのまにか、キン
タロスが立っていた。

「モモの字、パワーなら俺の出番やでっ!!」

「んなっ!? 待てクマ」

モモタロスの返答の前にキンタロスは電王の体に入り込み、押し
出される形でモモタロスが弾き出される。

ベルトの黄色いボタンを押し、ソードフォームの時とは違うミニ
ージックが流れた。

【A X F O R M】

ライダーパスをタッチし、電王の姿が変化していく。

頭部のモモ型電仮面が消え去り、代わりにレールを走るのは黄色
い斧状の装飾。

展開されると、『金』の文字と一振りの斧を思わせる意匠の電仮
面となる。

同時に胴体のオーラアーマーも分離し、ちょうど前後が入れ替わ
る形で再び装着され、デンオウベルトのバックル部や全身の装飾が
金色に染まる。

『電王・アックスフォーム』。
キンタロスが憑依した際に変身する、力と防御に優れた電王のフォームの1つだ。

「俺の強さに、お前が泣いたっ！」

ソードモードのデンガツシャーを分離させ、1番、2番、4番を直列で接続し、1番と並列に3番を合体。

3番についていた装飾部が巨大化し、出現したのはアックスフォームの名を示す巨大な斧。キンタロスが得意とする武装『デンガツシャー・アックスモード』だ。

彼の名の元となった金太郎を思わせる、力に溢れた姿と巨大なマサカリを片手に、キンタロスはスウィーツイマジンにデンガツシャーを振り下ろした。

「どすこおいつー!!」

ソードモードよりも圧倒的に優れたパワーが、スウィーツイマジンの剣を叩き折り、その体に初めてダメージを与える。

そのまま自身が得意とする相撲のツツパリを交え、圧倒的なパワーで押し込んでいく。

が、それも長くは続かなかった。

跳躍から距離を取ったスウィーツイマジンが、全身から無数の黒い体躯を生み出す。

体に描かれていた目と口の数だけ生みだされた体躯が結界内を駆け巡り、四方からキンタロスや他のイマジン達に襲い掛かるが、その前にウラタロスが駆け寄った。

「キンちゃん、交代かな？」

「すまん、頼むでカメの字！」

キンタロスに代わって今度はウラタロスが憑依。青のボタンを押し、パスをタッチ。

【R O D F O R M】

頭部に出現したのは、海亀のような印象の電仮面。

オレンジの瞳と銀色の触覚を抱く電仮面が展開され、オーラアーマーはアックスフォームの胸部装甲が横に展開し、肩まで覆う青い装甲となった。

『電王・ロッドフォーム』。

ウラタロスが憑依した、中距離戦闘とキック力に優れた形態である。

「お前、僕に釣られてみる？」

デンガツシャーを1番から4番まで一直線に接続し、その長さが更に延長される。

全形態の中でも一番の攻撃範囲を誇る『デンガツシャー・ロッドモード』を振り回し、周囲に迫った黒の体躯を撃退。

見た目こそシャルロッテの放つ物と同じだが、数を生み出せる代わりに耐久力が犠牲となっっているようで、その一撃で黒の体躯は一斉に消滅した。

「あれ、見掛け倒し？ それじゃあ女の子にはモテないよっと！」

あっさり倒せた事に余裕が生まれたのか、そのままスイーツイマジンにデンガツシャーを突き出す。

武器の構成上、突き刺す事にも優れているロッドモードを巧みに操り、変幻自在の攻撃でスイーツイマジンを追い詰めるが、敵もただ攻撃を受け続けるつもりもなく、右手の体躯の口を向けると、中から無数のお菓子を模したエネルギー弾が発射された。

「つとお!？」

突然の遠距離攻撃に数発直撃を受けるが、ダメージはそこまで大きくはない。

スイーツイマジンもこの攻撃が有効と判断したのか、足を止めてお菓子弾を撃ちつつける。

咄嗟に近くのお菓子の山に滑り込み、どうにか攻撃に晒されるのは防いだが、この距離では自分の武器では戦えない事は明らかだ。

と、お菓子弾をステップを踏んで避けながら、リュウタロスが走

ってきた。

「みんなばかりズル〜い！ 僕もやる〜！」

「ちょ、リュウター!？」

慌てるウラタロスを他所に、飛び込む形で電王に憑依し、ウラタロスを弾き出す。

そのまま菓子子の山から飛び出すと、ベルトの一番下に位置する紫のボタンを押した。

流れる軽快なミュージックに合わせ、パスをタッチ。

【GUN FORM】

頭部に現れたのは、リュウタロスのイメージであるドラゴンを模した電仮面。

オーラアーマーはソードフォームと同じ構成となり、両胸の部分の赤い装甲部が上部に展開。両肩の位置に龍の爪が玉を握っているような形態の紫のオーラアーマーとなった。

『電王・ガンフォーム』。

リュウタロスが憑依し、スピードと遠距離戦に優れたフォーム。その武器は、フォームの名の通りの『デンガッシャー・ガンモーター』。

「お前、倒すけどいいよね？ 答えは聞いてないっ！」

ステップを踏み、回転を加えながらガンモードを連続発射。

一撃の威力はリュウボルバーより下がるが、特筆すべきはその連射力。

リュウタロスのフリーエネルギーが続く限り、マガジンの交換なども無く撃ち続けられる紫色の光球は、スーイツイマジンの放つお菓子弾を圧倒的に上回る弾幕で連続で発射され、逆にスーイツイマジンの全身に着弾。

「それそれえっ！」

まるでダンスを踊るかのように更にステップと回転を挟み、遊んでいるかのように声をあげ、時折止まってはデンガツシャーを発射。圧倒的な連射にスーイツイマジンが膝をつき、チャンスとばかりにリュウタロスはライダーパスをタッチ。

【FULL CHARGE】

ベルトから光の閃光がデンガツシャーに走り、両肩の玉『ドラゴンジェム』と連動して銃口に光が集まっていく。

注入されたフリーエネルギーが紫の巨大光弾となり、銃口はまっすぐスーイツイマジンへ。

「いつけええつ!!」

デンガツシャーの引き金を引く。

放たれたガンフォームの必殺技『ワイルドショット』が、電撃を纏ってスイーツイマジンに迫る。

高い威力を持つ一撃に、リュウタロスは勝利を確信した。

だが、スイーツイマジンは膝をついたままで右手を突き出す。

右手の体躯の口が開かれ、ワイルドショットは突き出された右手に着弾し、その一撃を真正面から受け止めた。

「っ!？」

攻撃を放ったリュウタロスだけではなく、その場にいる全員が驚く。

ワイルドショットを受け止めた右手の口はそのまま細かく動き続け、少しずつだが光弾が削り取られていた。

信じられない事に、口で受け止めたワイルドショットを、文字通り『食べている』のだ。

やがてワイルドショットは影も形も無くなり、スイーツイマジンは立ち上がる。

そのままリュウタロスに向けて駆け出すと、驚きで身動きが取れないリュウタロスに右手を叩き付けた。

「うわあああっ!!」

「っ！ この、菓子野郎があっ！」

リュウタロスを援護しようと、3方向から同時に攻撃を加えようと迫るモモタロス達だが、スウィーツイマジンは全身の口からお菓子弾を全方位に発射。

間髪入れず、モモタロス達が吹き飛ばされた。

「あれはイマジン…未来からこの時間にやってきた侵略者。そして、イマジンと戦ってるのがあの電王…良太郎と、彼の仲間のイマジン達よ」

少し時は遡り、ほむらが展開したバリアに守られたまどか達。バリアを維持しながら、電王やイマジンの情報をほとんど持つていなかったまどか達に、自身が良太郎から聞いた情報を説明するほむら。

その眼前では丁度、ウラタロスがロッドフォームになっていた。姿どころか人格すら変化させ、変幻自在の戦いぶりを見せる電王の戦い方に、まどか達は驚きを隠せない。

「えと、今の青いのがウラタロスつてので、赤がモモで黄色が金太郎で……」

「あつ、今度は紫……リユウ、ちゃん……だっけ？」

スィーツイマジンがワイルドショットを受け止め、モモタロス達を一気に吹き飛ばしたのはその時だった。

少量のお菓子弾がほむらのバリアに直撃し、振動を起こす。

「ちょ、ちょっと！ あのイマジンっての、圧倒的じゃないの！？」

「ほむらちゃん！ 何とかできないの！？」

「…私はあなた達を守るので精一杯よ。巴マミは、見ての通りだしね」

バリアを維持しながら見下ろすのは、座り込んで震えるマミの姿。マスケット銃を持ったままガクガクと震え、とても弱々しいその姿は、先ほどシャルロッテと戦った時とはまるで別人。

今、マミの心にあるのは、先輩魔法少女としての誇りでも、まどかが共にいてくれると約束した事への喜びでもない。

恐怖。それがマミの心を支配している。

良太郎達が助けてくれなければ、自分は確実にシャルロッテに頭部を噛み砕かれていただろう。

これまでも戦いで傷ついた事は何度もあった。だが、あそこまで明確に死を感じたのは初めてだった。

今まで本当の意味で死を感じなかったからこそ、あまりにも衝撃的な死という事実。

それはまどか達も同様だった。

頭では理解しているつもりでも、それを実際に体感するのは天と地ほどの差がある。

マミが目の前で死んだかもしれない…目の前で起こったその現実が、嫌でも彼女達が一步踏み込んだ戦いの世界の現実を直視させる。

「わ、私…」

「…やっと分かったのね、巴マミ」

その感情に気付いていたほむらが、顔を向けずに声をかける。

「それが魔法少女の世界の真実。どれだけ正義を口にしても、どれだけ強力な力を持っていたとしても、それを覚悟しない人にこの世界に入る資格はないわ」

「っ！」

畳み掛けるようなその言葉に、マミが唇をかみ締める。

その態度に腹を立てたのか、立ち上がったさやかが声を荒げた。

「っ！　じゃあ、あんたはどうなのよ！　さっきから偉そうに言ってるけど、実際に誰かが死んだのを見たっていうの！？」

「見たわ。もう、何度もね」

即答。

質問したさやかはもちろん、まどかとマミも目を見開く。

そんな3人に向け、ほむらは何かしらの感情を込めた目を向ける。知らない人が見れば見下しているかのように思えるその姿の中、相対しているまどかだけが、その瞳に映る僅かな感情に気付いた。

（ほむらちゃん…悲しんでる……？）

そんなまどかの心を知ってか知らずか、ほむらは懷からグリーンシードを複数個取り出し、マミの足元へと放り投げる。

その黒い輝きと照らし合わせるかのように、マミのベレー帽に装着されているソウルジェムには、かなりの濁りが溜まっていた。

「今のあなたでは、些細な事で濁りが限界まで溜まってしまっわ。そして、決めなさい。その感情を知って、この先どうするのか」

それっきりほむらは顔を向けず、バリアの維持へと集中する。

マミは足元のソウルジェムをじっと見つめ、良太郎達にスイーツイマジンの追加の砲撃が炸裂した。

「うわああああっ!!」

吹き飛ばされたリュウタロスの憑依が強制的に解かれ、体から弾き飛ばされる。

憑依が解けた良太郎は電王・プラットフォームとなり、痛む体を押さえながらもどうにか立ち上がった。

が、今のダメージは相当の物だったようで、足取りはかなりおぼつかなかった。

「良太郎！ リュウタ！」

「カメ、クマ！ 意地でもこいつぶっ倒すぞっ!!」

「当たり前やつ!!」

比較的ダメージが少ないモータロス達が、一斉にスイーツイマジンに突っ込む。

その間に良太郎は、倒れたままのリュウタロスへとおぼつかない足取りで駆け寄った。

「リュウタロス…大丈夫…!？」

「ボクは、何とか…でも、良太郎……!」

声をかけられたリュウタロスのダメージは見た目ほど深刻ではなく、ギリギリ戦線に復帰できるといった具合か。

それよりもリュウタロスにとってショックだったのは、良太郎の体を傷つけてしまった事だ。

自信を持って放ったワイルドショットが防がれ、モモタロス達も加えた4対1の状況でさえ、力の差を見せ付けられた。

何よりも、慕っている良太郎の体を傷つけてしまった事。それが、リュウタロスにとって一番ショックな出来事だった。

その心情に気付いてか、良太郎はリュウタロスの肩に手を置く。

「僕は大丈夫：リュウタロス、まだやれるよね？」

「っ！ うん！」

良太郎の励ましを受け、手を借りて立ち上がるリュウタロス。

だが、このままでは圧倒的に不利な状況に変わりはない。

ソード、ロッド、アックス、ガンの4フォームの連続使用による疲労とダメージの蓄積。

何より、スライツイマジンの圧倒的な力と、全方位をカバーできる黒い体躯とお菓子弾による広範囲攻撃。

このまま通常のフォームで戦っても、負けるのは目に見えている。

（だったら、アレでいくしかない……！）

残された手段はただ一つ。

だがこの方法には特殊な条件が必要であり、何よりもモモタロス

達4人の力が必要だった。

近くにいるのはリュウタロスのみ。モモタロス達3人はスイーツイマジンの相手に精一杯であり、こちらに駆け寄ろうとすれば背中を撃たれるのは目に見えている。

ならば自分が近づくしかない。そう判断し、良太郎はリュウタロスに振り向いた。

「リュウタロス、行く」

「っ！ 良太郎、離れろおっ！！」

突如響くモモタロスの声。

振り向くと、右手でモモタロスを持ち上げ、足でキンタロスを踏みつけ、背部の体躯でウラタロスを締め付けるスイーツイマジンが顔を向けていた。

そこから放たれた100発以上のお菓子弾が、良太郎とリュウタロスに襲い掛かり、

「ティロ・アヴァランチッ！！」

響いた言葉と共に、良太郎とお菓子弾の間に降り注ぐ黄色の弾幕による流星。

迫るお菓子弾を全て撃ち落とし、スイーツイマジンにもダメージを与え、その隙にモモタロス達が脱出。

上空から攻撃を放ったその少女は、回転を加えて着地する。

「ごめんなさい、遅れてしまったかしら？」

「マミちゃん!？」

攻撃の主　巴マミが笑顔で答えた。

彼女がいたはずの後方を見てみれば、マミが抜けた事で、まどか達3人と1匹しか中にいないほむらのバリア。

先ほどまでスイーツイマジンの力に絶望し、ソウルジェムが濁るように心を汚染されていた彼女はもういない。

ほむらから受け渡されたグリーンフシードで穢れを消し去ったソウルジェムと同じく、まばゆい笑顔を良太郎に向けていた。

「マミちゃん、大丈夫なの？」

「ええ。さすがにさつきは取り乱しちゃったけどね」

シャルロツテの攻撃に恐怖し、スイーツイマジンの力に絶望し、力の源であるソウルジェムが濁り、戦える状態ではなかった自分の姿を思い出す。

それでも、目の前で戦う良太郎達を見て、彼女の心に変化は訪れた。

決して諦めず、何度も立ち上がる姿。

それは彼女がずっと続けてきた、正義の魔法少女の姿そのもの。

「怖くない…って言ったら嘘になるけど、それでも私はずっと前に決めてたの。みんなを助ける、正義の魔法少女であり続けるって。それを思い出させてくれたのはあなたよ、良太郎さん…いえ、電王って言った方がいいかしら？」

「マミちゃん…」

「今更お願いなんて出来ないかもしれないけど…もう一度聞いわ」

良太郎にまつすぐな瞳を向けた。

「私と、最後まで一緒に戦ってくれる？」

『僕と、最後まで一緒に戦ってくれる？』

それは、先ほど交わした約束の言葉。

そして何の偶然か、良太郎がモモタロスと交わした契約の言葉でもあった。

だから、良太郎がこの願いを断る事など有り得ない。

「うん！　一緒に戦おう！」

「ええ！　魔法少女と電王のコンビ結成ねっ！」

掲げた手を叩き合わせ、2人はスウィーツイマジンに向き合う。
どうにかスウィーツイマジンを退けたモモタロス達も、一度体制を
立て直すためにこちらに駆け寄ってきた。

「こつちも負けてらんねえぜ！　おい、良太郎！」

「うん！　みんな、アレいくよ！」

それだけで、4人のイマジンは良太郎の考えを察知。
ちょうど4人揃っている。

このイマジンを倒すという同じ決意　必要な条件も満たしてい
る。

「よっしゃあ！　てんこ盛りいくぜっ！！」

モモタロスの声に合わせ、良太郎に向けて全員が精神体となって
飛び込む。

その状態でケータロスを取り出し、プッシュするのは4つのボタ
ン。

【モモ！　ウラ！　キン！　リュウ！】

【C l i m a x F o r m】

最後にサイドキーを押し込むと、響くのは今までと違う音声。
デンオウベルトにケータロスを装着し、ここまではライナーフォームと同じだが、次の変化は違った。

新たに装着されたのは、赤を基調とした丸みを帯びた装甲。全身にレールが走り回る特徴的な装甲だ。

更に、モモタロス達の意味を秘めた4つの電仮面が虚空に生まれ、各部位に合体。

左肩にはアックスフォーム。右肩にはロッドフォーム。胸にはガンフォーム。頭部にはソードフォーム。

更にソードフォームの瞳部分が、まるで桃の皮が向けたかのように左右にスライド。額部分に4色のカラーが追加された。

「俺達、参上っ！！」

モモタロスの声を合図にして、変身が完了。

『電王・クライマックスフォーム』。

てんこ盛りという通称通り、4人のイマジンの力を全て結集した、電王の最強形態である。

「か、顔が4つ…?」

「つて、皮が剥けたあ!？」

「暁美ほむら。あれはなんなんだい？」

「…私に聞かないで」

バリアの中でその光景を見ていたほむら達も、そのとんでもないフォームに空いた口が塞がらず。

間近で見てしまったマミなどは、完全に呆けていたが、動き出したスイーツイマシンに我を取り戻すと、マスケットを構える。

「それで、作戦はあるのかしら？」

「へっ！　んなもん決まってるっ！」

『まっ、てんこ盛りならやっぱりこれかな』

『真正面から力づくやっ！』

『当たって砕けろって奴だよね』

「ふふ、たまにはいいかもね！」

お菓子弾を無数に撃ちだしたスイーツイマシンに対し、先に動いたのはマミ。

無数のマスケットを生み出し、ティロ・アヴァランチでそれらを迎え撃ち、互いの放った全ての弾丸が相殺される。

「いまよっ！」

「おっしゃあ！」

その隙に突っ込んだモモタロスは、抜き放ったデンガッシャー・ソードモードを真正面から振り下ろし、ガードのために掲げた腕ごとスイーツイマジンを連続で切り裂く。

4人のイマジンの力を1つに集約したこの形態だからこそできる、正真正銘真正面からの力技だが、スイーツイマジンに対してはこれが最も有効だった。

マミの援護射撃も重なり、スイーツイマジンがデンガッシャーの一撃を受けて吹き飛ばされる。

『マミちゃん!』

「ええ!」

良太郎の声に合わせ、マミが巨大マスケットを召喚し、モモタロスがケータロスのボタンを押し、続けてライダーパスをタッチ。

【CHARGE and UP】

「必殺! 俺達の必殺技!!」

もはやまともに動けないスイーツイマジンに向けられる巨大な銃口と、分離して虹色に輝くデンガッシャーのソード先端。

「ティロ・ファイナーレッツ!!」

「クライマックスバージョンッ!!」

放たれた閃光と、上空から振り下ろされる虹色の刃を防ぐ術もなく、2つの攻撃が時間差でスイーツイマジンの直撃。

エクストリームスラッシュの傷口から光が溢れ、スイーツイマジンの体は爆発四散。

お菓子の結界も徐々に消失し、周囲の景色が見滝原病院の傍に広がる林へと戻った。

木々の間から夕日が差し込む中、変身を解いたマミの前にいたのは、同じく変身を解いた電王クライマックスフォームを形成していたモモタロス達4人と良太郎の姿。

離れた場所からまどか達も駆けつける。

「マミさん！ 良太郎さん！ 大丈夫ですか!？」

「ええ、心配かけてごめんなさい」

「でも、驚きましたよ！ 良太郎達見てたって思ったら、いきなりグリーフシード使って飛び出しちゃうんですから!」

「まったく。君はそんなに無茶をする娘じゃなかったと思うけどね」

「雑談は後回しにしないわ。まだ終わってないわ」

そんな彼女達を現実に戻したのは、未だに変身を解かないほ

むらの声。

その視線を追ってみれば、さきほどの結界でスイーツイマジンに力を吸い取られた魔女、シャルロッテの姿があった。

「結界が消えたのに、まだ動いてる！？」

「でも、かなり弱ってるみたいだ。結界を維持できるほどの力を失ったんだね」

キュウベえの言う通り、シャルロッテにはもう魔女としての力は残っていなかった。

イマジンに全ての力を吸い取られ、口から漏れるのは弱々しい息遣いのみ。

その小さい体躯に向け、ほむらが拳銃を向ける。

「今の内にとどめをさすわ」

「ま、待ってほむらちゃん！」

「っ！？」

ほむらの引きかけた指を止めたのは、まどかの声。

まどかはほむらとシャルロッテの間に立ち、震える手で拳銃を押さえる。

「あの子、もう人を襲う力は残ってないんでしょ！？　だつたら殺さなくてもいいじゃない！」

「何言ってるのまどか！　あの魔女がまた力を蓄えたら、また人を襲うわ！　あなたはそれを分かつてるの！？」

「分かつてる！　魔女がそういう存在だつて言う事は！　でも……」

振り返った視線の先には、今にも枯れそうな息遣いと薄く閉じられた瞳の小さな存在。

魔女が人を襲う存在とは知っている。皆を絶望から守るために、ほむら達が戦う存在だという事も理解しているつもりだ。

だが、心優しいまどかには、こんな状態のシャルロットを一方的に殺す事など出来なかった。

「私には出来ない……こんな弱って、助けてって手を差し伸べてるのに……それを見殺しにするなんて……！」

「そいつは、バマミを殺そうとしたのよ！　あなたは、そんな敵を助けようと言うの！？　いい加減に　」

「心配ねえよ。こいつにはもう、誰かを襲う力なんて微塵も残ってねえからよ」

そこに助け舟を出したのは、意外にもモモタロスだった。

イマジンは精神生命体。元々他者の存在や力を感知するのに優れている中でも、モモタロスが力を感じ取る能力は、他のイマジン達

よりも圧倒的に高い。

その彼が言っているのだ。良太郎はもちろん、他のイマジン達もそれを疑う事などはしない。

それはまどかの親友であるさやか。そして、実際に戦ったマミも同じだった。

「あんたの負けよ転校生。こうなつたまどか、テコでも動かないしね。」

「…狙われた身としては不謹慎だけど、私も構わないわ。人を襲わないって言うなら、無理に倒さなくても、ね。」

「……っ！」

他の全員の意見が一致しているのを察し、ほむらが舌打ちと共に拳銃を降ろす。

まどかはそのままシャルロッテに振り向くと、膝をついて手を差し出した。

「大丈夫だよ。怖くないから…ね？」

笑顔を向けるまどかに警戒を解いたのか、ゆっくりとその手に触れるシャルロッテ。

まどかはシャルロッテの腕をしっかりと握り、そのまま胸に抱きかかえる。

その暖かさに満足したように、シャルロッテはゆっくりと目を閉じ、睡魔に身を委ねた。

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』 5（後書き）

ども、ウェイカップですっ！

どーにかスランプ脱出っ………したと思いたいw

今回はマミさん生還ヒャッホイ！の後の展開になりました。

スーツイマジンに対して、全フォーム連続変身からのてんこ盛りという、電王尽くしとなっております。

・マミさんにとっての魔法少女

マミは5人の魔法少女の中でも、一番『正義の魔法少女』としての自覚を持っていると思います。

今回の話で、自分が体験してきた戦いの世界の真実をまどか達と共に目の当たりにしましたが、良太郎達の戦いを見て吹っ切れたといった感じです。

当初はシャルロッテ戦後、戦いに対して恐怖症になる予定だったんですが、やっぱマミさんにはずっと正義の魔法少女でいてほしかったもので。

これからどうなるかは、次回以降の展開をお楽しみに。

・クライマックスフォーム

書き方が…セリフの書き方と電王の動き方が…書けないっ…！

僕の小説では、変身後もキャラ名称は変身者（ディケイドなら士、オーズなら映司）となってるので、こういつてんこ盛り系はほんっとう書けばいいか分からんっ！

今回はメイン人格？がモモタロスって事で彼主体で書いてますが、これで分かりやすいのかなあ…？

・シャルロッテ無力化

まどかの胸の中で寝てる……だっ！？

設定としてですが、イマジンに力を吸い取られた魔女は、今回のように魔女としての力を失います。

魔女によってはそのまま消滅しますが、シャルロッテはどうか生き残った形になりました。

もちろん、今後の展開を踏まえた上での生存です。

さて次回は、シャルロッテを保護？した後のお話。

では感想お待ちしております

余談 まどマギゲーム化ヒヤッホイ！

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』

6

「おゝ！ ほんつとーに壊しても元通りだゝ！ おっもしろゝ」

「こらさやかっつての！ 話が進まねえだろうが！ ガキは大人しく座つてろ！」

「おつ、やる気い？ あんたらイマジンつて、結界内じゃないと実体になれないのよねえ…！」

「ニヤリつて擬音が聞こえそつな顔すんじゃ ねえつて、てめえは言つた傍から何やらかしてんだコラア…！」

「甘いわねモモタロスつての！ 戦いは既に始まつてんのよ！ 鬼さんは大人しく、さやかちゃんの正義の拳を受けるがいいわ！」

「上等だあ！ ガキだろうが手加減しねえぞ！ 表出るお！」

「あ、あのモモタロス…もう少し、静かにしてくれない？ こつちの話進まないんだけど…」

「美樹さんも、あまり部屋を散らかさないでくれると嬉しいんだけど…」

契約者である良太郎、家主であるマミの声に、砂状態のモモタロスとさやかは同時にそつぽを向く。

似たもの同士というか何と云うか、直接知り合つてまだ1時間も経っていないのに、悪友といった感じであつた。

シャルロッテの結界内での戦いを終え、全員が話せる場所という名目で、1人暮らしのマミの家に移動した良太郎達。

イマジン達を抜かせば自己紹介は既に終えていたが、それはあくまで表面的なもの。

良太郎の真の姿 電王に関する事柄も含め、ちょうど一通りの説明を終えた所だ。

ちなみに、キンタロスとリュウタロスには、ハナやオーナー達への連絡のために先にデンライナーに戻ってもらった。

ウラタロスも行ってもらう予定だったが、「センパイだけでこれから先の事決めるなんて出来ないでしょ」と言われ、事実その通りなので残ってもらった。

「時の列車、デンライナー……」

「過去を変える事で未来を自分の住みやすい世界に変える、未来からの侵略者……イマジン……」

「で、それを食い止めるために、時間の影響を受けない……えと、何だっけ？ とつきゅーけん？」

「特異点だよ、さやかちゃん。その特異点が僕とハナさん」

「イマジンの支配も受けつけない良太郎が時を守る電王になって、僕らと一緒に時間を越えてイマジン達と戦って、時の運行を守ってるって訳」

まどか、マミ、さやかの確認に良太郎とウラタロスが答えた。
この場にいないハナの事もきちんと説明済みだ。

「ふえー……魔法少女だけじゃなくて、仮面ライダーまで本当に現れるなんて……」

紅茶を一啜りして呷くまどか。

魔法少女　ほむらとマミ、キュウベえとの出会い。電王　良太郎やイマジン達との出会い。

ほんの数日前までは何の変哲もない日常を生きていたまどかやさやかにとって、ここ最近の変化はとんでもないものであった。

良太郎は、まどかの口から出てきた一つの単語を聞き返す。

「まどかちゃん。この前のゲームセンターでも僕に言っただけど、その仮面ライダーって何なの？」

「えっ？……そっか、良太郎さんってこの時間の人じゃないから、知らないんですね」

改めて良太郎が別の時間の人間だと言うことを思い出した。

「1年前ぐらいからなんですけど、ここからちょっと離れた街で都市伝説が流れたんです。」

『街を襲う怪物と戦う、仮面をつけてバイクに乗るライダー……仮面

ライダー』って内容なんですけど」

「怪物と戦って、仮面をつけて、バイクに乗る……？」

「おいおい、まんま電王じゃねえかよ。俺達、見滝原なんかに来た事ねえぞ？」

「センパイ、離れた街って言うてたでしょ？ 1秒前の事ぐらい覚えようよ」

「うるせえカメ」

仮面、バイク、怪物、戦い。

内容だけを聞くなり、確かに電王を指していると思われる噂だ。

「ただ、その都市伝説の仮面ライダーと電王の姿が私たちが知ってる話と違ってたんで、本当に仮面ライダーなのか分からなくて……」

「あゝ、だからあの時の言葉は疑問系だったんだ」

写真と違うだの、確かにそのような感じの言葉だった事を思い出す。

良太郎が腕を組み、戦ってきた記憶を思い出すが、自分の中で仮面ライダーという名称を名乗った覚えはない。

「少なくとも僕は、仮面ライダーって名乗った事はないけど……モモ

タロス達は？　僕がデンライナー降りてから名乗ってたとか？」

「知らねえよ。パス自体オッサンが管理してて、はぐれイマジンが出た時ぐらいいしか電王になってねえんだからな。まっ、なかなかいいネーミングだとは思うがな」

「確かに、ただの電王ってだけじゃ味気ないかもねえ。僕らも仮面ライダーって名乗ってみる？」

「まあ悪くはない、って思うけど……とりあえず、それはまたにしよう」

名称に関する話を打ち切り、良太郎が目で指したのは、向かいに座るマミ。

「マミちゃん。さっきから気になってるんだけど……」

「何かしら、良太郎さん？」

「うーん、なんて言えばいいのか……その子、さっきから何してるの？」

マミの頭部　正確には、頭の上にちょこんと座っているぬいぐるみのような姿。

結界内でまどかが保護した、お菓子の魔女・シャルロットであった。

マミの頭上が入ってるのか、ツインテールをいじりながら何

やらご機嫌さんである。

「うーん、言葉が分からないから、何をしてるかと言われると私も分からないんだけど……あつ、こら。髪の毛噛まないの」

「……だつたらさつさと倒したらどうなの、バマミ」

ソファに座ったまま、今まで言葉を発しなかったほむらが口を開く。

シャルロッテの保護に最後まで否定的だったので、その口調には若干、怒りの感情がこもっていた。

「その状態で、いつあなたの頭を噛み砕くのか分かったものじゃないわ。

魔女なんて所詮、私たち魔法少女と戦う存在。下手に感情なんて向ければ、後悔するのはあなた自身よ」

「たつく、あんたは少しは愛想良く出来ないのかしらねえ？ 友達出来ないわよ」

「別に。欲しいとも思わないわね」

飲み終えた紅茶のカップを置き、立ち上がって玄関へと向かう。

「ほむらちゃん？」

「前に言ったわよね野上良太郎。
私が戦うのは魔女と使い魔だけ。イマジンが魔女と組んでいようが、
知った事ではないとね」

「転校生、あんたねえ…！」

「間違った事は言っていないわよ。魔法少女は自分のためだけに魔法
を使う…そこにいる、例外を除いてね」

視線を向けるのは、シャルロッテを手に抱えたマミ。
2人の視線が交錯し、ほむらはそのまま部屋を出て行った。

「たつく、相変わらず口数が少なえなあほむほむは」

そんなほむらの態度に、モモタロスが不機嫌な口調を返す。
状況によっては今回のように共に戦ってくれるだろうが、あの様
子では本当に自分に利益がある時しか手伝わないといった印象だ。
言葉を止めたマミを気にかけたさやかが、わざとらしく声を張り
上げる。

「あの、マミさん！ あんな自己中魔法少女の言葉なんて気にしな
いで下さいね！ 魔法少女が自分のためにしか魔法を使わないなん
て、そんな事」

「いいえ。曉美さんが言う事は正しいわ」

マミの口から出た言葉に、さやか動きが止まる。

「暁美さんだけを言うつもりはないけれど、魔法少女は利己的な人が多いのよ。」

グリーンフィードを手に入れるために、使い魔をわざと放置して人を襲わせて、魔女に成長させてから倒す子だっているわ。それでも足りなければ、他の魔法少女から奪い取る子もいるし」

「まっ、そんなもんだろうねえ。そのグリーンフィードって、魔女を倒しても確実に手に入る物じゃないんでしょ？」

グリーンフィードがないと魔法が使えなくなる。それだけ自分がやられる可能性も増えるんだし、奪い合いになってもおかしくはないね」

グリーンフィードが必要な当人であるマミと、冷静なウラタロスらしい考え。

それとは全く異なる考えなのは、行動派なさやかとモモタロスだった。

「そんなのおかしいですよ！　だってマミさんは、他の人を守るために危険を承知で戦ってるじゃないですか！

人には無い凄い力を持つてるのに、それを自分のためだけに使うなんて…あたしは納得できない！」

「俺も青娘と一緒にだな。戦うのは好きだがよ、他の奴らがあぶねえってのを知っててほっとくってのは、気分が悪くなるぜ」

「へえ、センパイも随分しおらしくなっただじゃない？」

「うるせえカメ。俺だってせいちょーしてんだよ」

「つて、赤鬼！ 誰が青娘じゃーっ！」

「ああ！？ やるか青娘！」

再びモモタロスとさやかの顔が付き合わせる。

そんな中、顎に手をコツコツぶつけながら何かを考えていた良太郎が口を開いた。

「…そうかな」

「どういう事よ良太郎。あんた、転校生の肩持つ訳？」

「そついうつもりじゃないけど…そのグリーンフシード、さっきの戦いでマミちゃんにあげたんだよね？」

ほむらちゃんが本当に自分のためだけに戦っているなら、わざわざ貴重なグリーンフシードを使って、マミちゃんを助けるような事するのかな？」

『あっ…』

その場にいた全員がハツとなる。

良太郎だけが知るほむらの能力

時間停止については、事前に

ほむらから口止めされていたので、まどか達には伝えていない。

だが、あれだけ強力な能力を持ち、圧倒的な火力で敵を殲滅するほむらの実力はかなりのもの。

シャルロットやゲルトルト以外の魔女がどれだけの力を持つかは不明だが、ほむらが苦戦する事は少ないだろう。

それはつまり、ほむらはグリーンシードを比較的楽に集められる魔法少女だと言うことだ。

「ほむらちゃんは、まだ僕らに隠してる事がある。きっとその為に、まどかちゃん達と距離を取ってるんだと思うよ。きっと本当は優しい子だと思うな」

「そう、ですよね…」

「けっ、どうだかなあ」

まどかとモモタロスが反対の感情を示した。

「…曉美さんについては、とりあえず保留にしておきましょう。

今回助けられた手前、私は一方的に彼女と敵対するつもりはないしね」

「まあ、マミさんがそう言うなら…」

「それじゃあ、後決めなくちゃいけない事って…」

まどかが良太郎とマミを交互に見る。

良太郎も改めて佇まいを直し、マミをまっすぐ見つめた。

「マミちゃん。まどかちゃんとさやかちゃんも聞いて。

本来、僕らはこの時間への介入は許されないんだ。決められた未来を覆す事なんて、誰にも許されないんだから」

「ええ、分かってるわ」

過去を変える事など、誰にも許されない行為だ。

だが、過去を壊し、未来を改変する存在　イマジンを放置すれば、未来が次々と破壊される。

それを止められるのは、電王である良太郎だけだ。

「でも、魔女とイマジンが手を組み始めている以上、僕らはこの時間でもしないうで待ってる訳にはいかない。

デンライナーが直るまでだけど…僕らにも、魔女退治を手伝わせてほしい。いいかな？」

「ええ、喜んで。鹿目さん達もいいわよね？」

「はい！　良太郎さん、改めてよろしくお願いします！」

「モモタロスとウラタロスも、よろしくう！」

まどか達と良太郎の手が重なり、ここに電王と魔法少女のチーム

が結成された。

と、そこで良太郎がふと気付く。

普段ならマミやまどかの傍に在るであろつ、白い生物の姿が見えない事に。

「マミちゃん、キュウベえは？」

「あら、そういえば…どこに行つたのかしら？」

「へえ、これは凄いなあ」

既に面会時間も終わり、外を歩く人が誰もいない見滝原病院の傍の林。

結界が生まれた場所の中心地　良太郎とスィーツイマジンが戦いを繰り広げたこの場所に、マミ達に黙つて別行動を取つたキュウベえはいた。

もはや何も残つていないただの草木。

だが、キュウベえの赤い瞳にはハッキリと見えていた。

人の目には見えないが、まるで空をかき混ぜるように渦を巻く無色なエネルギーの奔流が。

「魔女のエネルギーを得たイマジン…体が無くなつても、これだけ

のエネルギーが残っているなんて」

絶望を撒き散らす魔女の力と、契約者の願いを叶える事で体を生み出すイマジンの力。

双方の力が合わさって生まれたスウィーツイマジンは、体を失ってなお、この場に強力なエネルギーを残していた。

キウウベえは空に向けて顔を向ける。

すると、背中の様式部分が開き、空に浮かぶエネルギーをその身に吸い取り始めた。

瞬く間に全てのエネルギーを体に吸収し、「きゅっぷい」とかわいらしい声を上げると、溜まったエネルギーの大きさに改めて率直な感想を述べる。

「凄い。たった1回で、魔女数十人分のエネルギーが回収できるなんて。これを上手く使えば、『魔法少女システム』なんかより、よっぽど効率よくエネルギーを回収できるじゃないか」

まどかはもちろん、魔法少女の契約者であるマミにすら話していないキーワードを次々と呟く。

何十回も同じ事を行って得るエネルギーを、たった1回で賄える。今まで彼が行ってきた方法より遥かに効率的で、遥かに楽な方法。効率のよい方法があるならそっちに移行するべきだ。

「さて、イマジンはどうやってこの時間にやってきてるのか、そろそろ本格的に調べ始めよう」

そう言ったキュウベエの周囲には、いつのまにか同じ大きさの小動物のような生物が集まっていた。

キュウベエは高い切り株の上に移動すると、全員を見渡して告げる。

「さあみんな。街に散らばって、イマジンが出現する原因を探すんだ。」

あつ、知られると厄介だから、まどかや野上良太郎達には見つからないようにね」

集まった小動物達 全く同じ姿をした彼らは、一斉に赤い瞳を輝かせた。

次回予告

取っただおおおおおおおっ！！！！！！

ほむらちゃんも、一緒に旅行行かない？

な〜んか、さやかちゃん見てると嫌な予感するんだよねえ…

イマジン…？ いや、違う……！

変身！

第5話『あれが、仮面ライダー……！』

時を越えて、願いが参上する！

第4話『魔法少女と電王のコンビ結成ね!』 6 (後書き)

ども、ウェイカップです!

劇場版オーズ見てきました! いやぁ面白かったっ!

何より、殿ですよ! 松平健ですよ! 暴れん坊將軍ですよ!!?
(握り拳)

若かりし頃の毎週月曜日、名探偵コンより暴れん坊將軍を見ていた俺に隙はなかったっ!

BGMだけで感涙し、白馬とライドベンダーの並走など……もう、もう……っ!

あつ、思い出したらまた見たくなっただ……近いうちに2回目行ってきますw

そんなオーズも、いよいよ来週で最終回……最後まで見逃せません!

・あむあむシャルロットちゃん

……か、かわええ……! てか、俺と位置かわれ(素

・電王×魔法少女

マミられなかったマミさんwと、正式に協力する運びとなりました。ようやく一つ目の鬱フラグ完全クリア……!

さて、次回は待望の『仮面ライダー編』に突入!

全く出さない訳ではありませんが、まどマギ側は少々お休みです。ここまで隠しに隠し通しましたが、いよいよ他作品のライダーにゲスト出演してもらいます。果たしてどのライダーか!?

一応今回の本編中に、すこおおおおおしただけヒントっぽい言葉を入れました。

直接描写ではありませんが、分かったでしょうか？

感想には書かないでね w

では、ご感想お待ちしております！

第5話『あれが、仮面ライダー……!』 1

ある晴れた日の午後。

本日の授業を終え、見滝原中学の校門を並んで潜った3人の少女がいた。

まどかとさやか。そしてもう1人は、緑色の髪にウェーブをかけた同級生。名を『志筑仁美^{しつきひとみ}』。

彼女らは、クラスの中でもっとも仲の良い3人であり、普段は稽古事に忙しい仁美も今日は少し時間があり、久々に3人で帰路に就いていた。

が、そこはやはり年頃の女の子同士。

和気藹々とガールズトークを繰り広げ、馴染みの喫茶店を出たのは夕方5時を過ぎた辺り。

「お小遣いピンチなあ……」と、会計の後でさやかが意気消沈する中、喫茶店が入っているショッピングモールを出ようとした3人の視界に入ってきたのは、見慣れない白のテント。

テントの横には赤い旗に白文字で『福引』の2文字が。

「『モール内店舗、1000円以上のレシートで1回参加』とありますわね」

「1000円……あつ、さっきの喫茶店のレシート!」

さやかを取り出したのは、喫茶店のレシート。

3人分の注文を一度に会計したので、ちょうど1000円と端数分の金額が印字されている。

よく見ると、福引の期限は今日までと、垂れ幕に書かれていた。

「せっかくだし、やってみようよさやかちゃん」

「え〜。あたし、こういう運ってからつきしなただけだなあ」

「まあはずれでもジュースが頂けるみたいですし、気楽にやってみたらどうです？」

「仁美までえ……よし、やってやろうじゃないのよー!!」

ズンズン足音を鳴らし、福引きのおじさんにレシートをズイッと突き出す。

おじさんの後ろに見えるボードを見れば、いくつかの上位景品は既出。

下位商品として『バツタ型の機械を装着して遊ぶベルト型おもちゃ』『先端が鬼のような赤いバチ』『様々な生物の絵が描かれたトランプ（中身は普通のトランプ）』『先端が書道の筆になる携帯電話』『メダルを入れるとバイクに変形する自動販売機』ミニチュアサイズだの、お子様向けのおもちゃから良く分からないアイテムまで勢ぞろいしている。

「この年でもちや遊びなんてやってられないわよ…狙いは、ただ一点!!」

握り締めるハンドルに力が込められ、ゆっくりと眼を閉じる。

周囲を静寂が支配し、後ろでまどかと仁美がゴクリと唾を飲んだ。
次の瞬間、さやか眼がカッと開かれ、

「ぬっっっっっっっっっりゃああああああっ！！！！！！！！」
「！」

裂帛の気合と共に、赤いガラガラ回転が大気を奮わせる。
大地に小気味の良い一陣の風が吹き、さよかの動きが停止。
中に入っていた無数の玉の1つが吐き出され、コンッと小さな音を
立てて落下した。

落ちた玉の色は 夕日を受け、黄金色に輝く色。

「おめでとうございます！ 特賞です！！ お客様には、こちらの
旅行券を進呈させていただきます！あす！！」

おじさんの景気の良い声と共に、さやかに差し出される封筒。
後方では係員のお姉さんが、『最後に出ちゃったわねえ』と言いつつ、
特賞の位置に赤いシールを貼っていた。
呆然としているさやかに、まどかと仁美が駆け寄る。

「凄い、凄いよさやかちゃん！ 特賞だよ！？」

「ええ！ おめでとうございます、さやかさん！」

「……」

賞賛の声を受けてなお、さやかは呆然としたままだった。

2人が顔を見合わせ、首を傾げる。

係員達も怪訝に思ったその時、さやかが動いた。

言葉を発さず、無言で拳を天に突き上げる。

それを祝福するかのように、白い雲に覆われていた太陽が顔を出し、さやかの全身を照らし、

「取ったどおおおおおおおおおおおっ!!!!!!!!!!!!!!」

今日一番の大声が、商店街に響き渡った。

「って事で、当たっちゃいましたあ!」

超絶な笑顔で景品を見せるさやか。

今日の魔女パトロールを終え、マミの自宅で紅茶を頂いていた良太郎が『目録』と書かれた白い封筒を見て笑みを返す。

「へえ、凄いねさやかちゃん」

「いやあ、あたしこういう運ってからつきしんだけど、まさか当たっちゃうなんてねえ！ はっ！ まさか、あたしに秘められた秘密の力が…！？」

「…キユウベえ、まさか契約……」

「いやいや、僕はずっと君と一緒にだったじゃないかマミ」

「言われてみれば」と納得するマミ。

その頭の上では、相変わらずツインテールを甘噛みしているシャルロッテ。

マミが頭からシャルロッテを膝に降ろしながら続けた。

「それで、日時と場所ってどこなの？」

「えーっとねえ」と答え、バッグから取り出した小さいハサミで上部を細く切り取り、中身を出す。

出てきたのは電車の切符が3枚、系列のホテルならどこでも泊まれる無料宿泊券が3枚、旅行先と思われる街のパンフレットが2束。見滝原駅から電車で2時間ぐらいの位置にある、開発途中の実験都市という煽り文句が書かれていた。

「1泊2日…日時は、今週の土日……」

文面を読んだ後、何故かさやかの顔が笑みから消沈へと真逆に変化した。

白から黒とはこの事を言うのか、と言わんばかりの変化っぷりである。

「さやかちゃん？」

「…あたし、土日にも用事あってダメなのよおおおお…！」

怒涛の涙を流しつつ、目の前のキュウベエの尻尾で涙を吹き出す始末。キュウベエは引きつった？表情を浮かべるが、お構いなしでズビズビ鼻まで囁んでいた。

しばらくして落ち着いたのか、まだ若干消沈したままだが会話に戻る。

ちなみにナニかで濡れたキュウベエの尻尾は、マミが少し距離を取りながらハンカチで拭いている。

「と、とりあえず美樹さんがダメだとして、これどうするの？ 当たたのは美樹さんなんだし、このまま処分しちゃう？」

「うーん、あたしは行けないけど……まどか、あんた行く？」

「えっ、いいの？」

「いいっていいって。あたし達のレシートで当てたようなもんだし、

誰か誘って行つてきなつて！」

「…そ、それじゃあ、貰っちゃおっかな」

さやかからチケットを受け取り、改めて内容を確認する。

人数は3人まで。さやかがダメとなると、仁美の顔が浮かんだが、『今週は土日もお稽古ですの。たまには遊びたいんですが…』という会話を思い出し、候補から除外。

そこで思いついたのは、目の前にいる先輩魔法少女。

「マミさん。一緒にどうですか？」

「ごめんなさい、魔女退治があるから、私も見滝原を離れるのはちよつとね…」

申し訳なさそうに断るマミ。
となると、残っているのは、

「…僕？」

もう1人、この場にいた人物。

別の時間の存在にして、時の戦士・電王こと、野上良太郎であった。

「うーん、後1人かあ……」

マミ宅からの帰り道、家が別方向のさやかとも別れたまどかは1人腕を組む。

旅行の件は、良太郎が一時保留とした。

それは、現時点で参加可能なのが良太郎とまどかだけと言う事だからだ。

まだ出会って数日ではあるが、良太郎が信頼の置ける人物だというのは分かっている。

だが、まだ少女といってもいい年齢のまどかと良太郎が2人旅。本人達は良くても、周りに変な噂が立たないという保障もない。

「誰に声かけようかなあ……」

クラスの面々や近所の友達。いつその事、バリバリ働いている母親と専業主夫の父親に譲ってあげようなどと考えながら歩いていると、その視線の先が固定された。

別の道から現れた黒い髪の少女　　暁美ほむらの姿を見つけたからだ。

「ほむらちゃん……?」

「……………」

ほむらもまどかに気付いたのか、足を止める。

相変わらずの無表情だが、先日シャルロッテとの戦いの一件で助けてもらった事もあり、会った時よりは話しかけやすくなっていた。

「えと、どうしたのこんな時間に？　もしかして……魔女？」

「……いいえ、ただの野暮用よ。あなたが心配するような事は起きないわ」

「そっか、よかった……………あっ！」

妙案を思いつき、手を打つ。

ほむらが顔に？を浮かべる中、バッグから先ほどのチケットを取り出すとほむらに差し出した。

「ほむらちゃん。今週の土日って時間ある？」

「予定は無いけれど……何かしら、これ？」

「えっと、ほむらちゃんも、一緒に旅行行かない？」

「……………えっ？」

突然の提案に、ほむらの顔の？が更に増えた。

「で、てめえは頑張ってる俺たちを差し置いて、桃色娘と旅行に行くって訳かこんちくしょうがあー!!」

「うーん、良太郎も女の子の扱い分かってきたみたいだねえ。これは将来が楽しみになってきたよ」

場所は変わって時の列車デンライナー。

良太郎から旅行の内容を聞いたモモタロス達が、それぞれの感想を言いながらコーヒーを飲んでいた。

「いいなあ良太郎！　ボクも旅行行きたいー！　連れてってー！」

「旅行先って、修行できるんか!？」

「しゅ、修行は出来ないと思うけど…まあみんなだったら僕の中にいれば大丈夫かな」

「オーナー。みんなこう言ってますけど、いいんですかあ？」

コーヒーのお代わりを注ぎながら、ナオミが言う。

「まあいいでしょう。全員はダメですが、何人か修理で残ってもらえれば構いませんよ」

「よっしゃあ！分かるじゃねえかおっさん！んじゃあ早速、ジャーンケーン」

「ごめん、今回は僕はパスさせてもらっよ」

ウラタロスの否定の言葉に意外という反応を返す良太郎。
基本的にプレイボーイで女好きであるウラタロスなら、この機会にまどかと交流を深めようと、真っ先に立候補すると思ったからだ。

「ウラ、どうしたのよ？ あんたらしくもないわね」

「良太郎。確認するけど、さやかちゃんには行かないんだよね？」

「そうだけど…それが行かない理由？」

「まあ、ね。な〜んか、さやかちゃん見てると嫌な予感するんだよねえ…」

「嫌な予感？」

「僕の思い過ごしならいいんだけどね。とにかく、僕は残らせてもらっんで、そこそこよろしく」

それ以上ウタロスはその話題を持ち出さず、良太郎の顔には疑問だけが残された。

その後、ジャンケンと言う名の話し合い？が行われ、結果的にウタロスとリュウタロスが居残り。

良太郎に憑依する形で、モモタロスとキンタロスがついてくる事となった。

リュウタロスが若干ごねたが、お土産を買ってくるという条件でしぶしぶ納得。

「んじゃ、今日は寝ようぜ。修理修理で体バッキバキだぜこっちはよお」

首をコキコキ鳴らし、体を伸ばしながら食堂車を後にするモモタロスを先頭に、次々と抜けていくイマジン達。

良太郎も手にした旅行のパンフレットを袋にしまいながら、もう一度行き先の名称を確認するかのようにつぶやいた。

「風都^{ふうと}、か…」

目に入ったのは、巨大な風車を中心とした街の写真だった。

第5話『あれが、仮面ライダー……！』1（後書き）

ども、ウェイカップです！

ってかほんつとーにお久しぶりです。

更新遅れまして申し訳ございません。

最近、仕事でまあ責任ある立場になってしましまして。

慣れない仕事まで回され、ぶっちゃけますとストレス溜まってました。

それを晴らすかのように、休日は友達を遊びにでかけて疲れて家で爆睡。

もちろん、仕事がある日も家で爆睡。

…はい、ただの言い訳ですみません><

皆さんにご満足いただけるかは分かりませんが、少しずつ執筆速度上げていきたいと思いますので、お時間ある時にでもお付き合いいただければ幸いです。

さて、本編の話！

・仁美ちゃん初登場

仲良し3人娘のウェーブ髪娘こと、仁美がここで初登場。ただ、セリフ数個だけというwww

本編でさやかにとってのキーキャラクターでもあった彼女。今作でも、とある重要な役割を与える予定です。

・仮面ライダー

はい、ここでよくネタバレ！

次回で良太郎達が向かうあの街。もちろん、彼らに登場していただきます！

若干TV本編と差異があるので、そこは次回のあとがきにて。

では、ご感想お待ちしております！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6472t/>

仮面ライダー電王×魔法少女まどか マギカ ～未来へ続く願い～

2011年10月10日11時43分発行